

日本で迷った外人の夢  
イリヤ・プーシキン



イリヤ・プーシキン

# 日本で迷った外人の夢

現代のおとぎ話

ある日、一人の外人が日本の森で迷った。  
暗くなった時、疲れ果てた彼は古い檜の木の下で眠った。目が  
覚めて、外人は忘れないように自分の夢を書き留めた。こんな  
風にしてこの本は書かれた。  
でもこの本を読んでいると、きっとあなた方も、あの檜の木の  
下で眠った外人の夢を見ている気になるだろう。



校正者：大久保裕美

橋本ひろこ

南雲誠一

挿絵：マーシャトカチェンコ

# 目次

幸せの尻尾を強く掴んで .....	5
サンタクロースの訪問 .....	9
インフルエンザ .....	12
雨の下にいる女の子 .....	14
プラモデル .....	15
私に何も聞かないでください .....	17
婦人科医の胸もどきどきする .....	20
ハンブルグでまた雨が降っている .....	23
顔の火傷も心の火傷も .....	25
英語のプライベートレッスンは危険 .....	27
とし子はどこ？ .....	28
可愛い忍者、早く帰って来てください！ .....	31
自分の恋から逃げないほうがいい .....	42
彼女は何という名前？ .....	44
傷ついた鶴を見つけて .....	46
ルームメイトの残り物には福がある .....	48
青い鳥を追いかけて .....	51
行ったきりの日本語の授業 .....	58
イスラエルのお医者さんのための日本人の妻 .....	62
上野から蝶々 .....	66
日本語の叙情詩には気をつけよう危険な詩集の発行 .....	68
部屋の床に何かある .....	74
学生の冗談 .....	75
誰にも話さないでおきましょう .....	76
普通の家族のありふれた物語 .....	80
狂想的な任務 .....	85
東京の法律 .....	100
日本から愛を込めて（翻訳：橋本ひろこ、ヤミン早苗） .....	103



# 幸せの尻尾を強く掴んで

私はガールフレンドを愛していなかったけれど、結婚することにした。

子供の時から彼女を良く知っている。

私たちはいつもいい友達だったが、特別な感情を何も彼女に感じなかった。単なる友達とは結婚しないつもりだったけれど・・・

私たちの両親は、ずっと昔から近所の良い友達だった。しばらくしてから、私たちの家族は一緒にロシアからイスラエルにきた。ある時から母と父は毎日「いつ彼女と結婚するんだ？」と聞き始めた。

両親からのプレッシャーに耐えることができなくなったので、ある日仕方がなく諦めた。ユダヤ人の結婚式は準備がたくさん必要なのだが。

しかし、突然結婚の前に私は遠い所へ旅行に出たくなった。多分望まない結婚から逃げたかったのかもしれない。

どこへ行こうか？

どこへでも。

どこか遠いところへ。

たとえば日本へ。

結婚式は一ヵ月後に行われるはずだったから、その間、どこかの遠い国で過ごしたかった。自分の夢と少しずつお別れするためだったのかもしれない。

そして、初めて私は日本にきた。日本のことばも風習もほとんど知らなかった。けれども日本はとても興味深かった。

東京から日本の観光を始めることにした。

日本の旅行案内書を見たとき、東京で一番面白いのは、上野辺りだと思った。

上野公園にはたくさん神社や寺や博物館などがある。もちろん、素晴らしい動物園も見つかった。アメ横の狭い通りを詳しく調べたかった。

くまなく見てみたかった。

上野を歩いていた時、時間が早く経つように感じた。

そんなある日上野公園で、とある神社に気がついた。そしてその神社のそばにはきれいな着物を着た人が大勢いた。「ここで何をしているのですか？」と聞くと、

「結婚式ですよ」と教えてくれた。

外にはたくさんの靴が脱いであったので、中で式が行なわれているのだなと思った。

結婚式の写真を撮るため私はカメラを構えた。日本の結婚式を見るのはこれが初めてだった。

突然桃色の着物を着た若い女性が神社から出てきた。そしてあたりを見回し、やがて私と視線が合った。彼女は近寄って来て、にっこりして私に話しかけた。「こんにちは。どこの国からいらしたのですか？私はゆみと申します。あなたはもう結婚されていますか？」

「いいえ」と私が答えると、

「日本風の結婚式に参列したいのですか？」とゆみさんは尋ねた。

「もちろん」

「じゃあ、急いで着替えましょう」

ゆみさんは私を神社の側にある建物に連れて行った。そこで別の女性が私をきれいな黒い着物に着替えさせた。その後ゆみさんは私を連れて神社に戻った。「靴は脱いでください」と入り口のところで私に言った。

中にはきれいに着飾った人々がたくさんいた。

一番奥に白い着物を着た細い女性がいた。すぐに「花嫁だ」とわかった。  
彼女の物腰が一番きれいだったけれど、顔を見ることはできなかった。  
彼女は顔にマスクをしていたのだ！  
ゆみさんは私を花嫁のとなりに連れてきて、そこに私を残して後ろへさがった。白の祭服を着た神主が私たちに近寄ってきて、何か言いだした。  
突然彼は盃を私に渡して、飲むように促した。その後神主は花嫁にその盃を渡した。  
彼女はうつむきながらマスクをとって少し飲んだ。  
皆は「おめでとうございます！」と口々に言い始めた。  
私はその結婚式に花婿として参列したのだとわかった！  
とても驚いたし、興奮もした。  
その時桃色の着物を着たゆみさんが私のそばに近寄って来て私の手を取り、神社から外へ連れ出した。  
彼女はその神社のそばにある建物に私を連れて行った。  
「ここで着替えてください。」  
私はそこに入って素早く着替えた。興奮で私の手は振るえていた。  
急いで外へ出たとき、外には誰もいなかった。  
私は神社の境内をあちこち歩き回ったけれど、誰も見つけることができなかった。皆はどこだろう？きれいな着物を着た人々や神主さんや桃色の着物を着たゆみさんや私の妻(?)など、皆いなくなっていた。  
神社の扉を叩いたら、見知らぬ神主さんが出てきた。  
私は「結婚式の参列者はどこですか？」と聞いた。  
神主さんは「誰の結婚式ですか？結婚式なんてありませんでしたよ。」と言った。  
いったいどうしたというのだろうか？  
私はその事で完全に戸惑ってしまった。  
結局、私は結婚したのかどうか、わからなかった。  
単なる冗談だったのだろうか？  
いずれにしても、私は日本を観光し続けることにした。  
日本を歩いて、少しずつその素晴らしい国へ恋に落ちていった。私の心は日本への愛でいっぱいになったと感じた。  
でも上野は私の一番好きな場所になった。上野を長い間歩いていた。  
上野公園のあちこちで、私はベンチに座っているホームレスを見た。あるホームレスの年寄りの女性が気になった。彼女はいつもキリッと背筋を伸ばして、動かないで座っていた。彼女の美しい顔にある目はいつも真直ぐ前だけを見ていた。  
でも私は彼女の目に潜む深い感情が気にかかった。彼女は普通の人ではないとわかった。  
日本では気遣いだけがホームレスになっているのではない。複雑な問題のせいで誰もがホームレスの状況に陥ることがある。私はその女性がホームレスであるのを見るのが心苦しかった。  
私は彼女のために毎日食べ物と飲み物を持っていき始めた。彼女はお弁当を受け取った時、私に何も話さなかったし私を見もしなかったが、少しだけ微笑んだ。  
でも、何日かの後で私の帰国の時が来た。荷物を運んで京成上野に歩いて上野公園にいる私のホームレスの女性を尋ねた。重い荷物のせいでお弁当を買わなかったけれど、彼女に少しお金を上げた。私は彼女に「祖国に帰る」と言った。  
彼女は初めて私を見て「ご無事に。ご結婚おめでとうございます。」と言った。  
どこから彼女はそのことを知ったのだろうか？  
私にとって日本を離れるのがとても難しかった。

私の心の一部分がそこに残ったように感じた。日本のどこかに私の妻が残ったかもしれない・・・

私の未来のイスラエルでの結婚は日本にいると現実ではないことに思えた。

だから、イスラエルに帰ったとき、両親に「もう結婚したので、結婚することができない。」と言った。

彼らは「いつあなたは結婚する時間があったのですか。たった今日本から帰ったばかりなのに。」

「日本で結婚した。」と私は答えた。

「誰と？」

「知らない。」

「どういうことだ？酔っ払ってでもいたのだろう？」

「どうあってももう結婚したので、もう一度結婚することはできない。」

「ばかばかしい！私たちに皆の前で恥をかかせるつもりか。どうして息子からそんなしっぺ返しを受け取らなければならないのか？どうあっても彼女と結婚させる。」

両親を尊敬していたから仕方がなく結婚の準備をした。

ユダヤ人の結婚式でラビ（ユダヤの神主）は、日本の結婚式のように、ワインの杯を花婿と花嫁に飲ませなければならない。でも、私に杯を渡したとき、突然ラビは「あなたはもう結婚しているので、この女性と結婚してはいけません。もうあなたは杯を飲んだのだから！」と言った。

もちろん彼の一言の後、結婚式がとりやめられた。

すぐ皆は叫び始めた。怒っている花嫁の親戚の顔と私の親の恥じ入った赤い顔が交互に見えた。

私はその時に感じた恥を今でも覚えている。

両親が怒るのは当然で、私と会いたがらなくなった。もちろん私の花嫁はどこかへいなくなった。

私の生活は少しずつ普通に戻った。

でも・・・

私が日本から帰った後、妙なことが私を苦しめ始めた。ほとんど毎日私の頭の中である人々が会話をしていた。でも、私の知らない言語で話していたので、彼らの言葉はぜんぜんわからなかった。

私の両親は医者で私も少し医学を知っていたから、「精神分裂病」だとすぐ思った。

でもだいたい精神分裂病の病人は頭の中で聞こえる声がよくわかるようだ。

自分の頭の中でわからない言語で話す声を聞くのは普通ではなかった。

ある日私は彼らが言う言葉を書きとめた。でも「ナゴヤ」と「ジシン」という二つの言葉だけしか聞き取れなかった。

インターネットのグーグルでその言葉を引いた。

「ナゴヤ」は日本にある町の名前、そして「ジシン」という言葉の意味は日本語で「地震」だとわかった。私の頭の中で誰かが日本語でしゃべっている！

翌朝私は台所でコーヒーを飲みながらラジオでニュースを聞いていた。

すると突然、ラジオから「今朝、名古屋の近くで強い地震があった」と流れてきた。

私の頭の中でよく未来を知っている誰かが会話をしているらしい。どうしてかという  
と今朝起こった地震について彼らはすでに昨日話していたのだから。

もちろん私がすぐに日本語を勉強し始めたのは言うまでもない。いろいろな日本のことについて本もたくさん読み始めた。

少しずつ自分の頭の中にいる私の「友達」の話がよくわかるようになってきた。やっと私は彼らが日本の鬼であることがわかった。



彼らはいろいろな日本の歴史やいろいろな地方で起こった出来事について話していた。私はそういうことに興味がなかったから、よくわからなかった。でもある日彼らの一人が「お稲荷様は白いキツネにとっても怒っている」と言った。「彼女は誰かと結婚したけれど、夫と一緒に暮らしたくないらしい」。

「どうして彼女は結婚したんだ？」と別の声が聞いた。

「彼女は輪廻の環から出られないためにすぐ結婚しなければならなかった。しかたがなくである外人と結婚した。自分一人の楽しい生活を続けたかったけれど、突然お稲荷様は、夫と一緒に暮らすよう彼女に促した。」

「でも、今彼女はあの外人がどこにいるか知ることができるのか？」

「それが問題だ。」

その後、彼らは別のことについて話し始めた。でも私はとてもびっくりしてしまって他のことについて考えることがもうできなかつた。日本での結婚は本当だったのか？しかも私の結婚した相手は、白いキツネ？

それから私は白いキツネの妻についてだけ考え始めていた。

でも彼女はどこにいるのか？

いずれにしても、妻を見つけなければならない。

だからもう何も考えずに、すぐ日本に行った。

上野駅の近くにあるホテルに泊まって毎日、一日中上野公園を歩いていた。でも、私の「妻」に似ている女の人を見ることはなかった。私の知り合いのホームレスの女性も、どこにも見つけられなかった。

ある日、もう一度その神社の近くに行った。神社のそばにはきれいな着物を着た人が大勢いた。外にはたくさんの靴が脱いであったので、多分またそこで結婚式が行われているのだろうと思った。

突然、桃色の着物を着た若い女性が神社から出てきた。彼女はゆみさんだった！そしてあたりを見回し、やがて私と視線が合った。何も言わないで、彼女は近寄って来て、私を神社の側にある建物に連れて行った。そこで別の女性が私をきれいな黒い着物に着替えさせた。その後、私たちが建物から出たとき、神社から出て来たたくさんのきれいな着物を着た人々を見た。私は彼らの間に白い着物を着た美しくて若い女性を見た。彼女はまっすぐ私に近寄って来て私の手を取った。私の妻だとわかった！そんな美しい女性を見たことがない。皆は私たちの周りで「おめでとございます」と叫んだ。

突然沈黙が辺りを支配した。きれいな紫の着物を着た年寄りの女性が私たちの方に来た。彼女はあのホームレスの女性だった！

彼女を見て皆は手を合わせて深々とお辞儀をした。

その女性は私たちに近寄って来て微笑んだ。

「奥さんが逃げないように、彼女の尻尾を強く握りなさい。」と彼女は言った。

私は本能的に妻の手を強く握った。

そのとき突然曇りない空から強い雨が降り始めた。年寄りの女性もお客さんも、皆いなくなった。私の妻も化け始めたけれど、私は強く彼女の手を握り続けた・・・びしょ濡れになっている私は、濡れている白いキツネの尻尾を握っているのだとわかった。

でも、年寄りの女性の言葉を覚えていて強く握り続けるのをやめなかった！

それから随分長い時が経ったけれど、私は妻と一緒に仲良く素晴らしい暮らしを送っている。私はとても幸せだけれど、時々彼女の尻尾を強く掴むことがある。

# サンタクロースの訪問

今回の日本への旅行で、私は東京にも関西にも行くつもりだ。東京から大阪への新幹線の中で旅行の前半について考えながら、窓の向こうに飛び去る景色を見て、梅田や鴨川や奈良の鹿と会うことを楽しみに待っていた。

いつも私が関西へ旅行をする時は大阪のホテルに泊まり、そこからいろいろな所を訪れる。

新大阪駅で降りたら、強い雨が降っていた。それにも拘らず、私はホテルに荷物を残し、梅田の通りに出て行った。私はいろいろな色の傘をさして、いろいろな色のレインコートを着た女性たちを見ながら、自分の若くない歳を考え、ため息をついた。ごま塩頭と白いあごひげは小太りの私の姿をサンタクロースに思わせた。日本人の女性は外国人を興味深く見ているけれど、誰もサンタクロースと結婚をしたくはないだろうし、恋に落ちるような関係も持ちたくはないだろう。

きれいな女性を見ながら「仮にサンタクロースが好きな日本人の女性がいるとしても、どうやって見つけられるのだろうか？」と思ってしまった。私はそれへの答えを見つけないことができなかった。

でも男の心から希望は失われない！

翌日雨が上がっていたので、朝から京都へ向かった。

私が京都に行く時は、先ず祇園の通りを歩き、鴨川の岸を散策し、少しずつ清水寺に近づいていく。その素晴らしい場所からの京都の素敵な景色に見とれてしまう。

清水寺の近くにはいつも日本人の修学旅行の学生がたくさんいる。彼らはそこで弁当を食べていたり、遊んでいたり、話し合っていたり、笑ったりしている。私は日本人の子供たちがしていることを眺めるのが好きだ。

突然私は「清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふひとみなうつくしき」という歌を聞いた。

清水寺の前で生徒が丸くなって座ってその歌を詠んでいた。

その辺りを散策していたら、十二歳ぐらいの少女が弟と思われる子と一緒に私の方に来た。

笑いながらその子は「サンタクロース、キョトーミタイ？」と外国人の話し方の真似をしてからかった。

「はい、私はサンタクロースです。田中と申します。」と私は答えた。

「日本人ですか？」と彼女は聞いた。

「もちろん。顔を見てわからない？」

子供たちはちょっと驚いた。

彼らがとても可愛かったので、アイスクリームをごちそうしてあげることにした。

アイスクリームの店で私たちは座りながら喋っていた。女の子の名前はなおみで、男の子の名前はまさとだった。

「私はイスラエルで医者として働いています。」と私は言った。

「お医者さんなの？」と少女は言った。その二人の子供たちはお互いに見つめ合った。女の子は「外国人のお医者さんなら、お母さんを治すことができるかもしれないわ。」と言った。

「私たちのお母さんは長い間重い病気にかかっているんです。まだお医者さんはその病気を治すことができないんです。」と彼女は続けて言った。

「一緒に来て。」

私は子供たちと一緒に祇園の狭い通りをしばらく歩いて、ある古くて小汚い家に着いた。

少女はドアを開けて「ただいま。」と言い、

私に「入って。」と言った。

私は少し屈んで中に入った。

貧しい家族であることが部屋の様子から感じ取れた。

「お母さん、お母さん！サンタクロースのお医者さんを連れて来たよ。きっと病気を治してくれるよ。」

奥の部屋から細い女性が出て来た。彼女の顔を見て天使のようだと思った。これほど美しい女性を私はこれまで見たことがなかった。

彼女は歩くのも辛そうで壁伝いに歩いてきた。

微笑みながら彼女は「娘が無理を言ってすみません。どうぞ、そちらへ。」と言って小さな客間にあるテーブルのそばの椅子を指し示した。私は座った。

女性は「なおみ、サンタクロースさんに水をお出しなさい。」と言った。少女は急いで台所から水を汲んでもってきた。

「何かをお召し上がりになりますか？」

「お構いなく。先ほど食べたばかりです。」

「お母さん、何か食べたいよ。」とまさとは言った。

「さっきアイスクリーム食べたばかりでしょう？」となおみは言った。「お母さん、サンタクロースは私たちに美味しいアイスクリームを買ってくれたの。」

女性は私に感謝のしぐさをした。「ありがとうございます。あなたは本当にサンタクロースですね。私は裕美と申します。」

「どういたしまして。子供さんがとても可愛かったものですから。お母さんに似ているようですね。」

裕美は微笑んで台所に入って行った。

彼女が微笑んだとき、その狭くて暗いアパートは一瞬に明るい宮殿になった。その微笑から私は心の中に暖かさと優しさを感じた・・・

突然なおみは「サンタクロースさん、私に医学を教えてください！私は医者になりたい。」と言った。まさとも「僕も医者になりたい！」と言った。

私は「OK、すぐ勉強を始めましょう。紙と鉛筆を用意してください。」

すぐにテーブルの上に紙と鉛筆が現われた。

私は心臓を描いて、そのメカニズムを子供たちに説明し始めた。彼らは興味深く聞いて、いろいろな質問をした。これだけ集中して話を聞く子供たちはいないだろう。お母さんが台所からまさとにご飯を持ってきながら注意して聞いていた。まさとはご飯を気にしないで聞き続けた。

漸くして私は「今日の授業は終わり。」と言った。

なおみは「次の授業はいつ？」と聞いた。

「今私はいろいろな用事するために行かなければなりません。」

「サンタクロースさん、また来てくださいね。」と子供たちは懇願した。

裕美は面食らった。「サンタクロースさんはとても忙しいのですよ。また来れるかどうかはわからないのですよ。素晴らしい授業をどうもありがとうございました！」

私は「また来ますよ。」と言ってしまった。

突然私はその家族に親しい気持ちを感じた。本当にきれいな裕美に恋に落ちたと感じた。彼女が例え病気でも、彼女と一緒に暮らしたかった。毎日彼女の美しい微笑を見るために・・・

私たちの短い人生に

恋は

珍しい客だから、

それを快く迎え入れるといい。

彼らの台所にある空っぽの棚が気になったので、京都のマーケットに行っているいろいろな魚や野菜や果物や甘いものを買った。たくさん買い物をした。今回は本当のサンタクロースのように彼らのアパートを訪ねた。

子供たちはどこか外で遊んでいて、裕美だけが私を迎えた。

私がテーブルの上に買い物全部を置いた時、彼女はふいに近寄って私の唇にキスをした。キスから私の心は恋の優しさでいっぱいになった・・・

その時「ただいま」と言って子供たちが入ってきた。私たちのキスを見て、なおみは「お母さんと結婚したいの?」と聞いた。

「もちろん。」と私は答えた。

そして、京都大学の病院でサンタクロースのようなお医者さんが働き始めた。

最近イスラエルの研究者が裕美の病気に効く薬を見つけたから、彼女はどんどん良くなっている。なおみちゃんはもう中学に入学して、私と共に医学を勉強している。時々私は彼女を大学の講義に連れていく。彼女は重い病気の薬を開発したり重い病人を治療するために良い医者になりたい、と言っている。まさとは子供の柔道の試合でいつも第一位をとってくる。

もしあなたが四月の始めに鴨川の岸で花見をするなら、私たちの幸せな家族に会うかもしれません。

咲いた桜や春の太陽で輝いている鴨川の水、幸せな子供たちの輝いている目、妻の輝く美しさなどが、あなたの心を喜びで溢れさせるでしょう。

# インフルエンザ

昨夜聡美は良く眠れず、ずっと現実と夢の間にいた。朝目を開けると、高い熱が出ていた。

弱っているらしく、聡美は起き上がることができなかった。手を動かすことも難しかった。「インフルエンザだ」と聡美は思った。この頃イスラエル人のほぼ半分は、インフルエンザで苦しんでいた。

聡美は病気になった時でも、一度も薬を飲んだことがなかった。お茶をたくさん飲むだけ。でも今は、お茶を入れるために立ち上がることもできなくなった。

頭の中でさまざまな思いが駆け巡り集中するのが不可能だった。

今日はアレクスが来る日だ、と彼女は思い出した。彼に知らせなければならない。アレクスは聡美の愛人だった。でも、彼は結婚していた。そして、嫉妬深い妻がいるため電話をしてはだめ、ということになっていた。アレクスにメールを送りたい。でも今どうやってパソコンにたどりつけるのだろうか？

アレクスも彼の妻も、医者だった。

今聡美には、医者の手伝いが必要だ・・・彼女の頭は混乱していた。

聡美はユダヤ教を勉強するために、六年前イスラエルに来た。大学の勉強を終えた後、イスラエルに残って、通訳と翻訳で暮らしを立てていた。日本とイスラエルの文化が違うために、イスラエルで暮らすことは大変だったけれど、日本に帰る決心もつかなかった。両親は、日本で大学を卒業して日本に住まなければならない、と彼女に言っていた。でも、彼女はイスラエルへ来た。これが間違いだったと彼女は早い時期からわかっていたが・・・今は父親の目を見ることができなかった。

聡美は、イスラエル人の男性とは相性が良くなかった。彼女は彼女を愛する誰かを探していたが、見つけることはできなかった。アレクスに会うまでは。

アレクスは聡美を初めて見た時から、彼女に恋をした。聡美は、アレクスの暖かさと優しさ、それに誠実な人柄に魅かれた。しかし、後に彼が結婚していることを知った。

どうして幸せは、一度も完全な姿で訪れないのか？

でも聡美は、彼が結婚しているとわかって、彼と別れることができなかった。少しずつ、彼との関係は、聡美の人生の一番大切なことになっていった。

アレクスは、聡美のアパートのドアを自分の鍵で開けて中に入った。すぐに聡美の部屋に来て、意識のない聡美をベッドに見つけた。その瞬間、アレクスは恋人から真面目な医者変わった。

聡美には高い熱があった。脈は速くて弱かった。

ここで彼女を治療することはできなかったが、病院に彼女を連れて行くこともできなかった。インフルエンザのために、どの病院も患者でいっぱいだったから。でも、このまま治療しなければ、彼女は死んでしまうだろう！

少し考えてから、アレクスは彼女を腕に抱えて、外に駐車してある自分の車へ向かった。

自宅に彼女を連れて行くことに決めたのだ。彼も妻も医者として働いていたから、いろいろな薬をたくさん自宅にも持っていた。イレーナという彼の妻が一時間後に仕事から帰るはずなのだが、聡美を治療しなければ、彼女は死んでしまうだろう。

自宅に着くと、アレクスは聡美をソファに横たわせ、すぐに彼女に点滴を始めた。

そこへイレーナが戻ってきた。

「ただいま。あなた、もう帰ってたの？」と彼女は言ってソファーに横になっている聡美を見た。

「その人はどうしたの？誰なの？」

アレクスは「私の日本人の友達だ。かなり悪い状態だから、彼女を救うためにここに連れてきた。」

「あなたの友達？私が馬鹿だと思っているの？愛人を私たちの家に連れてくるなんて、すごい自分勝手ね！」

「彼女は治療を受けなければ、死んでしまうんだぞ。」とアレクスは言った。

イレーナは、眠っている聡美に近寄った。

「彼女の肺を診た？もし肺炎なら、ここでは彼女を救うことができないわよ。」イレーナは聴診器を取り、聡美を詳しく診察し始めた。しばらくすると、「抗生物質を使ったほうがいいわね。彼女は幸運ね。冷蔵庫に何本か抗生物質のアンプルがあるわ。」とイレーナが言った。

アレクスはすぐに薬を準備をして、聡美に注射した。

イレーナは、日本人の女性の細い姿と顔を、長い間眺めていた。その後アレクスの方を見て「彼女はとてもきれいだけれど、あなたは・・・」とイレーナは途中まで言いかけた。

「さとみ」とアレクスは言った。

その瞬間、聡美が目を開いた。アレクスとイレーナ互いに顔を見合わせた。

イレーナは彼女に微笑んで「こんにちは、聡美さん。」と言った。「私たちはあなたを治療しています。もう少しであなたは良くなります。心配しないでください。」

イレーナは「暖かくて甘い紅茶を持ってきて。彼女はたくさん飲まなければならないから。」とアレクスに言った。

イレーナは聡美に微笑んで、彼女の手を取っ手脈を見た。「これから彼女は良くなっていくでしょう。」

汗で聡美の服は濡れていた。イレーナは乾いた女性の服を持ってきて、聡美が着替えるのを手伝った。紅茶を飲むと、聡美は少しずつ自分に戻っていった。

その夜は、アレクスの家のソファーで聡美は眠った。アレクスとイレーナが交代で聡美の脈を見て、彼女に暖かい飲み物を持ってきた。

聡美はだいぶ良くなったように感じた。

彼女が目を覚ますと、アレクスは彼女の近くに座っていて、彼女の手を握っていた。突然イレーナが入って来た。アレクスは聡美の手を放さなかった。

イレーナは微笑んで「おはようございます。」と言った。近寄って来て、聡美の額の上に手を置いた。「もう熱はないわね。アレクス、聡美さんにスープを温めて。」

「聡美さん、良く食べれば、早く良くなるでしょう。」

アレクスが台所に行くと、聡美はほとんど聞こえないくらいの声で「すみません。」と言った。

イレーナは彼女を額を撫でた。「あなたには罪がありません。男は皆、動物みたい。」

彼女たちはお互いに微笑んだ。

聡美は手厚く看護され、どんどんと元気になっていった。

でも、彼女はアレクスとイレーナのアパートから引越ししないで、彼らと一緒に暮らし続けていた。

こんな状況で、ある晩、ソファーで眠っていたのは・・・アレクスだった！

# 雨の下にいる女の子

## (エルサレムのおとぎ話)

当時、私はエルサレムの大学で勉強していて、若い時のあなた方のように軽はずみだった。

私は独りだった。そして普通の若者が思うように、特別にきれいな女の子に恋をしたいと思っていた。“特別にきれいな女の子”達は、大学の構内を数人ずつまとまってぶらぶらしていた。だから私は彼女たちの誰にも恋することができた。

ある日、大学の友達が、私を日本人の学生のパーティーに招待した。その時まだ私は、日本人という人たちについて何も知らなかった。

「日本人のパーティーはいつも面白いし、きれいな女の子もたくさん来る。」

友達は日本語学科で勉強しているから日本語がわかるのだが、私には日本語がぜんぜんわからなかった。でもとにかく、パーティーに行くことにした。

そのパーティーには、たくさんの日本人やイスラエル人、それにいろいろな国からの留学生などが来ていて、とても楽しんでいて。私の友達は、そこで水を得た魚のように振舞っていた。本当に、日本人の女の子はとてもきれいだった。私は隅にあるテーブルについて、一人でカクテルを飲んでいて。

皆に微笑みはしたが、誰かと話すのは恥ずかしくてできなかった。日本語は知らなかったし、見知らぬ人ばかりだったからだ。

ふと一人の若い女性が私のテーブルにやって来て、微笑みながら私の隣に座った。彼女もカクテルのグラスを持っていた。

「何であなたのようにハンサムな男性が、一人でいるのですか？」と彼女は切り出した。そのとたん、胸がドキドキし始めた。

「あなたのような美人が、私の所に来ないからです。」と答えた。

「女の子なら、ここにもいますよ。私はけいこといいます。何をそんなに考え込んでいるのですか？」と言い微笑んだ。「このパーティーの雰囲気を楽しんでいるのです。日本人のパーティーは、いつもこんなに面白いのですか？」

「そうですね。ここは故国から遠いから、同じ国の人々と一緒にいれば、寂しさを忘れられるのです。」

優しい音楽が聞こえてきた。女の子が二人立ち上がり、抱き合ってダンスを始めた。

「けいこさん、ダンスをしましょう。」と、私は立ち上がって彼女を誘った。

彼女は私に近寄り、私の目を見て手を肩に置いた。私は彼女のウエストを抱いてゆっくりステップを踏んだ。

彼女を近くに感じて、私は本当の幸せがしみじみとわかった。周りにいる者がみんな、見えなくなった。その時、私たちは一つに溶け合った。こんな感情を私は一度も経験したことがなかった・・・

突然音楽が終わった。魔法も消えた。再び若者の笑い声が聞えた。けいこは私から離れ、私の目を見たまま後退りして、楽しんでいる若者の間に姿を消した。その後、パーティーで彼女を見ることはなかった。けいこなしのパーティーは、面白くなかった。パーティーが終わるのを我慢して待っていた。

翌日、昨日私をパーティーに誘った友達に会った。「けいこさんが気になるのかい？」と彼は聞いた。「彼女の姉さんは、彼女よりきれいだよ。」

「彼女の姉さん？」

「彼女の姉さんは、昨日のパーティーには来なかったけど。」

その日は普通に過ぎた。学生の平日だった。講義とゼミナールが次々と過ぎていった。でも私は授業に集中することができなかった。ずっとけいこについて考えていたからだ。

講義が終わり私が大学を出た時、秋の冷たい雨が降り始めた。傘を持ってくるのを忘れたので、ずぶ濡れになった。

私が家の近くに来た時、階段の上に細い女の子が座っているのに気がついた。

彼女はけいこに似ていたけれど、けいこかどうか私にはわからなかった。

彼女もずぶ濡れだった。彼女の濡れた髪の毛が顔にかかっていた。彼女の顔に滴っていた雫は、雨だろうか、涙だろうか。

私は、女の子の肩に手をやって立たせ、黙って彼女と一緒に家に入った。彼女の肩は寒さからか、むせび泣きからか、振るえていた。

冷えきった女の子は熱いお風呂に入った。私は彼女に寝床を用意した。自分がソファに寝るつもりだった。

お風呂の後、お茶を飲んで彼女は毛布の下に入った。私は電気を消してソファに寝た。

始めから彼女は一度も視線を上げず、口も開かなかった。

朝、私が目を覚ますと、女の子はいなくなっていた。

部屋に秋の花の軽い香りが残っていた。

夢から来た女の子は

夢に帰ってしまった。

深夜、私の毛布の下で女の子の暖かくて細い体を感じていた・・・でもそれは、夢の中でのことだったのである。

彼女がけいこかどうかは、わからなかった。

メールボックスに、驚くようなことが待っていた。

知らないアドレスから、メールが来ていた。

「こんにちは。けいこです。あのパーティーの後、あなた以外のことを考えることができません。あなたに恋をしたのでしょ。だから、昨夜あなたがずっと姉さんと一緒にいたと聞き、姉さんにとってもやきもちをやいて、怒っていました。

でも姉さんは、私を心配して、あなたがどんな人か知りたかった、と言いました。

あなたがいい人だとわかって、姉さんは落ち着きました。私たちを怒らないでください。私たちは、とても仲の良い姉妹です。」

とても驚いた。このような言葉を、今まで誰も私に書いたことはなかった。このままパソコンの前に座ってその言葉を何度も読み返したかったが、大学に行かなければならなかった。

もちろん、その日私は全く勉強することができなかった。一日中講義を全く理解せずに、教授のことをそのままノートに書いていた。

講義が終わった時、学生達は教室を出た。ふと見ると、けいこがいた。彼女は私に気づかず、大学を出ていった。なぜか私は彼女を追いたかった。けいこは駐車場へ向かう代わりに、遠くにある寂れたアラブ人の田舎へ向かっていった。崩れた家の間まで行って、彼女はいなくなった。あちこちで彼女を探したが、彼女はどこにもいなかった。ちょうどアラブ人の年寄りが通りかかった。

「ここには誰が住んでいるのでしょうか？」と私は聞くと、

「誰も住んでいません。長い間ここには、トカゲとキツネの他に、誰も住んでいません。」と年寄りはお返した。



その晩私が家に着くと、ちょうど電話が鳴り始めた。受話器をとると、どすの利いた男の声が言う。「おまえは危険な状況にいるんだ。おまえには、女がいるだろ。そいつをすぐ捨てろ。さもないと、おまえにも被害が及ぶぞ」

「あなたは誰ですか？どの女性の話しをしているのですか？なぜ私にまで被害が及ぶのですかか？」

「とぼけるな！その女は人間じゃない。そいつはキツネだ。そいつを捨てないと、おまえは生きちゃいけないんだぞ。」

「あなたは誰ですか？」もう一度私は聞いた。「なぜあなたの言うとおりにしなければならぬのですか？」

「今すぐ、俺の言うとおりにしないと、手遅れになって、助けてやれないぞ。」と言って、男は電話を切った。

私には、その電話での会話について考えている暇がなかった。誰かがドアを叩いたからだ。

けいこだった（今回は、間違えなくけいこだとわかった）。

彼女は無言でアパートに入り、私のすぐ近くに来た。

私は、彼女の目をととても近くに見て、彼女の息を感じた。こうして少しの間、黙って立っていた。その後、彼女は爪先立ちになった。私は顔を近づけた。彼女の暖かい唇を感じた。

その瞬間、私の心は興奮の熱い波で呑まれた・・・

しばらくの間、ベッドでけいこは私に抱かれて休んでいた。それから、さっきの電話での会話について彼女に話した。すると、けいこの体は緊張からか、硬くなった。

「彼の言うことを信じるの？」とけいこは聞いた。「あなたは、私がキツネだと思うの？」

「けいこ、君がキツネでもなんでも・・・私は君を愛しているよ。心配しないで。でも、彼は誰？どうして私に電話してきたんだろう？」

けいこはしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「彼は人間じゃなくて、タヌキなの。彼は、姉さんと私をずっと追っている。私たちは、彼の恋人や妻になりたくないから、いつも逃げているの。彼は、私たちの生活を壊してみたいと思っているらしい・・・」

私は、けいこが泣いて震えているのを感じた。

けいこを優しく撫でた。「彼のことは、忘れましょう。心配しないで。私たちはいつまでも一緒に、幸せです。」

けいこは私に寄り添った。その時、私たちにとって、タヌキも全世界もなくなった・・・翌朝、けいこは私のベッドで目が覚めた。

夢もなくなった。

でも彼女は

私と一緒に残った。

夢から来た女の子は

夢に帰るのを忘れた。

もちろん、その日私たちは大学に行かなかった。

何日かの間、私たちは幸せでルンルンとしていた。

でもある日、けいこは家に帰らなかった。私は夜中寝ないで彼女を待っていたけれど、彼女は帰って来なかった。

翌日、朝早くから学生寮を走り回った。けいこと彼女の姉について、多くの日本人学生に聞いてみた。でも、このところしばらく、誰も彼女たちを見ていなかった。

私は、あのアラブ人の寂れた田舎に行った。

崩れた家の間を歩き回っていると、古いオリーブの木の下に、2匹のキツネが見えた。2匹は木に結びつけられて、地面に横になっている。とても痩せ衰えている。キツネたちは私を、涙いっぱい目で見ている。

私は、早く木からキツネたちを解き放してやりたかったが、弱っているようで、キツネたちは動くことができなかった。私は水と食べ物を持ってこようと、大学に走った。でも戻ると、キツネはいなかった。紐の切れ端だけが、オリーブの木に結んであった・・・

それから、私はいたる所で、けいこと姉を探した。

毎日、学部とイスラエルにある日本大使館で彼女たちについて尋ねたが、何の情報も得られなかった。

ある時、私は新聞を読んでいて、面白い記事を見つけた。ボーイスカウトがエルサレムの近くでタヌキを捕らえ、エルサレムの動物園に連れて行ったと書いてあった。私は、タヌキがイスラエルにいないことを知っている。

タヌキさん、あなたに会いに動物園へ行きますよ。いくつか質問があるのですが・・・

# プラモデル

日本の旅行から帰るとき、毎回私は友達皆に日本の小さなお土産を贈るために、いっぱいになった重い荷物を持って帰る。

でも、今回私は自分にとってだけ重要な物を日本から買って帰りたかった。

“ゼロ戦”という「神風」の戦闘機は私にとって日本人の勇気や必勝の信念や、愛国心などの象徴だ。そのプラモデルを目の前に置いてずっと見ているために手に入れたかった。

東京のどこでそれを買うことができるのだろうか？

秋葉原でかもしれない。秋葉原の店にはいろいろな人気のある漫画や映画の登場人物に似ている人形やいろいろな自動車と電車のプラスチックのモデルが売られている。

あそこで戦闘機のモデルを見つけることができるだろうと思った。

秋葉原の通りを歩いて、私はその特別な辺りの雰囲気を感じてみたかった。

今は桜のシーズンだから、町のあちこちで桜の花を見ることができた。

いろいろな店に入ったり、カフェでゆっくりコーヒーを飲んだり、私は通行人や客や店とカフェで働いている若者を眺めていた。

しばらくして秋葉原の印象を満喫した後、秋葉原の通りの一つで私は突然プラモデルの店を見つけた。

エレベーターで三階に上がって私はあらゆる時代の全ての戦闘機を見た。

いろいろな戦車や軍用機、潜水艦などの間に小さい“ゼロ戦52型”のプラモデルを見つけた。私がモデルの箱を持った時、近くにいる女性の声が聞こえた。「それが何か知っていますか？」と彼女は聞いた。

私は振り向くと、若くて細い女性を見た。

「もちろん。その歴史に私は興味を持っています。」と私は答えた。

彼女は「私は香織です。本当の“ゼロ戦”を見てみたいですか？そしてその中に座ってみたくありませんか？」と聞いた。

「もちろん。でも、今は本当の“ゼロ戦”はないと思います。」と私は言った。

彼女は微笑んだ。「私はある所を知っています。そこへ私と一緒に行きましょう。」

私たちは店を出て秋葉原駅に行った。電車の中で私はそっと彼女を見ていた。普通のミニスカートをはいた彼女は、とてもきれいで魅力のある女性だった。彼女の近くにいる私は胸がドキドキするのを感じた。新橋駅で私たちは乗り換え、長い間電車でどこかへ行った。突然彼女は「降りましょう。」と言った。

私たちは小さい駅で降りた。何本かの木の向こうに広い野原が見えた。そこに私はいくつかの緑色の小さい飛行機を見た。それは“ゼロ戦”だった！その周りに黒い服を着た人々が動いていた。人々は皆鉢巻と飛行士の軍服を着た若い男性だった。鉢巻に日の丸と「必勝」が書かれていた。

私たちは彼らに近寄った。彼らの一人が（指揮官かもしれない）、「どこにいた？どうして皆はあなたたちを待たなければならないのだ？」と大声で言った。私を見て「早く中に乗って。全部用意してある。」と彼は言いながら私にヘルメットを渡してくれた。

私は香織を見た。彼女は微笑みながら、どこからか取ってきた美しい桜の小枝をそっと私に差し出した。

飛行士は皆、素早く飛行機に乗った。私もヘルメットを被って一番近くにある飛行機に乗った。

初めて私は操縦室の中に座った！

突然誰かが操縦席のグラスフードを閉じた。  
エンジンの唸りが聞こえ始めた。そして、プロペラが回り始めた。飛行機が動き始めた！  
私はとても驚いて「どうなっているんだ？私は中に座りたかっただけだ・・・」と叫んだ。  
ヘルメットのイヤフォンから「大丈夫、心配しないで。」と聞こえた。  
その時飛行機は離陸した！  
「大丈夫じゃない！」と私は叫んだ。「私は飛行機を操縦することができない。助けてください！」  
「その飛行機はコンピュータで操縦されている。」とイヤフォンから聞こえた。「私達は五機の“ゼロ戦”で敵に突撃するつもりだ！」  
「どんな敵？私は誰も攻撃したくない。」と言った。  
「弱気になるな。今日本人は皆占領国と一所懸命戦わなければならないのだ。」  
「どこが占領国なんだ？どんな敵に攻撃するつもりだ？」  
「お前は知らないのか？まだアメリカ人が私たちの沖縄を占領していることを。私たちは皆命懸けで解放したいのだ。」  
「でも私は日本人じゃない・・・」  
「お前はここに偶然いるんじゃない。私たちの攻撃で一番大きなアメリカの船を撃沈させなければ、アメリカは永遠に占領をやめないだろう。  
そして指揮官は言った。「これから攻撃する。皆の勇気に栄光あれ。天皇陛下万歳！」  
」  
すぐに私は目の前にアメリカ国旗と大きな戦艦を見た。私の“ゼロ戦”は素早くその戦艦に近寄って行った・・・

突然私はもう一度プラモデルの店の、戦闘機のモデルがある棚の前に立っていた。もう一度“ゼロ戦52型”のモデルの箱を持っていた。  
もう一度近くにいる女性の声が聞こえた。「それが何だか知っていますか？」  
私は振り向いて香織を見た。彼女は初めてのように私を見た。  
「もちろん。」と私はもう一度答えた。  
彼女は「私は香織です。本当の“ゼロ戦”を見てみたいですか？そしてその中に座ってみたくありませんか？」と聞いた。  
突然、私はもう一度神風の攻撃に参加したいと思った。もう一度鉢巻を頭に巻いて、日本人の英雄と一緒に敵の戦艦を打ち破りたかった。もう一度微笑んでいる香織から美しい桜の小枝を貰いたかった・・・  
だから、私は気持ちを込めて「もちろん！」と答えた。

# 私に何も聞かないでください

通常、普通の人にはきれいな女性と知り合いになるために、どんなサイトもインターネットの文通も必要がない。視線を交わし、点火した熱情が荒れ狂い、心はもう胸から外に放たれる・・・

それについて、小説を書いたり読んだりするのはあまり面白くない。小説を書く代わりにさっさと家を出て、通りできれいな女性を探し始める方がいい。

でも、もし自分の小心を克服し、長い間文通をし、遠くにいる待望の女性に、真っ先に会いに行けば、かわいそうなこの小説の読者の心はまったくとろけるだろう。

でもこの話は少し違うかもしれない。

ある大きな会社で、田中は一番できるコンピューターの専門家だった。彼は他の社員と同じように朝早くから夜遅くまで毎日働いたけれど、毎日同じ仕事をしていても田中は退屈しなかった。どうしてかという、自分の仕事が大好きだったからだ。

ある日、突然部長は田中を呼んだ。

田中が部長の前に座った時、長い間彼の目を見てから、部長は話し出した。「田中君、私にはとてもデリケートな頼みがある。最後の宴会の後でお前は信頼できるとわかった。」

(最後の宴会で、部長はすごく酔っ払ってたくさん吐いた。その時、田中はお手洗いでずっと彼を介抱してから家に連れて帰ったのだった。)

部長は話し続けた。「一週間前、私のゆみという妻がいなくなった。彼女は長い間ロシア語を勉強して、いろいろなロシア人とインターネットで文通をしていたから、多分彼女はロシアに住んでいる誰かに会いに行ったかもしれない。私たちの関係はしばらく冷たくなっていたから。お前が彼女のコンピューターを調べて、彼女がどこにいるのかを探して欲しい。もしかするとメールの中に手がかりがあるかもしれない。」

田中は「すみませんが、私はロシア語ができませんので・・・」と言い出した。

「このお金はロシア語の翻訳者とお前の必要経費として十分だと思う。」部長はそう言って分厚い封筒を田中の前のテーブルの上に置いた。

「これが秘密だと言うことは、言うまでもない。」と部長は終えた。

橋本綱吉という部長は、一度でも彼の妻を愛したことがあるかどうか、自分でもわからなかった。新婚のほんの少しの間、若い妻を愛したかもしれないけれど、後は出世とキャリアにしか興味がなかった。「綱吉はこの会社と結婚した。」と彼の同僚は言った。長い間、一日中仕事場で妻を思い出さなく、家でも妻に気をかけなかった。

ゆみは夫の長い出張や、度々の単身赴任などで、独りである夜が重なったせいで、彼がいないことにもう慣れてしまった。その夫婦は子供がいなかった。彼女は長い間働いていなかったので、学生時代に培ったものを忘れてしまった。ゆみはいろいろな趣味のコースを取って、独りの寂しさを忘れようとした。

彼らの人生は、それぞれまったく違うものになっていった。彼らは長い時間を経て他人になった。

部長は「冷たい関係」と言ったけれど、本当にその夫婦には関係がほとんどなかった。

毎日彼らはお互いのことをぜんぜん考えていなかった。しかし、今は状況がまったく変わった。

最近部長は、いつもいなくなった妻についてばかり思うようになっていた。突然彼女は彼にとって一番重要で大切なものになった。彼女の顔は一番美しく思い出され、彼女の姿も一番きれいなものになった。今の綱吉にとってゆみは一番愛する者だ。

そのほかに、彼は自分の祖先が侍だったことを思い出した。侍は自分の家内を無責任に手放すことはしなかった。これは自分の尊厳に関わることだった。だから、綱吉はその状況を見過ごすことができず、彼女を戻す取り戻すことに懸命になった。そのことについてたくさん考え、ようやく彼は妻を探すためにロシアに行く事を決めた。

田中と会ってから一週間後、部長は全ての情報を受け取った。ゆみは二人の文通相手と親密な関係にあった。その二人はボブロフ・セルゲイという男とマリナ・ガリナという女性だった。この二人はモスクワに住んでいた。彼らの住所と電話番号が見つかった。でもメールに彼らの写真はなかった。

田中は「そのボブロフ・セルゲイという男はとても金持ちです。」と進言した。

本当に田中は素晴らしい仕事をした。

綱吉は若い時から立派な剣道の専門家で、精神的に鍛錬されていたから、ロシアのような遠い所への一人旅も恐れなかった。

彼は本当の侍のように、全ての危険をものともしなかった。

何日か後、綱吉はモスクワに行く飛行機のビジネスクラスの席に座っていた。

彼の隣には、少し日本語ができるロシアのビジネスマンだった。彼らはすぐに打ち解けて、長いフライトの途中いろいろなことについて話していた。

そのビジネスマンはロシアの状況についてたくさん話した。「今モスクワは危ないと思います。モスクワに中国人がたくさんいるのですが、ロシア人は彼らが嫌いです。でもロシア人は中国人と日本人を区別することができません。だから、モスクワは全てのアジア人にとって危ないでしょう。その他に最近、モスクワでスキンヘッド達が、黒人とアジア人を度々襲うと聞きました。ですから十分気をつけてください。」でも、綱吉は臆病者ではなかった。彼は剣道で体得した眼力で危険を見分けるのに慣れていたので、スキンヘッド達との揉め事も全然恐れなかった。

綱吉は早朝モスクワに着いた。モスクワは彼を雪と冷たい風で迎えた。でも暖かい上着とセーターは、綱吉を確実にモスクワの寒さから守っていた。

早い時間だったので、モスクワの地下鉄はほとんど空っぽだった。まず綱吉は予約したホテルを見つけた。本当にきれいな都会だった。彼はモスクワが好きだと思った。ホテルの部屋で少し休み、綱吉はボブロフ・セルゲイを見つけるために出かけて行った。ゆみはボブロフの所にいると彼は思った。綱吉は英語が下手だったので、ボブロフと電話で話したくなかった。

でも、彼はゆみを見つけたとしても、どうしたらいいのかわからなかった。ボブロフとは話すことなく殴ることができるけれど、何をゆみと話したらいい全然わからなかった。

ようやく、綱吉は「ヂミトロウソコエシヨセ」という地下鉄の駅を出た。その辺りにボブロフが住んでいるらしい。少し暗くなって来た。綱吉はお腹が空いていると感じた。必要な住所を見つける前に大きなデパートに入りたかった。

突然デパートの近くで四人のスキンヘッド達が綱吉の前に現れた。彼らの悪意ある顔に狂暴さと死が見えた。彼らはナイフと鉄の棒を持ち綱吉に近寄って来た。綱吉はひどい一戦を予想し構えた。

突然激しい叫びが聞こえた。拳銃を持った金持ちらしい男がスキンヘッド達に何かを怒鳴った。スキンヘッド達は汚い言葉を吐きながら、ゆっくりとナイフと鉄の棒を下げて去って行った。

男は拳銃をポケットに入れて微笑んだ。

日本語で「あなたは大丈夫？」と聞いた。

彼は日本語ができた！

綱吉は「大丈夫。ありがとうございます。」と答えた。

「びっくりしないでください。私は日本と日本人が大好きだから日本語を勉強しました。」とその男が言った。彼は話し続けた。「今晚あなたを私の家に招待してもいいですか？一緒に夕食を食べましょう。私は近くに住んでいます。今私の家には日本人のお客さんが泊まっています。多分あなたにとって日本人と話すのは面白いかもしれません。」

綱吉は「どうもありがとうございます。」と言った。「もちろん、喜んでご招待をお受けします。あなたのお名前は何ですか？」

「私はボブロフ・セルゲイです。」と男は言った。

綱吉はとてもびっくりしたけれど、自分の驚きを見せなかった。でも、妻を見た時彼女に何を話したらいいのだろうか？

彼を助けたボブロフと、とても愛する妻と一緒に夕食をとるのが可能か？

ボブロフの自動車で彼の家に行く道すがら、いろいろな日本のことについてのボブロフの質問に答えながら、綱吉はこの変な状況についてずっと考えていた。

ボブロフは大きな三階建の家に住んでいた。車庫に車を止めて、彼らは家に入った。

二人の召使と頑強な警備員が彼らを出迎えた。

きれいな家具で飾られた広い客間に綱吉は自分のゆみを見た。彼女は突然夫を見て驚愕した。

綱吉は少し微笑んで「こんばんは。」と言った。

彼女は驚きから返り「こんばんは。」と答えた。彼らは見知らぬ人同士のように振舞った。

もちろん、ボブロフは何も気がつかなかった。

彼らは皆で日本について話しながら、素晴らしい夕食をとった。

食事の後でボブロフは綱吉に「あなたの部屋は二階にあります。そこにもお手洗いが付いています。」

綱吉は皆に「おやすみなさい。」と言って二階に上がった。

その夜彼は眠れなかった。いろいろとこの状況について考えていた。彼は突然夜中に誰かが部屋に入って来た音を聞いた。

それはゆみだった。

彼女は黙って彼のベッドの横に跪いた。

綱吉も黙って彼女の手を取り、ベッドに腰掛けさせた。

そのまま彼らは長い間座っていた・・・

朝、綱吉が客間に降りた時、ゆみだけが朝食のテーブルに座っていた。ボブロフはいなかった。

二人は黙ってお互いを見た。

ゆみは「さあ、どうぞ、召し上がれ。」と言った。「朝ごはんの後、すぐ空港に行きましょう。運転手が待っています。チケットも、用意してあります。」

飛行機の中で綱吉は「私の人生にとって新しく、大切な部分が突然現れた。」とわかった。

隣に座っているゆみの手を握りながら、彼の人生の中で初めて泣きそうになった。もう一度、結婚した時のような自分を感じた。



# 婦人科医の胸もどきどきする

アルカデイはモスクワで医学の勉強を終え、エルサレムの病院で婦人科の医者として働いていた。加えて彼はクリニックでも患者を診察していた。

婦人科の男性の医者は診察で大勢の女性を見ているので、もう女性を女として見られないと思われている。でも、もちろんそんなことはない。男性の医者は婦人科を意味もなく勉強する訳じゃない。女の本質に興味深かったのかもしれない。

アルカデイも例外ではなかった。

だから、ある日突然私の診察室に二人のきれいな日本人の女性が入って来た時、アルカデイは息を呑んだ。

普通の挨拶をして彼女たちがテーブルに向い合って座った時、彼は微笑んで「どうしましたか?」と聞いた。

女性の一人が話し始めた。「私はじゅんこです。私はイスラエルに住んでいるけれど、彼女は日本人の旅行者で健康保険がありません。でも、ある問題についてあなたにお伺いしたいのですが、よろしいでしょうか?」

「もちろん。どうぞ、具合が悪いのですか?説明してください。」

「でも、いくらかかりますか?」

「心配しないでください。高くはありませんから。」

アルカデイはお金を取るつもりじゃなかった。こんな美人を見るためには彼の方が支払うべきなのだから。

二人目の女性が「昨日私は右の胸にしこりを見つけました。癌があると怖いのです。検査をしてくださいませんか。」と言った。

彼女はシャツを脱いでブラジャーを取った。

二つの小さい丘のような胸があらわになった。

アルカデイは急がず注意深く彼女の胸を検査した。本当に右の乳房の中に彼は悪性の腫瘍のような物を見つけた。まだ脇のリンパ腺が大きくなっていなかったのだから、初期のようだった。

アルカデイは医者としてその状況に慣れていたから、動揺しなかったけれど、その女性に酷く同情した。彼女の腫瘍は癌だった。

「あなたは早く手術をしなければなりません。

それは危険を伴うかもしれませんが、初期だから完全に取り除くことができます。もちろん、まずはいろいろな精密検査をしなければなりません。」

女性は黙って服を着た。彼女の目は涙で溢れていた。

じゅんこは「心配しないで。彼が間違っているかもしれないから。」と慰めようとした。

アルカデイに「検査はいくらですか?」と聞いた。

もちろん彼は彼女たちからお金を取りたくなかった。

二人の女性はすぐ外に出ようとした。

アルカデイはそのきれいな女性に再び会うことができないとは考えたくなかった。このまま帰すことができなかった。

「少々お待ちください。」とアルカデイは彼女に言った。「あなたの将来の状況と治療法を知らせることができるように、あなたの名前と日本の電話番号を教えてください。」

彼女は「私はひとみです。」と言って電話番号をテーブルの上にある紙に書いた。

その時からアルカデイはずっとひとみのことについて思っていた。今彼女はどのようにしているのか？手術はしたか？厳しい治療を受けて苦しんでいるかもしれない。」と思った。その大変な期間に彼女と一緒にいたかった。勇気付けるために。でも、電話をかけるのが怖かった。

しばらくして、じゅんこというひとみの友達が彼の診察室に普通の検査のために来た。検査の後でアルカデイは「ひとみさんの具合はいかがですか？」と聞いた。

彼女は「手術をしました。病気のせいで彼女は夫に捨てられ、仕事も辞めました。とても可哀想です。」

「私はもう少しすると日本へ旅行に行きます。お見舞いに行きたいのですが、彼女の住所を教えてくださいませんか？」

「今ひとみは誰にも会いたくないと思います。それに彼女と会ってあなたになにができますか？」

「私は医者だから、彼女を助けたいと思います。」と彼は言った。「イスラエルの乳癌の治療法はとても進んでいます。少しでも彼女の力になりたいのです。」

「わかりました。あなたが少しでもひとみの力になることを願います。でも、まだあなたがお見舞いに行くことについて彼女に知らせないでください。もしあなたが行くことができなくなったら、彼女はとても失望するかもしれません。」

彼女は診察室を出る前ひとみの住所を書いて行った。

佐藤ひとみは小さい時に両親を交通事故で失って、祖母のもとで育っていた。二十歳の時に祖母を亡くし、ひとみは全世界にたったひとり残った。

隣人の女性が彼女に花婿を見つけた。ひとみはその男性が好きじゃなかったけれど、すぐに彼の求婚を受け入れた。独りで暮らすことができなかったから、彼女は仕方なく、その男性と結婚した。他の女性達のようにひとみは暖かくて優しい人と寄り添っていたけれど、彼女の夫は優しい人ではなかった。彼からひとみは不満と命令だけを聞いた。いつも夫はとても遅く帰ったり、時々帰らなかつたりした。でも、一番難しいことは週末に夫の両親を訪ねることだった。彼らはひとみに自分達が彼女を嫌っているのを隠さなかった。本当は彼らは息子のために金持ちの名家から花嫁が欲しかったのだ。彼らにとって貧乏で天涯孤独のひとみは、息子にとって失敗だったようだ。夫の実家への毎回の訪問は、ひとみの胸の中は氷のような寒さを感じた。両親の家では夫も人が変わり、全く他人のようになって、ひとみを気にかけてしなかった。

ある日ひとみはイスラエルに住んでいるじゅんこという学校の友達からメールを受け取った。じゅんこはイスラエルの生活についてたくさん楽しそうなことを書いた。彼女は自分のところにひとみを招待した。ひとみは夫から了解を得てイスラエルへ三週間の旅行に行った。

ひとみはイスラエルから帰って、夫に自分の病気について知らせた。彼はそのことを聞いた時、すぐに実家へ引越した。

「お前はもう普通の女の体ではなくなる。そんな女とはもう暮らせない。」と夫は言った。

だから、ひとみは一人で自分の病気に立ち向かうしかなかった。

手術で右の胸を切除された時、ひとみは幸せへの最後の希望を失った。それに加えて手術をしたお医者さんは「その病気がある女性は妊娠してはいけません。妊娠するなら、癌が早く進行することになります。」

可哀想なひとみは「誰もこんな私を必要としない。どうして私は生き続けなければいけないの？」と思った。「これからの私の人生は意味がない。」

ひとみは愛を信じることを止めた。「男性は皆女性からセックスと服従だけが必要。彼らは誠実いることができないし、本当に愛することができない。」

でもある日、誰かが彼女の戸を叩いた。

ひとみは戸を開けた時、とてもびっくりした。大きくてきれいな花束を持っているイスラエル人のお医者さんを見た。

彼は微笑んで「こんにちは。」と言った。「私は日本へ旅行をして、あなたのお見舞いをしたかった。お元気ですか？具合はいかがですか？手術はどうでしたか？」と言いながらお医者さんはひとみに花束をあげた。

ひとみは花束を受け取らず、彼を家に招きもせず、戸口で「どうして来たんですか？」と聞いた。「どこから私の住所を知りましたか？私から何が欲しいんですか？」

「ひとみさん、じゅんこさんからあなたの住所を貰いました。初めてあなたを見た時、すぐに恋に落ちました。あなたと結婚して、あなたと一緒に暮らしたいのです。私と結婚してくださいませんか。」

その時、隣家から女性が出て来たので、ひとみはアルカデイを家に入らせた。

「あなたは私が馬鹿だと思っているの？そんなきれい事を信じらるくらい私は小さい女の子じゃないのよ。私から何が欲しいの？」

アルカデイは「ひとみさん、私はあなたの状況が良くわかります。私を信じてください。男性は皆裏切り者や嘘つきじゃない。私は本当にあなたを愛しています。」

そう言いながら、ひとみに近寄り、彼女の手を取った。

彼女は「私は何の手術をしたのか知っていますか？そんな手術をした女の人と結婚したい人がいるのでしょうか？」

彼は答えの代わりにひとみにキスした。

「でも、病気のせいで私は子供を生むことができません。」と彼女は涙を溜めながら言った。

「知っています。私は婦人科医だから、どうにか解決方法を見つけます。」と言いながら、アルカデイはもう一度彼女にキスをした。

# ハンブルグでまた雨が降っている

今朝私は早く起きたくなかった。しかし、突然電話のベルが鳴った時、思わず習慣で受話器を取ってしまった。

もちろん、それは私のハンスというボスからだった。

「すぐレストランに來い。」と彼は言った。

私はVIP専用的高级レストランで働いていた。

私の状況ではボスに「いいえ」とは言わないほうがいい。

十分後、私はもう自転車に乗って、いつも降っているハンブルグの冷たい雨の中仕事場に行った。

大きくて黒いレインコートを着ている私は少しミステリアスに見えただろう。私の自転車はとても古かったので、その道程は危なかった。その自転車は縄文時代の祖先が使っていたとしても不思議ではないくらいだ。

私は自転車を玄関の階段の下に置いた。誰かがこれを盗むとは思っていなかった。だから自転車がなくなった時、私は近くのゴミ置き場でそれを見つけた。

本当に私は、ハンブルグの冷たい雨と濡れている緑色の屋根が好きではない。でもその時モスクワに帰ることはできなかった。そして、私はドイツに住む訳有りの移住者の一人だ。

私が朝早く仕事に出る時、サーシャという私のルームメイトを羨ましく思う。彼は画家として働いているから一度も早く目が覚めたことがない。

サーシャもロシアからの若者だ。サーシャはとても優しい心を持っていたので、若い女性がたくさん彼の部屋を訪ねた。だから、彼は私にとって一番いいルームメイトではなかった。とにかく、私たちは後二年間は一緒にそのアパートを借り続けるつもりだ。

今朝私がレストランに入った時、常連客はもう来ていた。私たちの客はVIPだけだった。VIPの客は誰か？たくさん払うことができる客だ。自分のステータスを皆に見せつけたが。

他愛もない話を面白おかしく話す年寄りの女性だ。

重々しく新聞を読んでいる年寄りの紳士だ。同僚と一緒にビジネスランチを食べている若い男性だ。もちろん、時々突然の客も入った。

その身なりのいい若くて金髪の女性が、毎日午前十一時に入って来た。彼女はいつも一人だ。今日、いつものように私は彼女が上着を脱ぐのを手伝い、彼女のテーブルの下から椅子を出した。いつものように彼女は私に挨拶も言わないし、私を見もしなかった。私たちは長い間こういう関係なので、視線と言葉が必要ではなかった。

その様子は素敵なパントマイムのような感じだ。

彼女の前にオレンジジュースのグラスを置いて、私のいつもの仕事を続けた。

はじめから私は恋に落ちていたけれど、ドイツの金持ちの美人と移住者のウェイターの間には克服できない距離があることがわかっていた。

だから、私はきれいな写真を見るように彼女を見ていた。

何も感じないで私は毎日の単調な演劇に参加しているようだった。

でもその日すべてが変わった。

その日、前の開いた茶色のコートと白い襟巻きを着ているハンサムな男がレストランに入って来た。彼の髪型はデカプリオのようだった。彼はその女性のテーブルに酔っ払った歩き方で近寄り、何も話さないで彼女の前に座った。すぐ彼女の顔は怒りから赤くなった。彼女はわからない言語で速く話し始めた。突然彼は彼女にびんたをくら

わせた。その時ちょうど、私は年寄りの婦人にコーヒーを持って行くため彼らのテーブルの近くを歩いていた。

私は婦人のコーヒーをデカプリオの顔にかけた。彼はすぐに拳骨を握って立ち上がった。私は彼が殴ってくる前に、彼の顎に強い一撃を浴びせた。彼は大きな音を立ててテーブルの間に倒れた。私はボクシングのチャンピオンにはならなかったけれど、少し拳骨を振り回すことができた。

私は彼女に「あなたはここからすぐ出たほうがいいですよ。」と言った。彼女はすぐ出口に向かって歩いた。

私のハンスというボスは近寄って来て、私に「お前はもう首だ！」と叫んだ。「あっちへ行け！」

その状況で私は、今まで稼いだ給料を支払ってくれと頼むことができなかった。

私が家に着いた時、サーシャはもう起きていた。

彼に私の事情を説明した時「心配しないで。」と彼は言った。

「君は美術学校で学生のためにモデルとして働くことができる。そのアルバイトは面白くないけれど、食費とアパート代を払うくらいは貰えるだろう。」

「一時間いくら？」

「十一ユーロだけれど、裸のモデルだったら、二十ユーロだ。」

高くない給料だけれど、今私は失業中だったら承諾した。

翌日私は美術学校で裸で二十二人の若い女性の前に立っていた！彼女たちは初めて裸のモデルを描きに来た。女性皆は恥ずかしくてトマトのように赤い顔になっていた。でも、彼女たちは視線を私の下の部分から逸らすことができなかった。私の真ん前に、赤いミニスカートををはいた金髪のバービーみたいな女性が立っていた。どうして彼女は裸のモデルを描くためにミニスカートををはいているのだろうか？私は彼女の足から視線を逸らすことができなかった。同時に私は私の体に変化が起きているのを感じた。皆もそのことに注目し、話し始めた。

「私はその部分をもう一度描かなければならないわ！」

「私も三回同じ部分を描いたのに。それは絶えず変化している。」

授業の後で禿頭の先生は「あなたはこの仕事に合っていないと思います。授業には今度、来ないでください。」と言った。

私は、私のモデルとしてのキャリアは終わりだとわかった。

家に帰った時、私たちのキッチンに可愛く微笑んでいる細くて若い日本人の女性がいた。

「あなたは誰？ここで何をしている？」と私は聞いた。

「私はゆきです。」と彼女は答えた。「友達を待っています。サーシャは彼女に自分の部屋で絵を見せています。」

私は日本人の名前に「さん」を加えなければならないことを知っていた。それで、彼女に「ゆきさん」といった。

サーシャの部屋の戸の向こうから笑い声や喘ぎ声が聞こえた。私はサーシャの絵がそんな反応音を起こさせるとは思ってもいなかった。ゆきは恥ずかしくて赤くなった。彼女の恥ずかしげな仕草を好ましく思った。彼女は本当に謙遜で遠慮深い女性だった。

彼女のドイツ語は下手だった。少し前にドイツに来たのかもしれない。

「ゆきさん、あなたはハンブルグで何をしていますか？」

「ハンブルグの大学でドイツ文学を勉強する前の準備学科で勉強しています。」

「そうですか？私もドイツ文学をモスクワの大学で勉強したけれど、三学期でやめた。ハンブルグの大学で勉強を続けようと思うけれど、まだちょっと都合が悪い・・・あなたはドイツ語の手伝いが必要ですか？」

「もちろん。私は二ヶ月前にここに来ました。日本でドイツ語を勉強したけれど、まだよくできません。」

「素晴らしい！」と私は喜んで言った。「これから私たちは無駄に時を過ごす代わりに、すぐドイツ語を勉強しよう。」

きれいな日本女性に魅了された私はすぐに恋に落ちた。彼女の脆い様子は私を強く引き付けた。そんな女性をいつも探していたとわかった。

でも私たちにはドイツ語を勉強するための時間がなかった。突然誰かがアパートの戸を叩いた。

私が戸を開けた時、とてもびっくりした。あのレストランの若い女性が、屈強な男性と一緒に入って来た。

高価そうな服を着ている彼女は、私たちの古くて狭いキッチンでは変に見えた。

彼女は周りを見てから私に「こんにちは。」と言った。「私のせいであなたが首になったので、私はあなたに面白い提案があります。私は”ケンピンスキー”というホテルチェーンのオーナーです。先週私はアルステルという湖の近くにあるホテルのマネージャーを首にしました。彼の代わりにあなたを雇いたいのですがいかがですか？」

「私もそのホテルに住んでいるから、あそこで一緒にいられます。」と彼女は言った。

もしこれがゆきを見る前に起こったなら、もちろん私はすぐ承諾したけれど・・・ゆきのような脆い日本人の美人を見てからだと、迷う必要がなかった。

「すみません。残念ながら、私はガールフレンドと一緒に大学で勉強するつもりですから、お断りします。」

「そのアジア女のせいで？あなたは馬鹿なの？」

もう二度とそんなチャンスはあなたの人生にないわ。」

「私は彼女が好きです。彼女と一緒にいたいだけ。せっかくですが、あなたはもうお帰りになったほうがいい。」と私は答えた。

ドイツの悪い言葉を吐いて、彼女は自分のセキュリティーと一緒に出て行った。

ゆきは私に近寄り私にキスをした・・・

その晩、私はゆきちゃんと一緒に傘を差してハンブルグの通りを長い時間歩いていた。

もちろん、ハンブルグでまた雨が降っていた。

# 顔の火傷も心の火傷も

山田一郎は両親の死後、一人で上野西にあるアパートに住んでいた。一郎の先祖の男は皆消防士だったから、彼は子供の時から将来について他に夢を見なかった。だから学校を卒業した後、やはり彼は立派な消防士になった。火災が起きたら非常ベルが鳴ると、いつも一郎は真っ先に消防車に乗った。いつでも一郎は、まだ中に残っている人たちを助けるために、迷わず荒れ狂う炎にも真っ先に飛び込んで行った。

ある日彼は大きな火災の消火に当たった。三つの家が炎で包まれていた。一郎が消火ホースを伸ばしていた時、年寄りの女性が彼に「奥の部屋に娘が残っている。彼女を助けてください！」と泣き付いてきた。

一郎は他の消防士にホースを渡して、息を止め炎で包まれたアパートに飛び込んだ。彼は奥の部屋で炎と煙の向こうに床の上で意識を失っている女性を見つけた。彼女を抱きかかえて彼は素早く外に出た。看護師が彼からその女性を受け取り救急車に入れた。彼女の母親も彼女と一緒に救急車に乗った。救急車のサイレンが去って行った時、一郎はもう他の消防士たちと一緒に消火活動を続けていた。

その夜仕事が終わった後で、一郎はその女性について考えていた。彼は彼女の小さくて細い体を抱きかかえた時、突然心に雷が落ちたように感じた。翌日、一郎は彼女がどうなったかを知らなければならぬと感じた。そして、搬送先の上野病院に行った。

「昨日火事から助け出した女性に会いたいのですが、いいですか？」と彼は受付で聞いた。

「彼女は顔に深い火傷を負ったので、今はいけません。一週間後に来て下さい。」

「彼女の名前は何かですか？」

「田中美鈴さんです。」

一郎はアメ横に花と果物を買に行った。三十分後きれいな花束と果物の籠を受付に渡して、

「美鈴さんの病室に。」と彼は言った。

彼女の顔を見なかったけれど、一郎はその美鈴に強い感情を感じた。

「私は彼女に恋をしたのかもしれない。」と彼は自分でもびっくりした。

その日から毎日彼は病院にいる美鈴に贈り物を持っていった。

ある日受け付けの女性が「彼女に会ってもいいですよ。」と言った。

美鈴の顔には重い火傷の跡があるだろうからと、一郎は彼女と会うのを少しためらった。

でも彼は現実の重さから一度も逃げたことがなかった。

「彼女の顔にどんな傷があっても彼女を愛している。」と彼は思っていた。

火災の後で美鈴は少しずつ回復していった。火傷の強い痛みより、頬にある醜い傷跡に彼女は随分と苦しんでいた。「これからは誰も私を見たくはないだろう。」と彼女は思った。「もちろん、醜い火傷の跡が頬にある女性と誰も結婚したくはないだろう。」その考えは鈍い針のように彼女の心に突き刺さった。

誰か知らない者が、病院にいる美鈴に花と果物を持って来た時、美鈴はとてもびっくりし、そして恥ずかしかった。「彼は私の火傷について知らないのだわ。」と彼女は思った。母親が彼女を助けた消防士のことを話した。美鈴は誰かが彼女を抱きかかえ

ていたのをぼんやりと覚えていた。彼女は父親のいない家庭で育ったので、今まで一度も男性の胸に抱かれたことがなかった。その感覚は彼女にとって一番貴重だった。ある日やっと、お医者さんが顔の火傷から包帯を外した。それからしばらくの間、美鈴は鏡の前に立っていた。

この醜い火傷の跡を誰にも見られたくない！

可哀想な彼女は自分をすごく醜いと感じていた。

突然病室の戸が開いた。きれいな花束を持っているハンサムな男性が入って来た。

すぐに美鈴は手で顔を隠した。

一郎は彼女に近寄り、優しく彼女の手を下げ、彼女の唇にキスをした・・・

こんなシーンはおとぎ話の終わりにならなければならないけれど、私たちの話では、もう何かが起こっていた。

一郎と美鈴はしばらく一緒に暮らしていたけれど、子供を作るかどうかを決めかねていた。

ある日一郎は大きな火事の消火に行った。突然燃えている家から赤ちゃんの泣き声が聞こえた。

「家の中にまだ子供がいる！」と彼は言った。

「あそこには誰もいるはずがない。」と皆は言った。「あなたの聞き間違いだろう。」

でも、その家からもう一度赤ちゃんの泣き声が聞こえた。一郎は迷わないですぐ炎で包まれているアパートに飛び込んだ。声はベッドの下から聞こえた。床の上に這いつくばって一郎はベッドの下に手を伸ばし、泣いている赤ちゃんをそこから引き出した！

その時、天井から彼の頭に燃えている木の一部分が落ちた。一郎は、火傷を負いながら、息を切らし、最後の力で懸命にその子を抱き締めて、外に出た。その直後、彼は意識を失って倒れた・・・

病院で意識が戻った時、一郎はベッドのそばにいる美鈴を見た。彼はすぐに赤ちゃんのことを思い出した。

「赤ちゃんはどうなった？」と美鈴に聞いた。

「赤ちゃんは大丈夫よ。この病院の小児科にいるわ。」

「赤ちゃんの両親はどこ？」

「あの火事で亡くなったらしいわ。」

彼らはお互いに見つめあっていた。

一郎は「君もそのことについて考えているの？」と聞いた。

美鈴はこっくりと頷いた。彼女の目から涙が溢れそうになった。

時は流れ、上野にもう一組の幸せな若い家族が現れた。

彼らはかわいい子供と一緒に上野公園を散歩した。子供を喜ばすために時々動物園を訪れるのを忘れなかった。



# 英語のプライベートレッスンは危険

しおりという若い女性は「ドトールコーヒー」が好きだった。ケーキもコーヒーも美味しいし、ただでコーヒーのおかわりもできる。店の雰囲気も心地よかったのだろう。

今回しおりはいつものように好きな抹茶と小豆のケーキをコーヒーと一緒に食べながら、ゆっくり女性誌を読んでいた。でも、その日彼女はせっかくのコーヒーと雑誌に集中することができなかった。隣のテーブルで金髪の若いアメリカ人男性が、きれいな日本人の女性に英語のプライベートレッスンをしていた。カフェに座っていた女性は皆、アメリカ人と彼の生徒をちらちらと見ていた。そのプライベートレッスンはとても面白かったのだろう。どうしてかという、彼らは大きな声で笑っていて、楽しそうにみえていたからだ。しおりはその生徒の女性が思わせぶりな態度をし過ぎていると思った。

「いやらしい。男たらしね。」

ハンサムなアメリカ人を見てしおりは「どうして今まで私は英語を勉強しなかったのかしら？」

突然、怒っている大柄の男がカフェに入ってきた。まっすぐにそのテーブルに近寄って行って、何も言わないでアメリカ人に強烈な平手打ちをくらわせた。アメリカ人は椅子と一緒に倒れた。その後で大柄の男は、生徒の女性の手を掴んで彼女を立たせた。

「こんなものが“英語のプライベートレッスン”だということか？お前の夫が忙しく働いている時に、アメリカ人の女たらしと遊んでいていいのか？こいつにもお前にも他の“プライベートレッスン”が必要だ。」

立っているアメリカ人に「わかったな？今度その面を見たら、殺すぞ。」と彼は言った。

妻に「行くぞ。続きはまた家でだ。」と言って、怒っている大柄の夫は彼女と一緒にカフェを出た。

カフェの客は皆、息を留めてその出来事を見ていた。アメリカ人は服を整えた。もう微笑んでいなかった。彼の顔の左半分は赤くなっていた。

しおりはテーブルから立って彼に近寄った。

「大丈夫ですか？あんな変な人たちは気にしないでください。気をつけてくださいね。」と彼女は言った。「私はしおりです。」

「こんにちは、しおりさん。私はジョン・スミスです。すみませんが、私は急いでいるので行かなければなりません。」と彼は言って店を出た。

彼女は彼の後をついて行った。

しばらくの間、彼らは黙って歩いていた。

ふとジョンがしおりを見て言った。「すみませんが、私は忙しいのです。あのスターバックスカフェで次のプライベートレッスンがあるのです。」

「心配なさらしないで。私はカフェのすみに静かに座って、邪魔しませんから。ジョンさん、そのレッスンの後であなたとちょっとお話してもいいですか？あなたに相談したいことがあります。」

「少しの時間なら、いいですよ。」

彼らがスターバックスに入ると、テーブルについていた女性が立ち上がった。黄色のミニスカートをはいた若くてきれいな女性だった。

彼女はアメリカ人に可愛く会釈をした。

しおりは「どうしてプライベートレッスンの女生徒たちは皆男遊びしているように見えるのかしら？」と思った。

しおりはカフェのすみのテーブルについて、あまり美味しくないスターバックスのコーヒーを飲みながら、英語のレッスンに耳を澄まして聞いていた。

アメリカ人と女生徒は始終笑っていて、とても楽しそうに見えた。

突然一人の男がカフェに入ってきた。彼は大きくないけれど、彼の動きに強さが感じられた。空手でもしているのかもしれない。

その人はのしのしと歩いて、プライベートレッスンの行われているテーブルに近寄った。

何も言わないで彼は、アメリカ人の顎に強い突きを与えた。アメリカ人はもう一度椅子と一緒に倒れた。その男は女生徒の手を掴んで、何も言わないでカフェを出た。

すると、アメリカ人は立ち上がった。彼のもう片方の頬も赤くなった。

しおりは彼に近寄った。

「大丈夫ですか？」と彼女は尋ねた。

「大丈夫です。」

しおりは微笑みながら「私はこの近くに住んでいます。私の所に来ませんか？そこで少し休みませんか？何かご馳走でもしましょう。夫が戻るまで時間があると思います。」と言った。

# とし子はどこ？

私が初めて日本を旅行した時、下手な日本語のせいで日本人の女性と知り合いになるのが恥ずかしかった。日本の旅行はとても面白かったけれど、独りで行って旅行中孤独の寂しさで苦しんだ。

そんな訳で、今度日本に旅行をする時には、私は日本の出会い系のサイトに載っている日本人の女性と知り合いになっておこうと思った。きれいな女性と一緒に旅行をするほうがいいと思った。でも日本人の女性は、私がイスラエル人だと知った途端にいなくなる。彼女たちは外国人とは知り合いになりたいようだが、イスラエルの変なイメージから、すぐにはイスラエル人と恋に落ちようとは思わないようだ。それでも、私と会っても良いという日本人の女性を一人だけ見つけた。彼女は敏子といった。でも彼女の写真はとてもぼやけていた。昔の写真だったからかもしれない。もしかしたら、今彼女はお婆さんのように見えるかもしれない。でも、彼女だけが私に返事をくれた。彼女は電話番号の他には何も教えてくれなかった。何度か私は敏子と電話で会う約束をしようとしたが、彼女は「心配しないでください。私があなたを見つけます。」と答えた。

それで、「どうやって私を見つけますか？」と聞いた。

彼女は笑って、もう一度「心配しないで。」と言うだけだった。

それで、私は“心配しないで”日本に出かけることにした（敏子に会えるかどうか確かではなかったけれど）。一応、彼女へのプレゼントも買っておいた。

日本への飛行機の中で、私の隣に若い日本人の女性が座っていた。彼女はサイトにある敏子の写真に少し似ていると思った。フライトの始めから私たちは丁寧な微笑みを交わしていた。

彼女に話しかけるのが恥ずかしかったけれど、ある時点で「失礼ですが、あなたは敏子さんですか？」と彼女に聞いてみた。

彼女は私の質問を聞いてびっくりした後でげらげら笑った。

思う存分笑ってから、彼女は「どうしてあなたは私が敏子だと思いますか？」と言った。

私は赤くなって「すみませんが、あなたはある敏子という女性に似ていましたから・・・」とどもりながら言った。

彼女はうっすらと笑いを浮かべて「そうですね。確かに私はとしこです。」と言った。

なんという幸運！

敏子がこんな可愛くて快活な女性だったとは！

私は素晴らしい旅行になると確信して「あなたはよいアイデアを思っていたのですね。私はあなたが敏子さんでとても喜んでいきます。」と言った。「早速私たちの旅行の計画を立てましょう。」

敏子は「私たちの旅行？」と少しびっくりしながらも「ああ、そうね。」と言った。

「私は上野にあるホテルに部屋を予約をしたから、成田からすぐ上野に行きます。小さいホテルですけど、とても便利だと思います。最初の日の上野の辺りを歩きましょう。素晴らしい上野公園にある博物館や神社や寺や動物園などを訪ねましょう。アメ横のレストランで昼ごはんをたべて、その後で浅草に行きましょう。浅草寺を詳しく見て、隅田川の岸を散歩しましょう。夜には演劇を見ましょう・・・」

「あなたの計画はとても面白いのですが、先ず私たちは長いフライトの後で休まなければなりませんよね。」

「もちろん。では休んだ後で計画を実行し始めましょう・・・」

「すみませんが、あなたはホテルに二つの部屋を予約しましたか？」と彼女は聞いた。

私は赤くなって「一つだけ。」と答えた。

「私たちはまだ知り合いですらないですよね。」

私は知り合いでない男性と一つの部屋と一緒にいることはできません。」

「でも、私たちは電話でその問題は話しましたよね・・・私はあなたが嫌がることはしません。私を信頼してください。」

彼女は何も答えないで、窓を見て謎のような微笑を浮かべていた・・・

翌朝私がホテルの部屋で目が覚めた時、服を着ている敏子を見た。

だから、昨夜は夢でなかったとわかった！

素晴らしい光景を見て楽しんで、喜んでいる私は「おはようございます。」と敏子に言った。

彼女は私を見た。「あなたは大きな間違いをしていますよ。」

「何のことですか？」と私は聞いた。

「私たちの出会いね。私は敏子だけど、あなたが約束した敏子ではありません。昨夜のことも間違いです。私たちは不釣り合いです。私は上野やこの小さいホテルやあなたが好きではありません。私は六本木のナイトクラブなどに若い時から慣れています。貧乏の旅行者と上野の小さいホテルに泊まったり、アメ横の安いレストランで食べたりするより、アメリカ人の紳士と一緒に銀座の高級店を訪ねたり、大きな高級自動車に乗りたいのです。わかりますか？」

私はその言葉に何も答えることができなかった。

「あなたはあなたの敏子さんを見つけるほうがいいと思います。」と彼女は言って、部屋を出て決して私の生活には戻ってこなかった。

彼女の言葉を聞いてめまいがし部屋と全世界が私の目の前から崩れ落ちていった。長い間私はショックから立ち直ることができなかった・・・

それでも、私は人生も旅行も続けようと思い、ベッドから這い出たほうがいいと思った。それで、取り敢えず起きて朝の普通の用事をし、ホテルを出た。

まずはカフェを探した。私は朝はコーヒーなしではぜんぜん考えることができない。スターバックスでカフェラテのカップを一杯飲んでから私は私の敏子に電話することにした。

前の敏子にプレゼントをあげなければ良かったと思った。

私は敏子に電話をかけた。

「もしもし。こんにちは、敏子さん。私は昨日夜にイスラエルから到着しました。会えますか？」

「こんにちは。午前十時に渋谷のハチ公口の交番の近くでいいですか？」

「はい、いいです。ではまた。」

「ではまた。」

そして、十時に私は渋谷の交番の近くで敏子を待っていた。

ここではいろいろな若い女性がデートの待ち合わせをしているようだ。でも敏子と思われる女性は見つからなかった。

やがて、ある女性が私のほうを見つめているのに気がついた。彼女が私の敏子に似ているかどうかわからないけれど、「失礼ですが、あなたは敏子さん？」と私は聞いた。

「はい、敏子です。」と微笑んで彼女は言った。

「どうぞよろしくお願ひします。あなたを渋谷のイタリアンレストランに招待してもいいですか？」

「もちろん。」と彼女は答えた。

私たちは渋谷駅の近くにあるイタリアンレストランに行った。彼女は可愛くて微笑んでいて、私と丁寧に会話をしていた。

レストランで私たちは美味しいイタリアの料理を食べながら、お互いに質問をしてゆっくり知り合いになっていった。食事の終わりに、アイスクリームを食べながら私は「上野にある私のホテルに行きましようか？私はあなたにイスラエルから素晴らしいプレゼントを持ってきました。」と言った。

「すみませんが、そういうわけにはいきません。」と彼女は答えた。「私は結婚しているのですから・・・」

私は自分の耳を疑った。

「あなたは結婚しているのですか！？でも、どうして出会い系のサイトに・・・？」

「私が出会い系のサイトに？私は一度も男性と文通をしたことなどありません。あなたは誰かと勘違いをしているようですね。」

「でも、あなたはとしこさんでしょう？」

「日本にはたくさんとしこという女性がいます。あなたは違うとしこ文通をしたのでしろう。」

もう一度私は大きな間違いをしてしまったようだ。

私の本当の敏子はどこ？

私はすぐ敏子に電話をし直した。

「敏子さん、すみません。私の間違いのせいであなたと会い損ねてしまいました・・・」

彼女は笑って「心配しないでください。今晚八時に上野公園の京成の入口の近くで会いましよう。」と言った。

「もちろん、会います。」

八時に私は上野公園の京成の入口の階段を上った。もう暗くなっていた。公園の入口のベンチで一人の女性が座っていた。彼女は微笑んで私を見た。彼女は敏子の写真に特に似ていなかったけれど、「もちろん、それは敏子！」と私は思った。

彼女に近寄って、私は「今晚は、敏子さん。」と言った。

「こんばんは。」

「敏子さん、あなたをカフェに招待してもいいですか？コーヒーを飲みながら良く知り合いになりましよう。」

「あなたは五千円もっていますか？」と彼女は聞いた。

「五千円？あなたはお金が必要ですか？」私にはわけがわからなかった。

彼女は怒って「あなたは馬鹿？私は働いています。私の給料は高いのですよ。」と言った。

私は後ずさりして「すみません。失礼でした。」ともごもご言った。

彼女は「行かないでください。四千円でもいいです・・・」

私は彼女を聞かずに走り去った。

今回も間違った。

多分私は本当に馬鹿なのだ、と思った。

でもすぐに敏子に電話かけた。

「明日午前十時に上野駅のみどりの窓口の前で。」と彼女は言った。

翌日の午前十時に私は上野駅のみどりの窓口の前で立っていた。そこには約束した相手を待っている女性がたくさんいた。一人の女性がちょっと写真の敏子に似ていると思った。彼女に近寄って、「失礼ですが、あなたは敏子さん？」と私は聞いた。「いいえ、私はひろこです。」と彼女は答えた。突然「私はとし子です。」と誰かが言うのを聞いた。素早く振り向くと、年寄りのお婆さんがいた。何も言わないで私は去った・・・

「敏子さん、最後の約束をしましょう。私はあなたと会うことができないかもしれません。」

「OK. 今晚九時に渋谷のブルーパブに来てください。」  
九時に私は渋谷のブルーパブに入った。パブの中では大きな音で音楽が演奏され、変な若者が大勢いた。良く見ると、そこにいるのは化粧をして女性の服を着た男性だけだということがわかった。突然、厚く口紅を塗って青いまつ毛をつけた若い男性が私のほうに女性的な歩き方で近寄ってきた。彼は「何かを探しているのですか？」とお釜っぽく聞いた。「私はとしこさんという女性を探しています。」彼はニヤニヤしてからかうように言った。「私がとしこよ！」これは私にとって耐えられないことだった！

その後の私の旅行はとしこの幻なしで続けられた。私はくまなく私の好きな東京を観光していた。とても楽しんだけど、時々としこについて考えた・・・  
帰国の飛行機の隣の席に愉快できれいな日本人の女性が座っていた。フライトの始めから私たちは丁寧な微笑みを交わしていた。私は彼女が私に何か尋ねたいらしいのだが、恥ずかしがっているのを感じた。やっと、彼女は「失礼ですが、あなたはイスラエル人ですか？」と言ってきた。「はい、イスラエル人です。お手伝いが必要ですか？」彼女は恥ずかしそうに微笑んだ。「私は始めてイスラエルに行くのですけれど、そこには誰も知り合いがいません。ちょっと怖いのですが・・・」  
「イスラエルで何をするつもりですか？」  
「エルサレムの大学から日本の文化についての講義をするのよう、頼まれました。」  
「そうですか。素晴らしいです！私はエルサレムの大学の近くに住んでいます。心配しないでください。お手伝います。私は自分で日本の文化を勉強しています。」  
「本当に？素晴らしいですね！私は大学の寮に泊まるつもりです。そこはどこにあるのを教えてくださいませんか？」  
「もちろん、心配しないでください。」  
彼女は感謝の目で私を見ていた。本当に彼女は一番可愛くてきれいな女性だと思った。彼女も私が好きと私は感じた。「お名前は何か？」と私は聞いた。「としこと申します。どうぞよろしくお願いします。」と彼女は答えた。

# 可愛い忍者、早く帰って来てください！

深夜、電話のベルが私を起こした。エルカという私のガールフレンドからの電話だと思った。今夜彼女は医者として病院で夜勤をしていた。

でもそれはエルカからではなかった。

「警察です。」と男の声が言った。「寝ているところ邪魔してすみませんが、私たちはあなたの手伝いがすぐに必要なのです。」

「電話番号を間違えたのでしょうか。おやすみなさい。」

「ちょっと待ってください。あなたは大学で働いている日本語の専門家ですよね。」

「そうです。あなたは夜中の二時に日本語を勉強したいのですか？」

「私たちは日本人の女性を尋問しなければならないのです。彼女は日本語しか話せません。今夜エルサレムの中心で撃ち合いがありました。この女性の他は、皆殺されてしまいました。殺されたのは皆、日本人でした。どうして彼らはイスラエルに来たのでしょうか？殺し合いをするためでしょうか？この事件は、全くわかりません。早く来てください。警察のパトカーがあなたの家の前で待っています。」

「あなたたちはどこにいますか？」

「ハダサという病院にいます。彼女は傷を負っています。今お医者さんが傷を縫い合わせています。あなたは来ることができますか？」

「はい。でも、どうやって私を見つけたのですか？」

「大学のサイトで。」

“夜の射撃”、“傷ついた日本人の女性”！

私は、まるで自分がよくあるサスペンス小説の主人公であるかのように思った。

電話で私と話した人は、愛想よく微笑む大柄の男性の警官だった。

「私はパブリクです。」と彼は言った。「来てくれて、ありがとう。私たちは、何が起こったのかわからないのです。五人の死体と銃がたくさん残されていたけれど、これについての情報は全くありません。」

私たちはその女性の病室に入っていった。

顎まで白いシートで覆われた若い女性が、身動きもせずベッドで寝ていた。

彼女は、よくあるサスペンス小説の女主人公のように美人だった。でも、顔がとても青白かった。

彼女のベッドの近くに、女性の警官が立っていた。

「彼女は大丈夫です。」とパブリクは言った。「彼女と話してもいいですよ。」

「彼女の名前は何かといいますか？」

パブリクはメモを見て「林ひろこです。」と言った。

女性は自分の名前を聞いた途端、まぶたを開いて脅えた目で私たちを見た。

「こんばんは。」と私はにこやかに言った。

驚いて彼女は目を見開いた。

「ひろこさん、驚かなくてもいいのですよ。私は友人です。」とあわてて私は言った。

「あなたは誰？」と彼女は聞いた。

「私は日本語の通訳者です。彼らは警察の人です。私たちはあなたに協力したいのです。あそこで何があったのですか？話してください。あなたは誰ですか？どうしてイスラエルにいるのですか？」

ひろこはヤクザの親分の娘だということがわかった。ある日突然、東京のヤクザの間で抗争が始まった。この抗争でヤクザは、女も子供も容赦なく殺した。ひろこの親戚は皆殺された。父親はひろこを助けるために、何人かのボディガードとともに彼女をイスラエルに送った。誰もイスラエルまでは彼女を探しには行かないだろう、と彼は思ったからだ。でも、ヤクザの殺し屋はここイスラエルまで来て、彼女を見つけた。

私は彼女の言ったことをパブリクに通訳した。

突然、パブリクの携帯電話が鳴った。

「パブリクさん、日本の大使館から人が来ました。その日本人の女性に会うために。今から彼らはあなたのところに来ます。」

パブリクはほっとした気持ちになった。彼はその複雑な出来事をどうしていいかわからなかったからだ。ちょうどいい時に手伝いが来た、と彼は思った。

「あなたに日本の大使館の人が来ました。」と私はひろこに通訳した。

ひろこの目に恐れが見えた。彼女はシーツを取り除けて素早く立ち上がった。彼女はシーツの下でも、ちゃんと服を着ていたのだ。(突然の地震があった時にすぐ逃げられるよう、多くの日本人の女性は服を着たままベッドに入る、と聞いたことを思い出した。)

彼女の白いシャツとジーンズが血で汚れていた。彼女の右の腕は、肘から手首まで、包帯が巻かれていた。

ひろこはよくあるサスペンス小説の主人公のように細くてしなやかな女性だった。

いきなり彼女は私の袖を掴んで言った。「早く逃げましょう！彼らは殺し屋です。」

「どうしたのですか？」とパブリクが聞いた。

「彼女はその大使館の人が殺し屋だと言いました。」

「彼女を安心させてください。彼女を脅かすものは何もありません。私たちが彼女を守ります。」

パブリクは銃を取り出した。女性の警官も同じことをした。銃を見てひろこは怖がった。

彼女は小さい女の子のように私の袖を強く握った。彼女を安心させようとしたがだめだった。

外の廊下から足音が近づいてきた・・・

しかし、これは本当に大使館の人だった。彼は顔が青白く、眠そうだった。

パブリクと女性の警官の銃を見ると、彼らはとても驚いたようだったが、私の「心配しないでください」とパブリクの「Don't worry」が彼らを安心させた。パブリクと女性警官は愛想よく微笑んで銃をしまった。五分ほどたつと、大使館の人は全く落ち着いてひろここと日本語で、パブリクと英語で話し始めた。

その後皆は警察に行った。朝まで警察の人がひろこを尋問していた。(私は通訳していた。)ひろこは父親と電話で話した。大使館の人がひろこを大使館に連れて行こうとしたが、彼女は断った。彼女は怖がって、ホテルに戻るのも嫌がった。私が彼女に私のアパートに泊まるよう勧めると、やっと彼女は快諾した。

家へ帰る途中で、「何とエルカに話したらいいだろう？」と私は考えていた。

朝の八時半だった。エルカはもう夜勤から戻って寝ているかもしれない。



アパートに入ってエルカを起こすことにした。私がひろこと一緒にベッドルームに入ると、エルカはすぐに起き、胸をシーツで覆ってベッドの上に座った。しばらくの間、彼女は私とひろこをかわるがわる見ている。

それからエルカは「誰を連れてきたの？」と私に尋ねた。「これは何なの？」

「君が心配することじゃない。」と宥めるように私は言った。「こちらはひろこさんだ。ひろこさん、こちらはエルカです。」

二人の若い女性は何も話さないでお互いに長い間見詰めていた。この状況に私は自分が要らないと思った。

やっと、私は話した。

「エルカ、ひろこさんは傷ついた日本人の女性だ。ヤクザの殺し屋が彼女を探している。彼女が日本に戻るまで私たちのアパートに泊めてあげてもいいかな？彼女がホテルに泊まるのは危険なんだ。」

エルカは「私たちのことについて考えたの？殺し屋がここに来るとすると、彼らは私たちを容赦しないんじゃない？」と言った。

「どうしたいんだい？彼女を外に捨てられないだろう？」

エルカがガウンを取ろうと手を伸ばした時、彼女の胸が見えた。

「何見てんのよ？」とガウンの前を閉じながら彼女は言った。

私とひろこは視線を交わした。

エルカは立ち上がってトイレに向かった。

「エルカ、僕はこれから重要な会見に行かなければならないんだ。ひろこさんの世話をしてくれないか。」と私は言った。

「心配しないで。」二人の女性はもう一度、互いに相手を見た。今度は彼女たちは微笑んだ。

私は急がなければならない。エルカにキスをし、ひろこに手を振って、急いで家を出た。

＊

私がアパートに戻ると、エルカとひろこは一緒にベッドで寝ていた。彼女たちの寝方から、互いに友達になったのだな、とわかった。

私は昨夜、眠らなかった。

客間にあるソファで居眠りした時、広いベッドについての夢を見た・・・

おいしそうな食事の匂いと、フライパンで揚げ物をしている油の音が私の目を覚ませた。時計を見ると午後四時半だった。エルカはもう仕事に出て行ったようだ。私はすぐに起きあがって、匂いがしてくる方に行った。

台所でひろこが食事の支度をしていた。テーブルには日本の料理がたくさん置かれていた。ご飯や天ぷらや魚の料理などが私の席にあった。どれも出来たてで、おいしそうだった。

でも一番素晴らしかったのは、大きなエルカのガウンを着て、ちゃんと髪をとかしたひろこだった。

彼女は「おはよう。一緒に食事をしましょうか。」と言った。

私は答えるかわりに彼女にキスをしたかったけれど、電話が鳴った。

パブ里克からだった。

「すみませんが、すぐにあなたと話したいのですが。あなたの家の前の車の中にいます。早く来てください。とても重要なことです。」彼の声は緊張していた。

どうしたのだろう？もう一人傷ついた日本人女性がいるのだろうか？

「すぐ行きます。ちょっと待っててください。」

そしてひろこに「少し待っていてくださいね。」と微笑んでからアパートを出た。

パブリクの車は入り口の横に止まっていた。

私が車に入って座ると、彼は微笑んで「こんにちは。」と日本語で言った。

「日本語を勉強したのですか？」と私は聞いた。「どうしたのですか？」

パブリクは真面目な顔をして話し始めた。

「私たちはあの撃ち合いの事件を調べて、とても驚きました。ひろこが、仲間を殺した人を皆殺したのです。殺された人の中に男の服を着た女性がいました。彼女は敵のヤクザの親分の娘だったのかもしれませんが。他の人たちは彼女のボディガードだったのでしょう。ひろこが殺し屋です。」

「ひろこが銃を持ったヤクザ四人を殺したんだって？」私は信じられなかった。女の子のように細くて小さいひろこが殺し屋だったなんて。まさか！ウソだ！

パブリクは「忍者を信じますか？」と聞いた。

その時大きな黒い“イスズ”のジープが、私のアパートの建物の入り口の前で止まった。大柄で恐ろしい顔つきの日本人の男が二人、ジープを降りて走って入り口に入っていった。

私はパブリクと一緒にすぐ車を降りて、

彼らの後から入り口に入った。パブリクは途中で銃を出した。階段は撃ち合いの音で一杯になった。

「ここに残って。私について来ないでください。」とパブリクは言った。彼は両手で銃を握り、音をたてずに階段を上った。私は彼の後をついて行った。

突然、撃ち合いの音がやんだ。静けさの中、隣人が電話で警察を呼ぶのが聞こえた。

私たちが二階に上がったとき、私の部屋の戸が開いているのが見えた。

パブリクは戸を足で蹴って開けて、アパートの中に跳んで入った。私は彼の後から入った。

キッチンの床の上に殺されて血まみれのヤクザが二人横たわっていた。窓が開いていた。ひろこはいなくなっていた。突然、窓の外で車のエンジンの音がした。私たちは窓に近寄って外を見た。ヤクザのジープが速いスピードで走り去って行った・・・パトカーのサイレンの音が近づいた。

エルカが帰って来るまでに、私は台所の床をちゃんと掃除しておいた。私は彼女にその事件について何も話さなかった。

エルカはひろこが出て行ったのを聞くと、とても寂しがった。

「心配しないで、彼女は戻ってくるから。」と私は言った。

「あなたは自分でも、そうは思っていないじゃないの。」とエルカは言って泣きだした。

何日か後で、夜突然ぱっと窓が開いて、私とエルカは目を覚ました。部屋に私たちの忍者の細い姿が現われた。

「さようならを言うために来ました。」と彼女はささやいた。

私たちは優しくお互いにキスをした。

そして彼女は煙が消えていくように、永遠にいなくなった。

# 自分の恋から逃げないほうがいい

帰国の日に、ジョーンは一夜限りのガールフレンドのベッドの上で目が覚めた。誰も見送りに来てくれないから、空港へ行くのはちょっと寂しい。ジョーンは、五年の日本滞在の最後に偶然出会った女性のベッドで目を覚ますとは失敗だったと思った。親しい人や愛する恋人を手に入れることができなかったからだ。ジョーンは幸子を思い出した。幸子は本当に彼を愛していたけれど、ジョーンは彼女に誠実ではなかった。素晴らしい幸子をおいて、ほんの出来心から彼は別の女性に走ってしまった・・・朝のコーヒーを飲みながらゆきずりのガールとつまらない言葉を交わして、ジョーンは頭の中で密かに日本に別れを告げた。それは簡単ではなかった。五年間で日本は、彼にとって一番のガールフレンドとなっていたからだ。荷物を持って、ジョーンは上野駅にある“ハードロックカフェ”に行った。長い間そこはジョーンの第二の家になっていた。この家で、時々襲ってくる憂鬱な考えから逃げようと、ジョーンは自分自身を隠した。今、日本での最後の時、ジョーンはそこにちょっと座っていたかった。カフェの隅のお気に入りのテーブルについてコーヒーを飲みながら、彼は最後になるであろうその場所の雰囲気を感じてしまおうとしていた。

五年前、ジョーンは自分の心の道を見つけるために日本に来た。でも、精神の探求の代わりに、いろいろな女性のベッドからベッドに跳んでいた。

誰一人とも真面目な関係を持つことができなかったし、精神の探求なんてもちろんできなかった。空の手で、アメリカに帰るところだった。

突然、カンガルーのように赤ちゃんを抱えた若い女性がカフェに入ってきた。彼女はジョーンのテーブルに近寄って、黙って彼の向かい側に座った。ジョーンは目を丸くしながら彼女を見た。「幸子だ！」

幸子は彼の一番輝かしい過去の思い出だった。どうして別れてしまったのか？どうして今までジョーンは彼女に電話しなかったのか？今そんなことはもう重要ではなかった。

一年半ぐらい前に別れた時と、彼女は全く変わっていなかった。同じ美しい顔には、同じ不思議な微笑を浮かべていた。でもその赤ちゃんはどこから？

しばらくして彼女は「こんにちは。」と言った。「お久しぶりですね。」

ジョーンは機械的に「こんにちは。」と答えた。でも長い間会わなかった彼女と、何について話せばいいのだろうか？

彼は何も話す必要がなかった。

幸子は「私はあなたがアメリカに帰るつもりだということを聞きました。出発前にあなたの息子を見たいのではないかと思って・・・」と言った。

「私の息子？」ジョーンは自分の耳が信じられなかった。

「ほら、見てください、可愛いでしょう。あなたに似ていますね。たかしといいます。」

ジョーンはカフェが回り始めたように感じた。

赤ちゃんは可愛かったけれど、本当に彼の息子なのだろうか？

幸子は赤ちゃんを彼に抱かせた。

ジョーンは、男の子を抱くといろいろな感情が湧いてきたが、何よりも先ずこの子のことが心配になった。

彼女は話しを続けた。

「これから私は五分くらい、席を外します。その間たかしの面倒を見ていてください。そこにはその子のミルクと哺乳瓶とオムツがあります。」そう言って彼女は、袋をジョーンの隣に置いて行ってしまった。

ジョーンと赤ちゃんはお互いにしばらく見詰め合っていた。ジョーンは彼らの間に見えない縁を感じ始めた。たかしは本当に自分の息子だとジョーンは思った。でも、時間が経っても幸子は戻らなかった。二十分待ってジョーンは幸子に電話をかけた。

「幸子、君はどこ？」

「私はいろいろと忙しいのです。」

「早く戻ってきて。私は飛行機の時間にもう遅れている。すぐに空港に行かなければならないんだ。」

「一時間後赤ちゃんに飲ませるのを忘れないで。」と幸子は言って電話を切ってしまった。

「一時間後？」ジョーンはパニックに陥って、何度も何度も幸子に電話をかけたが、彼女は答えなかった。

どうしたらいいのだろうか？誰かにその子を預かってもらおうか？でも誰に？皆は彼に「その子は誰の子ですか？」と聞かだろ。警察に預かってもらおうか？でも、警察はジョーンがその子を誘拐したと思うかもしれない。ジョーンは自分が罠に落ちてしまったと思った。

どうしたらいいのだ、もう少しで飛行機がでてしまう。どうしたらいいのだ？

その時、たかしが泣き始めた。お腹が空いているのかもしれない。ジョーンは哺乳瓶を袋から出して、赤ちゃんに飲ませた。赤ちゃんはすぐに落ち着いて、ジョーンを見詰めた。

ジョーンは今日アメリカに帰れないと悟った。

顔を上げると、ジョーンは“ハードロック”の店員が彼を見ているのに気がついた。

ジョーンは店員を呼んでもう一杯コーヒーを注文した。

たかしはミルクを飲み終わって、笑いながら「ダーダー」と言っていた。

ジョーンは赤ちゃんに暖かい感情を抱き始めた。

ふと彼は、幸子とたかしと一緒に暮らすのもいいなと思った。今まで彼は自分の家族を持つことについて一度も考えたことがなかった。でも、今きれいな幸子と可愛いたかしを見て、彼はそんな家族が欲しいなと思い始めた。アメリカへキャリアを積みに行き、自分の幸せを逃がしてしまっているのだろうか。愛する女性と赤ちゃんなしで、キャリアだけが必要なのだろうか？

その時電話が鳴った。

「あなたたちはどうですか？」と幸子が聞いた。「赤ちゃんにちょっと慣れてきましたか？」

「全くどうして君はこんなことをしたんだ？」

「たかしにはお父さんが必要だと思いませんか？あなたにはその素晴らしい息子も家族も必要だと思うのですけど。」

ジョーンは、幸子が電話で話しながらカフェに入って来たのを見た。彼女がジョーンのテーブルに近寄ると、赤ちゃんは母親のほうへ手を伸ばした。幸子は優しく微笑んで、男の子を抱いた。ジョーンは愛する女性と可愛い息子を見て、とても嬉しかった。その時、幸子とたかし、そして家族というものが、彼にとって一番大切なものなのだ、ということが初めてわかった。これが、彼が日本で得た最高のものだった。

彼は涙を抑えずに、幸子に優しくキスをした・・・

# 彼女は何という名前？

背が高く、肩幅が広く、力強そうで、いつも微笑んでいるアレックスは、日本を旅行してたくさんの女性と知り合いになった。日本の女性たちは、冗談が好きで日本語ができるこのハンサムな外国人と、よく楽しんでいた。

帰国して、アレックスは少しずつ普通の生活に戻っていった。でも、遠くにある日本という素晴らしい国と、そこにいるたくさんのきれいな女性のことを思い出したり、また彼女たちの夢を見たりもしていた。

彼は時々電話で、昔のガールフレンドたちと話をしていた。

ある日アレックスは、電話で答える女性の声を聞いていた。

「こんにちは。久しぶりですね。」と声は言った。

「こんにちは。」とアレックスは言ってから、「彼女は誰だ？」と思った。

「私を覚えている？」と声は続けた。

「もちろん。」でもアレックスは、その声が誰の声なのかわからなかった。

「お元気ですか？」

「元気です。あなたは？」

「元気です。東京の天気はどうですか？」

「東京の？知りません。私は大阪に住んでいますから。今大阪では強い雨が降っていますよ。」

大阪に住んでいる？彼女はなおみかもしれない。

「娘さんはいかがですか？」

「どこの娘ですか？私には息子がいます。」

彼女はなおみじゃない・・・ひとみかもしれない。

「あなたの猫はどう？」

「猫ですか？私には犬がいます。あなたは大丈夫ですか？」

「ごめんなさい。間違った。すみません。ちょっと、注意がたりなかった。」

彼女は誰？たかこかもしれない。

「あなたの仕事はいかがですか？」

「私は長い間失業しています。もう忘れたのですか？」

彼女はたかこじゃない！何を聞いたらいいいんだ？

「今何をしていますか？」

「あなたが私を招待してくれたので、今旅行の準備をしています。来週行くつもりです。二週間だけいられます。空港に私を迎えに来てくれますか？」

「もちろん。いつ来ますか？」

アレックスは背中に冷たい汗が流れるのを感じた。彼は知っている女性皆を招待していた。来るのは誰なのか？

でももう、断るのは不可能だ！

「私は十月一日の夜三時に、アリタリアという会社の飛行機で行きます。ちゃんと書いて、忘れないでください。」

アレックスは機械的に全部を書いた。

「早くあなたと会いたい。」

「私も。」

「来週までがんばりましょう。気をつけてください。じゃね。」彼女は電話を切った。

アレックスは馬鹿っぽい状況に入った。

どうしたらいいのだ？

誰かが来週アレックスのところに来るのだ。

誰かを彼は空港へ迎えに行くのだ。

複雑な問題だ！

十月一日の夜、花を持ったアレックスはアリタリアの飛行機を待っていた。到着者の中で、日本人の女性は一人だけだった。アレックスはその女性のことを思い出したけれど、彼女の名前を思い出すことはできなかった。彼女はアレックスを見ると、喜んでにっこりした。

アレックスは彼女に花をあげて、優しくキスをした。

その女性は本当に美人だった。もちろん、アレックスは、すぐに彼女に恋をした。

彼らは彼女の二週間の滞在中とても楽しんでいた。

アレックスは彼女に「お名前は？」と聞くのが恥ずかしかったので、彼女を“ウサギちゃん”と“小鳥ちゃん”で呼んでいた。彼女の出発前に、彼らは結婚を決めた。アレックスは一ヵ月後大阪に引っ越しする。彼女と彼女の息子と一緒に暮らすために。空港で彼女を見送った後彼は考えた。「彼女がなんという名でもかまわない。彼女の所に行けば、結婚前にそれはわかるだろう。」

# 傷ついた鶴を見つけて

ある日、私はイスラエルで出ているロシア語の新聞に載っていた「日本語の授業」という生徒募集広告に目を止めた。

「日本語か。私に日本語が必要あるかな？」と考えた。当時私はイスラエルの病院で内科医として働いていた。イスラエルで働く医者にとって、日本語は必要でない。でも、私はロシアで生まれ育った。教養のあるロシア人にとって、日本の文化はいつも風雅の極みだった。ただ流れて行くイスラエルの日常に、私はそんな美しさの火花の必要性を感じていた。

それで早速、私は新聞にあった問い合わせ番号に電話をした。驚いたことに、電話に出たのは日本人ではなく、日本で働いたことのあるロシア人の女性だった。最初の授業の約束をした。

彼女はナターシャという金髪の若い女性だった。きれいな女性と言えるかもしれないが、私の好みは黒髪の女性だ。ナターシャは、シベリアから日本に行って、日本でホステスとして働いていた。そこでイスラエル人の若者と出会い、彼と結婚してイスラエルに来たのだった。

彼女の授業で、私は「鉛筆」や「キュウリ」や「リンゴ」のような簡単な言葉を学んだ。たぶんよく学べるように、とのことだろう、彼女は授業に胸元の開いたシャツとミニスカートを着て来た。

でも、ナターシャの授業から新しい単語やシベリアのセクシーさを受け取っても、私は日本の精神をぜんぜん感じなかった。

そこで、日本人の先生を探し始めた。

でも、エルサレムには日本人がほとんどいないので、日本語の先生を見つけるのが難しかった。

やっと、エルサレムの大学で勉強している日本人の女学生の電話番号を、知り合いから受け取ることができた。すぐに彼女と連絡して授業の約束をした。

エルサレムの中心の“マクドナルド”の前で会うことになった。

「誰があなたなのか、どうしてわかりますか？」

「私は日本人ですよ。すぐにわかります。」と彼女は言った。

よしこさんは子供っぽい顔つきの、小柄な日本人の女性だった。

彼女から私は、漢字やいろいろな日本語の表現を学んでいった。彼女は日本の文化と毎日の生活についても私に教えた。

「よしこさん、日本のご飯をどうやって作ったらいいですか？」と聞くと、「お米をよく洗って、水と一緒に炊飯器に入れて、電気をつけて二十分待ちます。あとは炊けたご飯を盛り付けて食べるだけです。」と真面目に説明してくれた。

どこまでが冗談でどこまでが真面目かわからなかったけれど、とにかく彼女はとても可愛かった。

よしこは、イスラエルで一人暮らしをしていた。仙台に住んでいる家族を思い出して寂しがっていた。授業で彼女は両親や妹について、たくさん話してくれた。だんだんと私は、仙台や彼女の家族などについてよく知るようになっていった。私にとっての日本とは、よしこの日本だった。私は、実家から遠くにいて寂しがっているよしこを慰めようとした。そして毎回授業の前に、私は彼女に小さいプレゼントと彼女の好きな料理を用意しておいた。少しずつ、よしこは私の家族の一人になってきた。よしこよしこの授業は私にとってなくてはならないものとなっていった。

彼女にボーイフレンドがいるかどうかは、わからなかった。でも私は、彼女が一番大切なことを話せる、唯一の人になっていた。

私は彼女が好きだったけれど、恋人にはならなかった。ちょっと怖かったからだ。恋人という関係は、いつも安定しないから。イスラエルでは、日本語の先生を見つけるよりガールフレンドを見つけるほうが、ずっと簡単だった。

ある日よしこは、私に宿題として傷ついた鶴の昔話を次回までに読んでおくように、と言った。その話を読んで、私はとても感動した。他国に住んでいて、家族から離れている小さいよしこは、傷ついた鶴のようだった。

そしてその授業の日が来ると、よしこはいつもとは違っていた。彼女は固い表情をしていた。私は何か深刻なことが起こったのだと思った。でも、私は尋ねなかった。彼女が何か話したかったら、自分から話すだろう。でも、彼女は何も話さなかった。私が傷ついた鶴の話を音読していると、彼女の目は涙で一杯になっていた。授業中よしこは一度も微笑まなかった。授業が終わって彼女は部屋を出ようとしたが、私には彼女がここに残っていたいように思えた。彼女には何か問題があって、その問題に一人でいることに耐えられないようだった。その時よしこはまさに“傷ついた鶴”のように見えた。私は彼女に「行かないで！」と言いたかったのだが、恥ずかしくて言えなかった。

その晩私の友達が突然電話をかけてきた。「君は日本が好きだろ。だからすぐ、テレビでニュースを見ろよ。」

テレビをつけると、大きな津波が日本を襲ったことを知った。それは2011年3月11日だった。

よしこの故郷、仙台は大きな被害を受けて、町はほとんど残っていなかった。

それを知って、すぐに私は大学の学生寮へ走った。

学生寮で「よしこは今しがた、空港に向かった。」と言われた。

私もすぐにタクシーを飛ばして空港へ向かった。

タクシーから夜だったけれど、私のボスと旅行会社に勤めている友達に電話をかけた。そしてボスから休暇の許可を得た。旅行会社の友達が日本行きの飛行機のチケットについて調べた。「津波のせいで日本行きの飛行機はガラガラだ。次の飛行機は一時間後だ。チケットをとるのに問題はない。」

やっと空港に着いて、あちこちを探したけれど、空港のどこにもよしこの姿はなかった。どうしたらいいのだろうか？よしこなしには日本に行く意味がなかった。しかし一応チケットを買って、日本行きの飛行機に最後に乗り込んだ。

機内の席の一つによしこが座っていた。

私は彼女に近寄って、当たり前のように隣に座った。彼女は私を見ても驚かず、黙って私に寄り添った。

何が私たちを日本で待っているのかは、重要ではない。私たちは一緒になって、全ての問題を解決することができる、と私たちは感じた。

この悲しい旅行については、話したくない。

でもこの旅行から私は、日本人の妻と一緒にイスラエルに戻ってきた。

そのときから

ずっと

私の家の奥で

鶴は布を織る。

私は決してドアを開けない。



# ルームメイトの残り物には福がある

長い間私はセルゲイという友達と一緒にアパートを借りていた。（エルサレムのアパートを借りるのは高いから、若者は普通、友達と一緒に住んでいる。）セルゲイは大体は良いルームメイトだったが、彼が引越して行った時、私はほっとしたのかやっと落ち着くようになった。

セルゲイは面白くておかしい人だったが、彼の素早く変わる興味と趣味は私の目にちらちらしていた。ガールフレンドについても同じだ。ある日、セルゲイは日本に興味を持つようになり日本へ行った。そして日本から帰ると、黙ってじっと考えるようになり、やがて引越して行った。

セルゲイなしでの私の生活は規則正しくなった・・・

ある日、私のドアを誰かが叩いた。

ドアの前にはアジアの若い女性が微笑んで立っていた。彼女の足元に大きな荷物があった。（私は、どうやってそんなに小さくて細い女性が大きな荷物を持って来れたんだろうと思った。）

微笑みながら彼女は会釈した。「こんにちは、セルゲイさん。私はあきこです。ご招待をいただいたので来ました。」

「こんにちは。お入りください。」と仕方なく私は言った。どうして私がセルゲイさんの冒険の後始末をしなければならないのだ？

重い荷物をアパートの中に入れて私は女性を眺めていた。とても可愛い女の子だと思った。

でも、彼女に事情を説明しなければならなかった。彼女は私に何も言わず暇がなく、

「セルゲイさん、ごめんなさい。お手洗いはどこですか？」と尋ねた。私は手洗いを指し示した。

彼女は長い間、手洗いにいた。音から考えるとシャワーを浴びているらしいかった。私はセルゲイに電話をかけてみたが、でなかった。電話で彼をつかまえるのは難しい。

あきこが手洗いを出たら、「私はセルゲイではない」と彼女に言うことにした。

やがて、手洗いのドアが開かれた・・・

タオルを巻いただけの濡れ髪の彼女を見て、私は考えていたことを、すっかり忘れてしまった。

あきこは「私は約束の私の部分を守りました。」と言ってタオルを投げ捨てた。

「セルゲイかどうかなんてかまうもんか。」ついに私はこう考えた。

一時間後、ベッドであきこを抱きながら私は「私は約束の私の部分を守りました」と言った彼女の言葉を思い出した。「約束の私の部分とは何だろう？」と思った。

でも、彼女の潤んだ目を見て私は考えに集中することができなかった。

「今あなたも約束のあなたの部分を守りました。」と彼女は囁いた。「あなたはちょうど私の理想にぴったり。」

私たちは何日かアパートを出なかった（ほとんどベッドを出なかったのだ）。こんな幸せを感じたことがなかったので、私たちは一緒にいるために作られたということがつくづくわかった。

あきこはイスラエルに住むことができないだろうから、一緒に日本に行くつもりだった。

でも、私たちの出発の二日前に突然電話が鳴った。

「こんにちは、セルゲイさん」と受話器に若い女性の声が聞こえた「あんたは私たちから逃げられたとでも思ったの？ 私たちはどこでもあんたを見つけられるのよ。借金を返してもらわなくちゃいけないわね。あんたの住所を知っているから。明日午後五時にテルアビブのダンパノラマと言うホテルのロビーで会いましょう。来たほうが身のためよ。」

これもセルゲイからの贈り物か？ 彼は日本で借金をして返さなかったのかもしれない。今私が彼の代わりにそれを払わなければいけないのか？

どうしたらいいのだ？

あきこは私がとても心配しているのがわかったようで「どうしました？」と聞いた。仕方なく私は全部彼女に話した。

あきこは私にキスをして言った。「あなたが大好き。あなたがセルゲイか、どうかなんて、私にはかまいません。心配しないでください。何か良い案があるでしょう。」

あきこは肘掛け椅子に座ってイスラエル新聞の英語版を読んでいた。突然、喜んで笑った。

「これを見てください。」と言って彼女はエロチックマッサージの広告を見せた。

どうしてそんないやらしいものを私に見せたのだろう、私にはわからなかった。

彼女は何も言わずに電話をかけた「こんにちは。私は日本人の若い女性です。そちらで稼ぎたいのです。ハイ、私は二十歳です。明日午後五時にダン・パノラマというホテルで会えますか？」

私は全部理解し、彼女を優しく抱擁した。

「すごい！私を助けられるかもしれない。」

その晩、私たちは特別に楽しむことができた・・・

佳代は若くてきれいな女性だった。それに加えて彼女は一番腕の立つ殺し屋だった。残忍さと非情さのせいで佳代は氷の女と言われた。親分でさえ彼女が怖かっただろう。

その佳代がセルゲイを殺すためにイスラエルに送られた。

午後五時に彼女はテルアビブのダン・パノラマというホテルのロビーでゆったりした肘掛け椅子に足を組んで座っていた。

突然、そのホテルのロビーに怪しげな二人の男が入ってきた。大声で話している低俗で派手な服を着た男たちは高級ホテルのロビーでは異物として見えた。

セキュリティーの人は彼らを止めず、携帯で上司に連絡した。

その男は佳代を見ると、にやけた笑いを彼女に向けた。彼女はゆっくりと立ち上がった。

「見ろよ。いい女じゃないか。売春婦にしたら、金をたくさん稼ぐぞ。」と一人目の男が言った。

二人目の男は佳代にいやらしく目配せした。「ベイビー、お前は何ができるか俺たちに見せてくれるよな。」とやった。

佳代は微笑んだ。「はい、わかりました。私に何ができるかあなたたちに見せてあげましょう。さあ、私の部屋に行きましょう。」

彼らは喜んだ。自分達のしたかったことができるからだ。そして、三人はエレベータに向かった。

三十分後佳代は誰にも見られないでホテルを出た。フライトまで時間があるので、彼女は地中海を見て楽しもうと、テルアビブの砂浜をゆっくりと歩いていた。

翌日イスラエルの新聞にある記事が掲載された。「昨日二人の有名なマフィアがテル・アビブのダン・パノラマで惨殺された。それは縄張り争いのためにマフィアどうしが戦争を始めたのかもしれない。」

飛行機の中で、佳代はイスラエル人の男性と日本人の女性の若いカップルに気がついた。彼らはずっと愉快そうに笑いあい、とても幸せそうに見えた。それを見て佳代はふと、とても自分が疲れていると感じた。

飛行機は東京へ向かった。

# 青い鳥を追いかけて

人が五十の齢を過ぎると、彼のそばにいる心優しい妖精は彼がこの世でしておきたいことを、急いでかなえてあげなければならなくなる。

この歳になると人のしたいことは、若い頃に比べずっと少ないのだが、これらはかなえるのに手間取るものとなっているからだ。

私は五十歳を過ぎている。しかしそれでも、したいことの一つは、かなえられるのだ。わたしは日本へ行くことができる！私は日本が大好きだ。

今度私が日本へ旅行する目的は二つある。一つは、この孤独に終止符を打ってくれる日本人女性を見つけること。もう一つは、私の日本語の詩集を出してくれる出版社を見つけることだ。現在私はイスラエルに住み、医者として働いているが、できれば日本に住んで作家になりたいと思っている。

私はイスラエルで日本語を学んでいる。先生は隣に住んでいる、さだこ、という日本人のおばあさんだ。彼女の重い荷物を運ぶのを手伝ってあげたことが、知り合いになったきっかけだ。後日、彼女は私をお茶会に招待した。そのとき以来、私達はお互いに訪問しあうようになり、気がつくといつもその場は私の日本語の授業になっていた。

私が日本へ旅行することを話すと、「浅草の小さな古い店で、明治時代の青い鳥の絵の扇を買ってきてください。もちろん、お金は払いますから。」とさだこさんは私に頼んだ。その頼みはとても面白いもののように思われた。

日本に到着し私は、東京の浅草にある「東京の微笑み」というホテルの部屋を借りた。日本の空気を吸うと私は幸せで胸がいっぱいになる。もしかしたら、日本の空気には、何かこう幸せの分子というものが含まれているのかも知れない。

ホテルで少し休んだ後、浅草の狭い通りを歩き、小さな店を何件も訪れ、さだこさんの頼みの扇を探した。そうするうち、一軒の店のショーウィンドウに変わった目をした招き猫が置いてあるのに気がついた。その招き猫の目は磁石のように私を引き寄せ、私はその店に入った。そこには年配の女店員がいた。売っているものは普通のお土産だけだった。探している扇も、とりたてて面白いものもなかったので、私は店を出た。

翌日私がその店の前を通ると、きのうの招き猫が再び私を店の中に引き込んだ。しかしやはり興味を引く物はなかったので、私は店を出た。

二日目までに私は、浅草の狭い通りを全部歩いて、ほとんど全ての店を訪ねたが、さだこさんのための扇はみつからなかった。

三日目をさだこさんの扇を探す最後の日とした。再びあの招き猫の変わった目を見て、私は店に引き込まれた。その日は年配の女店員の代わりに、少女が店番をしていた。

私はその店に置いてある物を、詳しく見て回ることにした。古い扇はみつからなかったけれども、一番高い棚に焼き物の小さい子狐を見つけた。それは昔の中国で作られたものようだった。とてもかわいい子狐だったので私はその焼き物の子狐を買うことにした。

少女に「いくら？」と尋ねると、「えっと・・・おばあちゃんがないから、いくらかちょっとわかりません。でも一万円払ってくれば、私がおばあちゃんに叱られないですむと思います」と答えた。

小さい子狐の焼き物一個に、一万円はとても高いと思ったが、私は買ってしまった。店を出てホテルに帰る途中、私の後を女性が追ってきているような気がした。彼女はとてもきれいだった。だからその彼女が私を追ってくるとは信じられなかった。既に白髪のは私は、きれいな女性に追われることなど、もうしばらくなかったからだ。ホテルの部屋で私は、長いこと焼き物の子狐を眺めていた。すると私の心がほっこりと温かくなってきた。子狐を見ているだけでとても嬉しくなった。

翌日、私は上野の町をぶらぶらと歩き回った。この日私は「私を追ってくる」あの女性を見かけなかった。

ホテルに戻ると、浅草のあの店の、年配の女店員がロビーで私を待っていた。

「すみません。昨日は間違えてしまいました。私の孫娘はあなたに、売ることができない物を買ってしまったのです。お金をお返ししますので、どうかその焼き物の子狐を返してください」と言って女店員は一万円を差し出した。

「私はこの子狐が好きなので返したくありません。すみませんが、子狐は私のところにおいておきます。」女店員は鞆から更にお金を出して「どうぞ、二万円です。私にはどうしてもその子狐が必要なのです。それは売ってはいけない物だったのです」と言った。

「私は子狐で闇取引のようなことはしません」

すると女店員は鞆から更にお札を出して「どうぞ、十万円です。旅行者にとってはいいお金ですよ。そのお金であなたは歌舞伎町でたくさん楽しむ事もできますからね」と言った。

私は相手にしないことにして、女店員に「さようなら」と言いエレベーターに向かった。

女店員は私を追いかけてきて、きつい目をし「最近外国人旅行者が事件に巻き込まれることが増えてきていますよ」と言った。そんな脅しは怖くはなかった。そこまで言うようだと、どうやら私はとても高価なものを手に入れたようだ。

ホテルに戻って部屋のドアを開けると、中から狐が飛び出してきて、私の前を走り去った。私はとても驚いた。何故こんな所に狐が？部屋で狐は何をしていたのだろうか？幸い、部屋の中は荒らされた様子もなく、なくなったものもないようだ。子狐は、私が部屋を出かけた時と同じ所で、薄笑いを浮かべていた。

翌日私は二人の人と会うことになっていた。

一人目は里美という女性で、もう一人は出版社の編集長だ。昨日不思議なことがあったので、その日は子狐を懐のポケットに入れて持って行くことにした。里美とは上野駅で会う約束をしていた。

彼女とは長い間インターネットで文通している。里美は独身で私とほぼ同年齢だ。会ってお互い気に入れば、[結婚してもいいな]と思っていた。

写真でしか彼女の顔を見たことがないので、ちゃんと彼女を見つけることができるかどうか、多少不安だった。

約束の11時に私は赤いバラの花束を持って、上野駅の案内所の前で彼女を待っていた。

日本の女性は写真で見ると実物の方がずっと美しいと私は思う。

女性が一人私の方にやってきた。里美だ。里美も例外ではなく写真よりずっと美しく、しかも若く見えた。

里美は私の持ってきた花束が気に入ったようだった。頬に軽いキスをしてから喫茶店に入った。五分もすると、かなり打ち解けた雰囲気になっていた。しかし話を進め

ていくうちに、彼女との関係は私が思っているほど簡単にはいかないことに気が付いた。

里美は「結婚するとしても、どうやって家庭を支えるための収入を得るつもりですか？」と聞いた。

「働くつもりですけど」と私は答えた。

「働くですって？どんな仕事があると思っているんですか？お医者さんだと言っても、日本では簡単には医療関係で働くことはできませんよ。他の簡単な仕事を見つけることは出来るでしょう。でも、掃除のおじさんにでもなって働くつもりですか？そうだとすると、それでは十分な稼ぎを得られません。この歳になるまで私は一生懸命働いてきて、今も働いています。誰も歳を取ってから貧しくなりたいとは思わないでしょう？」

私には答えることが出来なかった。

彼女は続けて「あなたには日本で働く許可は下りないと思います。私の部屋とお金を利用するつもりだったのかしら？でも、私にあなたを養わなければならない理由などありません。」

彼女は自分のコーヒー代と私が持ってきた花束をテーブルの上に置いて席を立った。

「さようなら、頭の良い外人さん。今回は良い結果が得られなかったようね」と彼女は笑い、その場を去った。

私は彼女の言葉を思い出し悲しくなり何故、私は日本へ来たのだろうかと自問した。夢は叶わなかった。しかし、悲しんでいる暇はなかった。出版社に急がなければならないのだ。出版社は本郷にある。

湯島の狭い通りを歩いていると、突然青い鳥が目に入った。私の目の前を青い鳥は、右へ左へと飛び移っていく。

時間は無かったのだけれども、鳥が私に道を示しているように見え、その青い鳥の後についていくことにした。

青い鳥は私を小さな神社の境内へ導いた。

そして開いていた戸からお社の中に飛び込んだ。私もそのお社に入ることにした。驚いたことにそこにはさだこさんがいた！正座をしてお茶をたてていたのだ。

彼女は私を見ることなく言った。「驚いたでしょう。一つだけ私はあなたの質問にこたえることができます。だから一番重要だと思うことを質問してください。」

私の頭にきつねの姿がゆらりと浮んで消えた。

「狐は私の部屋で何をしていたのですか？」

「良い質問ですね。あの狐は自分の子供にお乳をあげていたのです。さあ出版社へ急ぎなさい。何か問題があったときにはこれを握り締めなさい。」そう言ってさだこさんは私に小さなお守りを手渡した。

考える時間もなく「どうもありがとうございます」とだけ行って私はお社をでた。

出版社へ行く途中、私の頭はすっかり錯乱状態になっていた。狐が自分の子供にお乳をあげていただけ？

しばらくしてやっと私は「夜明けの星」という出版社に着いた。

受付の女性に「こんにちは。12時に編集部の小林さんと面会の約束をしているのですが・・・」と言うとその女性は「小林編集長、外国人の方がいらっしやいましたけど、お通ししますか？」と奥の方へ声をかけた。

「ああ、入ってもらいなさい」との返事が聞こえ、私は部屋へ案内された。

小林編集長は背の低い禿げた男性だった。彼は大きな机の後ろに座っていた。そして私を見るなり「あなたの詩ですけどね、何か変ですな。あれが詩だとでも言うんですか？気に入りませんな。全く箸にも棒にもかからぬものですよ。まず日本語を勉強してください。ええと、どこにあれをおいたんだっけ？」そういつて机をひっかき回した。

「ゴミ箱に捨ててしまったかな？」

私はぎょっとした。これで私の詩人としての人生は終わってしまったのだ、と思った。「私はとても忙しいのでお引取り下さい。イスラエルにお帰りになったほうがいいですよ。そんな変なものを書いて日本に持って来るより、これまでのお仕事を続けたほうがベターと思いますけどね」と小林編集長は言った。

部屋を出ようとして私は、さだこさんがくれたお守りを思い出した。ポケットをまさぐり、お守りを握り締めた・・・するとすぐに、「ちょっと待ってください。申し訳ありません、別の詩人と勘違いをしていました。どうかお戻りになってください！」と小林編集長は椅子から立ち上がって、満面に笑いを浮かべて言った。

「あなたの詩に感動しましたよ。素晴らしい詩ですね。あなたは大した詩人です。初めてですよ。外国人によって書かれた日本語の素晴らしい詩を読んだのは、すごいですね！あなたの詩をわが社の出版計画に入れました。さっそく来月印刷しますよ。良く売れると思います。また別の詩ができれば、すぐに送ってください。あなたの詩は全部、すぐ印刷しますから。」

私は里美と会ったときに、このお守りが無かったのが残念だと思った。出版社を出ると、気持ちがとても軽くなっていた。まるで私の背中に翼がはえているかのようで、幸せだった。

ちょうど天気もよかったので、美しい景色があるところを散歩することにして明治神宮へ向った。

電車に乗っていると上着のポケットの中で何かが動くような感じがした。手を入れてみると、焼き物の子狐が、あたかも生きていたかのようなぬくもりを持っていた。私は明治神宮前駅で電車を降り、駅の建物を出た。すると、浅草の店からホテルに帰る途中、私を追って来たと思った女性が私のほうにやってきた。私にお辞儀をして「こんにちは。私はいずみと申します。すみませんけれど時間なので、そこにいる私の子供にお乳を与えたいのですが、よろしいでしょうか」と、彼女は切に私に頼む。

「あなたの子供ですって？どこにいるんですか？」

再び何かがポケットの中で動いた。ポケットから子狐を取り出してみると、子狐は生きていて「キューキュー」と鳴いた。

私が驚いていると、子狐は私の手をすり抜けていずみの手の中に飛び込み、泣いている赤ちゃんに変わった。泉がやさしい声でなだめると、赤ちゃんはふと泣き止んだ。いずみは辺りを見渡し、小さな喫茶店を見つけ、近寄っていった。私も彼女の後を追ってその店に入った。

喫茶店のなかにはお店のおばあさんの他には誰もいなかった。いずみは一番奥の席で入口に背を向けるようにして座った。私はおばあさんにコーヒーのケーキセット二人分を注文した。

私達はその喫茶店から出たときには、母親もお腹がいっぱいになった赤ちゃんも落ち着いていた。でも、私は頭がすっかり混乱して、ちっとも落ち着かなかった。

はっきりさせなければならぬことが沢山あった。「いったいどうなっているのか全然わかりません。説明してください。どうしてあなたは私を追いかけたのですか？どうして焼き物の子狐があなたの赤ちゃんに変わってしまったのですか？いったい私は何をしたらよいのでしょうか？」

彼女はうつむいて黙っていた。私達は歩き、ある高い建物の近くに来た。そこでいずみはやっと口を開いた「本当に申し訳ありません。私はあなたを面倒なことに巻き込んでしまったようです。もしあなたがあの焼き物の子狐を買わなかったら、落ち着いて日本を旅行することができたでしょうに。でも、今は私達にゆっくりしている時間がありません。彼は私達を殺すために殺し屋を送りました・・・」

「彼って誰？」

いずみが答える間はなかった。二台の大きな黒い車が私達の近くに停まり、中から数人の男達が降りてきた。

それを見たいいずみは「早く！」と言って、赤ちゃんをしっかりと抱き、その高い建物の入り口へ走った。私は彼女を追いかけた。

制服を着た人が「入場券をお願いします」と言った。私は入場券売り場の窓口に向かった。その時、建物からたくさんの若い女性が楽しそうに話をしながら出てきた。同時に、後ろからさっきの男達が近づいてきた。私達はチケットを買わずに、その女性達をかきわけて建物の中へ入った。

ここはテレビ局だったそして長い廊下とたくさんのスタジオがあった。

私達はスタジオの一つに入り込んだ。そこには大勢の侍の格好をした男たちがいたので、ここでは時代劇の撮影をしているのだ、とわかった。髪を白く染めた若い男が私達に近寄ってきて、「遅すぎるぞ。皆、お前さん達を待っていたんだ。早く撮影用の衣装に着替えて来い！」と言った。その人は右の耳にイヤリングをしていたので、同性愛者のように見えた。

私達はスタジオの奥にある着替えの部屋に入った。すると女性達が私に侍の着物を着せ、私の顔に化粧を施した。

しばらくすると、私といずみは着物を着た侍の夫婦になっていた。赤ん坊を抱える着物姿のいずみはとてもきれいだった。

私達の周りを数人の侍が囲んで立った。

同性愛者のような男は私に、「集中するんだ。この映画ではな、外国人のあんたが、皇子さまを守ることになっているんだ。だからあんたはその役目の重さを感じてなければならないんだ」と言った

そのとき、私達を追っていた男達が部屋に入ってきた。私といずみは侍夫婦になっていたのに、彼らには私達がすぐにわかった。彼らの一人が「そこだ！皇子のとなりにいるぞ。あいつらを捕まえろ！」と怒鳴った。さて、なんとかしなければならぬ。私はさだこさんのお守りを握り締めて「侍たちよ！皇子さまを守ってくれ！」と叫んだ。すると、スタジオの中にいた侍全員が刀を抜いて、私達を追ってきた男たちに攻めかかった！その隙に私達はスタジオからほうほうの体で逃げ出した。

私達は渋谷駅に向った。珍しい格好の組み合わせのカップルが関心を引くのだろうか、行く途中たくさんの人が私達の方へ振り返った。車に乗っている人の中にも、速度を落として窓を開けて私達のほうを見つめている人々がいた。確かに私達は変なカップルだった。年をとった侍姿の外国人が着物を着た女性と子供を連れて歩いているのだ。

突然一台の大きな車が私達の近くに止まった。車から数人出てきて私達を囲んだ。男性の一人はテレビカメラを構えていた。



若い女性がカメラに向かって話し始めた「渋谷からの生放送です。今まるでタイムマシンを使って鎌倉時代から逃げてきたかのような人達があります。彼らが何をしているのか聞いてみましょう。」そして彼女は微笑み私にマイクを差し向けた。「すてきな着物を着ていらっしゃいますね。ここで何をしているのでしょうか？」

「鎌倉時代に明治神宮を見つけることができなかったので、この時代にそれを探すことにしたのです」マイクをもった女性は私のユーモアが気に入ったらしく、さらに微笑んで「こちらは奥さんとお嬢さんですか？」と尋ねた。

私はいずみを見て言った「私の妻と子供です。」

「かわいいお嬢さんですね。ところで、あなたは俳優なのですか？」

「いいえ、俳優ではありません。イスラエルから来た日本びいきの詩人です。来月「夜明けの星」と言う出版社から私の詩集が発行されます。」

「詩人なのですか？ではあなたのお気に入りの詩を一つ紹介してください。」

「では

今日あなたは間違えて  
ご飯の代わりに  
弁当箱に口付けを詰めた。

可愛い間違いのために  
私の心はあなたの愛で  
満腹だ  
けれども、  
私のお腹はすいている。」

「とても面白い詩ですね。多くの日本の皆さんがあなたの詩集を買って読んでくれるといいですね」と女性アナウンサーは言った。

\*

私たちがインタビューをしようとするテレビ局の人々の手から逃れて走っていると、ばったり里美に出会った。里美はいずみを見て驚いた様子だった。里美は「そんなうそつき、信じないほうがいいわよ。彼には知り合いの女性がたくさんいて、別れた妻と赤ちゃんまでいるんだから。私にも結婚の申し込みをしたしね」といずみに言った。

いずみはにこっとして言った「心配してくれてありがとう。でも、もう心配しなくていいのですよ。もうあなたは彼と関係がなくなったのだから。彼は私のものです。」

里美が去ると、いずみは「あなたのおかげで問題が解決しました。これで私達は幸せになることができます。今、私はあるところへ行かなければなりません。あなたは上野公園にある五條天神社へ行ってください。あとでホテルで会いましょう」と言って彼女はその場を立ち去った。

一人残された私は「なぜその神社へ行かなければならないのだろう？」と思った。しかし、他には何も思いつかなかったのも、その神社に行くことにした。五條天神社の狐の像の前には神主さんが一人いた。神主さんは厳しい顔つきをしていた。

神主さんは私に言った「あなたには真実を告げなければなりません。」

「真実ですか？私の周りで起こっていることを説明してくれるのですか？」と私は尋ねた。

神主さんは私の目を見ながら、うなずいた。

私も神主さんの目を見て、うなずいた。

神主さんは話し始めた。

「私は大きな過ちを犯してしまいました。私は狐に誘惑されて、狐と同衾してしまっただのです。そしてその狐は身ごもり、子供を産みました。私はその罪を隠すために生まれた子供にまじないをかけ、焼き物の像にしてしまったのです。

あなたがその焼き物を手に入れたとき、私はあなたと狐とその子供を亡き者にしようと思いました。しかし、先ほどあなたは、彼女と子供はあなたのものであるとみんなの前で言いました。

だから、彼女の問題は私から離れてあなたのものとなったのです。あなたが彼女を娶って自分の家族として責任を持つのであれば、どうぞお幸せに。」

神主さんはあるものを私に手渡した。それは青い鳥が描かれている扇だった。

「これを狐の母親に持って行きなさい」と神主さんは言った。

「狐の母親？」

「あなたにその扇を依頼した人物のことです。彼女は娘を助けるためにあなたをここに送り込んだのだ。あなたはその務めを果たしきった。その報酬を受け取るとよいでしょう。」

私といずみのエルサレムでの結婚式は一風変わっていた。花嫁が子供を抱いていたことと、雲ひとつない青い空だったのに、雨が激しく降っていたことである。

# 行ったきりの日本語の授業

私はロシアからここに来たとき、自分の専門分野の仕事を見つけることができなかった。イスラエルでは日本語の研究はちょっと特殊な分野であった。数ヶ月の職探しの後、自分の専門とは全く関係ないと思える、警察での仕事を見つけることができた。最初は交通整理の職務から始まった。

三週間経った後、私は二度とこんな仕事はやりたくないと思うようになっていた。上司に「私にはこの職務を続けることはできません!」と言った。

ふと上司は私の顔を見て微笑んでいった。「確か君の専攻は日本語だったよな?」

「はい、そうですが」と私は答えながら、それがどうかしたのだろうかと思った。

「パヴリク!」と彼は誰かを呼んだ。

すぐに背の高い大柄な若い警官が近くに現れた。

「この“日本人”に例の事件を説明してやれ」と、上司は言った。

「君はもう少しがんばれば、予審判事になれる。もちろん、もっと勉強しなければならぬけれどな。」と、彼は私に言った。

このパヴリクとは、スポーツジムで顔見知りであった。私達は彼の部屋に行った。

「コーヒーでもいかがですか?」と、彼は聞いた。コーヒーメーカーから彼が私にコーヒーを注ぎ、私がコーヒーを飲み始めると、彼は事件について話を始めた。

[大学の学生達がいなくなっている。ここ半年で六人失踪した。男性も女性もいるが、彼らに共通するのはみんな日本語を専攻していた点である。

最初はだれもいなくなったことに気を止めていなかった。

単なる若者の気まぐれ程度に思っていた。でも彼らの蒸発後何ヶ月か過ぎて、親戚や友達が心配し始めた。]パヴリクは六人の若者の写真をテーブルの上に置いた。私は写真をよく見ることにした。

手がかりとなるものはなく、共通点としては、ある若い日本の女子学生からプライベートレッスンを受けていたことぐらいだ。

そしてパヴリクは私に、“日本語のレッスン”のお知らせを見せた。「みえこ」と書いてあるのが読めた。

「私たちは自分達の仲間を、彼女のもとへ”日本語を勉強させるために“送る事にしました。あなたは日本語ができるので、その役に適している。何がおきているのか調べてきてほしい。」とパヴリクは話した。

きれいな色の浴衣を着た若い女性が、私のために戸を開けた。多分美人とはいえない女性だけど、彼女にはある魅力が感じられた。小さく礼をして、「どうぞ、お入りください!」と彼女は言った。私は「おじゃまします」と言いたかったけど、「シャロム!」とヘブライ語で答えた。「私は日本語ができないんだ!」と、ちょうどその時私は思い出していた。

「みえこです」と彼女は自己紹介した。「そちらへどうぞ」と部屋を指した。

彼女の部屋は和室ではなかったけれど、茶の湯のために用意された道具があった。

「たいてい私は茶道から私の授業を始めるんです」と女性は言った。低い椅子を指して、「そこにおかけください」と彼女は言った。

みえこさんは黙ってゆっくりと茶道の儀式を行っていた。やがて彼女はお茶の入った茶碗を差し出し、微笑みながら「どうぞ」と言った。

「どうもありがとうございます」と私は言った。茶の湯の精神的な本質の深さに強く影響されてしまったので、私は警察の任務を忘れ、つい日本語で話してしまった。

お茶を少し飲んだとき、突然みえこさんの部屋がなくなり、気がつくとは私はある知らない街の通りに立っていた。

ガラスと鉄で作られた高層ビルのネオンサインには「銀座」と書いてあった。私は東京の通りに立っていた！私の周りでたくさん日本人が、忙しそうにどこかへ急いで歩いていく。突然誰かが私を呼んだ。後ろを向くと、そこには六人のいなくなった若者たちがいた。

「あなたたちはここで何をしているんだ？」と私は聞いた。「知りたかったら、一緒に来ればいい」と彼らは言った。

私が彼らについて行こうとした瞬間、私は再びみえこさんの部屋にいるのに気がついた。私が考えをまとめることができないでいるうちに、

「授業を始めましょう。」と、彼女は微笑みながら言った。

「これは鉛筆です。」と、みえこさんは鉛筆を取り上げていった。

ずっと昔に私が日本語を習い始めたときと、まったく同じ文だった。

どうして日本語の先生は鉛筆が好きなのだろうか？

私たちの授業は問題なく進んでいった。私は優秀な生徒だった。

みえこさんは何回も、「よくできました！」と私に言った。私は嬉しかった。

授業が終わって部屋から出ようとしたとき、私は棚の上にあるいくつかの面白い根付に目を留めた。私はその根付を見つめているうち、その根付がいなくなった学生たちの顔に似ていることに気がついた。

戸を開けてみえこさんは、「お疲れ様でした！」といいながら会釈をした。

署に戻りなにがあったかをパブリクに報告すると「幻覚か？」とパブリクは言った。

「多分、彼女はお茶に麻薬でも入れたのだろう。東京へのトリップは楽しかったかい？」と、パブリクがからかう調子で言った。

私は黙ってパブリクにあるものを渡した。それは、私が“東京にトリップ”したときにそこで拾った“マイルドセブン”の空き箱だった！

疑問と謎が増えたけれど、取調べは進んでいないようだ。

みえこさんが借りたアパートのオーナーもいなくなったという事がわかった。毎月みえこさんは彼の預金口座に家賃を振り込んでいるけれど、もう長い間、誰も引き出していない。アパートのオーナーは、日本で外交官として働いていた。三年前イスラエルに帰った後、いなくなった。しかし彼には親戚がなかったので、誰も彼の蒸発に気がつかなかった。

私達はみえこさんのアパートを調べることにした。そのアパートには三つの部屋があった。客間とみえこさんの寝室のほかにもう一つ、常に鍵のかかっている部屋があった。授業は客間で行われ、ほかの部屋には入ることができなかった。

「明日みえこさんが大学に行ったら、私は彼女のアパートを調べることにする」と、パブリクは言った。それは合法的ではないけれど、いなくなった人を見つけるためにはそれもやむを得ないだろう。

翌朝パブリクはそのアパートに行ったあと、そこから戻らなかった。彼の携帯電話も繋がらなくなった。彼は家にも帰らなかった。

パブリクもいなくなった。

その晩私が日本語の授業に行くと、もう一つの根付が棚の上にあるのに気がついた。その根付の顔はパブリクが驚いている顔であった！

私はみえこさんにこのことを問い詰めなければならない。

私は振りかえってみえこさんのほうを見た。

今日彼女は白いブラウスにジーンズを着ている。

「この根付は何ですか?!この人は誰ですか?!」と私は問い詰めようとしたけど、そんな姿彼女に魅了されて黙り込んでしまった。

彼女のかわいい微笑と、もろい姿は絶対的無罪を示している。

もちろん、彼女はその失踪事件についてはなにも知らないだろう。

彼女にそのことを聞いても意味はないだろう。

「冷たい飲み物を飲みたいですか?」と彼女はしなを作って微笑んで聞いた。

「いいえ、結構です」と私は答えた。まだ私は例の茶の湯の幻覚の件を覚えている。不意に彼女にキスをしたという強い欲求が私を襲った。その手の男性の欲求には、女性は敏感で鋭く察知する能力があるのだろう。みえこさんは私に近寄って私の腕をやわらかくつかんだ。私は思わず彼女を抱きしめた。そのとき部屋が回り始め、全てが幾千万もの光となって弾け飛んだ・・・

意識が回復したとき、私はとある和室にいた。そこにはいなくなった学生とパブリクもいた。彼らのほかに紅白の和服を着けた神主らしき人物もそこにいた。

床の間には大輪の真っ白な菊と真っ赤な椿が一見無造作、しかし部屋に調和するように活けてあった。

神主は「煩惱から解放されるために強い精神の集中が必要だ」といった。「至高の領域に到達するためには」。

そのとき突然神主や学生達の姿が消え始めいなくなってしまった・・・

何事もなかったかのように、みえこさんは授業で「この原則を次回までに身につけておいてください!」と言って授業を終わらせた。

この件はとても複雑なので、鋭い洞察力のある人に相談することが必要だ。

シモニー先生は、イスラエルで一番有名な日本学の専門家だ。その方は唯一私を単なる警官として扱わず、いつも同業者として敬意を払ってくれた人物である。

シモニー先生のお宅を訪れたとき、先生の部屋に紅白の和服を着けた神主さんがいた。それはあの時の神主だった!

私が先生にこれまでのこと全てを打ち明けると、先生は物思いにふけり始めた。

少し経ってから、シモニー先生は「この方は鎌倉から来られた甘縄神明神社の神主さんです。数年前、その神社から神聖な鏡が盗まれました。そのことは秘密です。その鏡がイスラエルに有るという情報を得たので、この方がこちらに出向かれた次第です。鏡が盗まれたとき神様は怒りました。いろいろな悪霊が解放されてしまいました。おそらく、みえこさんのアパートの家主が鏡を盗んだのでしょう。今、鏡はその鍵のかけられた部屋にあると思います。神主さんに鏡が返される時、いなくなった人達も戻ってくるでしょう」

「何故彼らはいなくなったのでしょうか?」と、私は聞いた。

「神聖な鏡を見てはいけません。あなたも鏡をのぞいたら戻ってくることはできません」とシモニー先生は答えた。

「それでは、みえこさんは誰ですか?」と私は聞いた。

その問いに対してシモニー先生は、私のほうを見て微笑むだけだった。

私が先生のお宅から出るとき、シモニー先生は「炒り豆を持っていくのを忘れないように」と、言った。私はなぜ炒り豆が必要なかわからなかったが、先生にその理由を聞くのをためらってしまった。理由はともかくシモニー先生のいうことなので、私は炒り豆を準備することにした。

さて、私は三回目の日本語の授業を受けるためにみえこさんの所に行った。私は鏡を包むために白くてきれいな布を持ってきた。私のポケットの中には、炒り豆の入っている袋があった。

今回みえこさんは眼鏡をかけ、飾り気のないロングスカートをはいていた。彼女は私にすぐ「あなたは日本語を知っていたのに、なぜ私の授業を受けに来たのですか？」と聞いた。

「私は警官です。いなくなった学生たちの行方を追っているのです。」と、私は答えた。

「鍵のかかっている部屋に入るのを手伝ってください。」

「それは危な過ぎます。止めてください。」

みえこさんは私の袖を掴んだ。彼女の目から涙がこぼれ始めていた。

そのとき、私は彼女に対して強いやさしさを感じていた。「あなたは誰？」と、私は聞いた。

「私は狐です。でも、あなたに魔法をかけるはずだったのに、あなたが好きになってしまったのです。」

おかしい愛の告白である！

私は鍵のかかっている戸に近寄った。戸の向こう側から唸り声が聞こえた。戸の隙間から煙が出てきた。銃や柔道の心得など何の役にも立たないと感じた。ポケットからシモニー先生の炒り豆を取り出した。戸のノブに手をかけた。鍵はかかっていた。私は戸を開けた・・・

パブリクと一緒に、パブでビールを飲みながら今回の事件について回想した。パブリクは、

「呪術や炒り豆や狐などは本当なのか？そんなものを信じられるのか？」と聞いた。

「あなたのほうがよくわかっているはずだ」と私は答えた。

みえこ結婚した日は、とても晴れていたのに雨が降っていた。空を見上げたが雲ひとつなかった。これは本当に狐の嫁入りのようだ。

愛する狐との結婚生活とはいえ、私は時々ちょっと怖くなる。私が悪い夫になれば、彼女は私を根付にしまうだろう。

私は警察の仕事を辞め、大学でシモニー先生と一緒に博士論文を書いている。論文の主題を知りたいですか？もちろん、炒り豆についてですよ。

# イスラエルのお医者さんのための日本人の妻

日本人の女性がイスラエル人と結婚したがるのには理由があるかもしれないし、イスラエル人が日本人の女性と結婚したがるのにもいくらかの理由があるかもしれない。

それはともかく、私は日本人の女性と結婚することだけは決めている。まだ相手はいない。これから見つけるのだ。でも、それがとても大変なことであることがだんだんと明らかになってきた。

私がイスラエル人というだけで、連絡が途切れることすらある。でも、私はあきらめたりはしない。

そのころ私は、イスラエルの中の小さい町で医者として働いていた。周りにいくつかの村があったが、この周辺には私が働いていた診療所が一つあるだけだった。

普段私は診療所で働いていたが、時々重い急患を見るために救急車で出かけることもあった。

ある日電話で救急出動要請があった。人工蘇生のための準備をしなければならなかった。サイレンを鳴らしながら救急車を飛ばした。

私は救急車が墓場の方向へ向かっているのに気がついた。この近辺には墓場はここにしかない。その頃ある村の全員で村の住人の一人を吊っていた。ユダヤ人の葬儀では死者を白い袋に入れて埋める風習がある。そのために特別な専門職人が、小さな家で死者を葬る準備をしなければならない。

まず私はその村の誰かが突然具合が悪くなったのだと思った。しかし、私が到着したときその小さな家の中に連れて行かれた。

「人工蘇生の必要な患者はどこだ！」と私は叫んだ。

みんなが死者を指差した。

「私を馬鹿にしてるのか？」と私は言った。

「死者の親戚の一人が、死体が動くのを見たんだ。」と誰かが言った。

「私は単なる医者であって、神様じゃない。」と私は言った。「しかしもし彼が生きているなら、蘇生の努力はする。」

私は死者の胸に聴診器を当てた。死体の胸から鼓動が聞こえたので私はすごく驚いた。私は驚きと怖さで失神しそうだった。が、これは私の鼓動だと気がついた。そして、目の前に横たわっているのは間違いなく死体だった。

私たちが診療所に戻る準備を始めたとき、村人が私たちを呼び止めた。死体がまた動いたからだ。私はもう一度検屍確認をした。どう見てもそれは死体以外の何ものでもなかった。

しかし、私たちが再度帰る準備を始めたとき、親戚がもう一度死体が動くのを見た。私は、「それは確かに死体ではあるが、動くのであればそれを埋めてはいけない。」と告げ、その小さい家に死体を残した。

翌日村長が「死体が家からいなくなった。」と、私に電話をかけてきた。

その夜私は変な夢を見た。例の死人が私の前に現れ、私に話しかけてきたのだ。

「私の死骸を葬らなかったの、私はあなたの手伝いをすることにします。私はあなたが願っていることを知っています。その願いを叶えましょう」。

そういつて彼は消えた。

数日後の夜中に電話がかかってきた。

「病院の人工蘇生室です。たった今私たちはある患者を蘇生しました。彼の意識が戻ったとき『この電話番号に連絡してください。今日三時に、その人の妻がイスラエルの空港に到着する』と彼は言いました。ですからあなたが奥さんを迎えに行くつもりなら、そうしていただいて結構です」。

私が時計を見ると既に夜の二時になっていた。さてどうする？これは誰かの悪い冗談だろうか？とにかく目がさえてしまったので、ちょっと眠ることはできそうにない。そこで、空港に行ってみることにした。急ぐことにしよう。途中で空港の案内に電話をかけ、「どの飛行機が三時に到着しますか？」と私は聞いた。

「三時到着は東京からの一便だけです。」との返事だった。

私は急いで花束を買って、出口の前で彼女を待つことにした。しかし、どうやって彼女を見分けたらよいだろうか？

出口からたくさん日本人の女性が出てきている。

どの女性が私の妻なのだろう？私は『彼女が私を見つけてくれるだろう』と信じて、花束を握り締めて待ち続けた。

数十分後、その便の搭乗客は全員いってしまったようだったが私のもとへは誰も来なかった。

「これは誰かのたちの悪い悪戯だ。信じた私が馬鹿だった」と、私は思った。

用意した花束をゴミ箱に投げ捨て、ベンチに腰を落とした。

全てが終わった。気持ちが落ち込んできた。

ふと、小さくすすり泣く声が聞こえた。

私の近くで日本人の若い女性が泣いていた。

私は彼女に「どうしました？」と話しかけた。

「私の主人が私を迎えに来なかった。」と彼女は言った・・・

日本人の妻がいるというのはこういうことなのだろう。いつも家の中が清潔で優美で、そして美味しい食事があり、目の前に美しい女性がいる状態なのだ。

のりこという日本人の女性が私の家に来たとき、私は何が幸せであるかが理解できた。

家で毎日やさしい花が私を待っているように感じた。

仕事が終わるとすぐに家に帰り、彼女のためにきれいな花といろいろなプレゼントを用意した。彼女は毎日美味しい食事を作って、私の帰りを迎えてくれた。私たちは理想的な夫婦であったと思う。

ある日、私は運良くいつもより早く家に帰ることができた。予告なしに妻の好きなイタリアンレストランへ彼女を連れて行って、びっくりさせようと思った。

音をさせずに家に入ると、妻が誰か女の人と話しているのが聞こえた。

その女性は「のりこ、お前は何をすべきなのかわかっているよな。お前は狐であることに嫌気がさして人間になりたかったんだろう。これまでに必要なだけの人数を殺してきた。これで最後だろ」と言った。



のりこは「私には彼を殺すことは無理です。これまでこんなに強く誰かを愛したことがないから。例えどんなことになろうとも、私には彼を殺すなんてできない」と答えた。

そのことを聞いたとき、私は彼女たちに私がここにいることがわかるようにと、ドアを音を発して閉めた。すぐにのりこが居間から出てきて私を迎えた。私がのりこと一緒に居間に入ったとき、そこには誰もいなかった。

その夜、私は気持ちがたかぶっていたが、のりこには昼間私が聞いたにそのことについては何も話さなかった。

翌日、私が働いている診療所の所長が私を呼んで「患者の一人から、あなたに往診して欲しいと要請がありました。彼女は日本の外交官なので、丁寧な態度で接してください」と言った。

私がその患者の家に着いたとき、日本人の女性がドアを開けた。私はこれまでにこのように美しい女性を見たことがなかった。

(前髪を切り揃え、艶のある真っ黒な後ろ髪は背中の中辺りまで真っ直ぐに伸びていた。黄色人種とは思えないほど色は白かったが、不健康さはなく、独特な妖しさを醸しだしていた。)

彼女は色彩あざやかなガウンを着ていた。彼女は微笑んで、「こんにちは」と言った。居間に私を招き入れ「私は健康な女性ですけど、最近胸が痛むのです」と彼女は続けた。そして彼女はガウンの襟元を開いて、胸を露にして私に笑いかけた。私は「検査をしますので、取り敢えず服をきちんと着てください」と言った。

「あら、日本の女性には興味がないの？」と彼女は挑発するように言った。

「私には妻がいて、彼女をととても愛しているのです」。

彼女の顔から笑みが消え、服を着なおして、「残念ね」と彼女は言った。[もう帰っても結構よ。あなたには他に用はないわ。]

私は職場に帰った。この件についても私はのりこに何も話さなかった。

二日後、私の診察室にある年寄りの日本人の女性が入ってきた。

「あなたの奥さんは人間じゃない」と、彼女は言った。「彼女の持ち物を調べれば真実が明らかになる。彼女はあなたを殺すつもりだ。彼女をすぐに追い出したほうがいいぞ」。

「なんて人だ。まずあなたがここから出て行くように！」と言って、私は入り口を指差した。

私は何も調べるつもりはなかった。

のりこの持ち物を調べて何が見つかるというのだ？私達の間破局だけだろう。

その鬼婆が出て行った後、私は倦怠感に襲われ病人になった気がした。そして、その日家に帰ったとき、本当に病気になった。

のりこは私を看病し、ある薬の入ったコップを持ってきて、「これを飲めば、病気は治ります」と言った。

私は「もしかしたらこれは毒で、それを飲んだら死ぬかもしれないが、それならそれでいいだろう」と思い全部飲んだ。

翌朝私は早くに目が覚め、自分が元気になっているのに気がついた。笑顔でのりこが「朝ごはんの準備ができています」と言った。

私達が朝ごはんを食べていたとき、私は「のりこ、私は全部知っている。昨日あなたが薬を持ってきたとき私は・・・」といいかけたとき、「私も知っています」と、のりこが私の言葉を遮った。私達は数秒の間黙って見つめ合った。  
「私達の愛のために、私は全てを放棄することに決めました。でも私達はすぐここから逃げなければなりません」。

それから半年後ある日鎌倉にある稲荷神社の前で、私達夫婦が祈った後にのりこは「大事な話があるの」と言った。  
そして顔を少し赤らめて「多分私は妊娠していると思います」と言った。  
私たちはそれが何を意味するのかを理解した。お稲荷様は自分の狐をきちんと最後まで面倒を見るのだらう。

# 上野から蝶々

蝶と花の高画質の写真を撮るためには、高級なカメラが必要だ。このカメラを買うためにみどりは一年間節約をした。彼女は店員として働いていたので、給料はそれほど高くなかった。

どうして彼女は、蝶の写真を撮るのが大好きなのであろうか？たぶん彼女は子供のときに、大好きなおばあさんと一緒に、緑色の野原で走りながら、蝶を獲った思い出が忘れられないからだろう。今でもお盆に寛永寺にあるおばあさんのお墓参りをするとき、そのときの野原の風景が脳裏に浮かぶ。

みどりは若い女性だった。非常にやせていて存在感の薄い女性だった。

他の若者たちと同様に、彼女も恋をしていた。彼女には愛する男性が二人いる。しかしそれは実ることのない恋だった。

一人の男性とみどりは、インターネットで知り合って文通している。もう一人の男性は、毎朝地下鉄で見かける人物だ。

しかし、どうしてそれが実ることのない愛だといえるのだろうか？

最初の男性に、彼女は嘘をつき続けている。

ジョンさんというアメリカ人は、彼女がお金持ちであると信じ込んでいる。毎日彼女はゴルフをしたり、ヨットでセーリングしたり、高級なレストランで食事をしたり、高いクラブでダンスをしたりしていると思っている。現実とはちょっと違うようである。

もう一人の方もアメリカ人かもしれない。彼は金髪で青い目をしていてとてもハンサムだ。毎朝上野駅で電車に乗るとき、彼女は彼の前に座った。彼は新橋駅で降り、みどりは渋谷まで乗る。新橋の周辺にはいろいろなオフィスがある。なぜかは分からないが、彼女は彼がお金持ちであると思った。

毎日彼は電車から降りるまで、彼女を微笑みながら見つめ続けた。もちろん、このハンサムなお金持ちが貧乏な女性と真面目に付き合うことなどないだろう。

インターネットで知り合ったジョンさんも蝶が好きだった。彼はみどりを、「蝶々さん」と呼んだ。彼はみどりの蝶と花の写真が大好きだった。彼らは、まだしばらくは本人同士の写真は交換しない約束をした。知り合いになって半年、ジョンさんは少しずつみどりの暖かくて優しい友人になった。やっとみどりは、彼の本当の愛情を感じ始めた。度々彼女は、緑色の素晴らしい野原の美しくて大きな蝶と花の中に、ジョンさんと一緒にいる自分の姿を想像した。

電車で知り合ったアメリカ人は、みどりに肉体的感情と強い熱望を呼び起こした。彼女は、筋肉質のたくましい彼の腕を見ると、既に彼に強く抱かれているように感じた。彼の青い目から彼女は逃げることができなかった・・・

この二人の男性は彼女の心を捕えていた。

ある日ジョンさんから大変な知らせが届いた。

「明日東京に到着します。」と彼は書いてきた。

確かに“大変”である。ジョンさんが来れば、みどりが嘘つきだということがばれてしまう。ヨットやゴルフは一体どこに？ここにいるのは、上野に住んでいるとてもやせている貧しい普通の女性だ・・・

どうしたらいい？彼に自分の住所を知らせるべきだろうか？

嘘がばれて、相手にののしられないですむ方法、彼女の考えられる方法は一つだった

翌朝、みどりはいつものように仕事に向かった。決心した彼女は落ち着いていた。上野の駅に来ていつものようにホームに降り、ホームの端に立って電車を待った。電車が速度をゆるめながら入ってくる。

そして、みどりは覚悟を決めた・・・

と、突然誰かの強い腕がみどりを抱いた。「蝶々さん、愛しているよ！」というのが聞こえた。

はっとして後を向くと、それは金髪のアメリカ人だった！

あなたが休日に代々木公園を訪れたとき、蝶と花の写真をとっている一風変わった、でも幸せそうな夫婦の姿を見かけるかもしれません。でも、彼らの邪魔をしないであげてくださいね。

# 日本語の叙情詩には気をつけよう

## 危険な詩集の発行

ある日私が目覚めたとき、「日本人であればどんな女性でもいい」と思うほどに、日本の女性に恋をしてしまった。そして私は日本語を勉強し始め、ついに日本語で叙情詩を書いてしまった。

イスラエルでその詩集をどうしたらいいだろうか？

少し考えて、私はイスラエルの外務省にある、日本の文化関係の部署にそれを持って行った。

青い目と白い歯をしている、金髪のシャイ・ケルベルトという文化部の事務官は、私の本を嫌そうな目つきで見て、「あなたの詩はイスラエルの文化を紹介していません」といった。

「では、私の詩はどこの文化に属していますか？」と私は聞いた。

「あなたはロシアから来たのでロシアの文化に所属するか、詩自体は日本語で書かれているので日本の文化に分類されます。ロシアの大使館か日本の大使館に行ってみてください」。

ロシアの大使館では、「ロシアの文化に属してるとするのなら『誇り高きロシア語』で書くべきだ」と言われ、私は追い出された。

ゆみさんという日本大使館の文化の外交官補に、「あなたの詩は素晴らしいと思いますが、それは日本の文化に属していません。あなたはイスラエル人だから。イスラエルの外務省の文化部のシャイさんと話して下さい」と言われた。

袋小路だ。私の詩はどこの文化にも属していないというのか？誰も私の詩集を必要としていないということなのだろうか？一体どうしたら良いというのだ？

この複雑な状況について考えるために、エルサレムにある「マクス」というカフェに行った。

私のテーブルの隣人はイジャーという「マクス」の常連である退役大佐だった。

「不機嫌そうだね。何かあったのか？」と、彼は聞いた。私は一部始終を語った。

「シャイ・ケルベルト？」と、イジャーは笑った。

「彼を知っているのかい？」と、私は聞いた。

「シャイを怨まないでくれ。彼には日本の詩は全然わからないだろう、他の分野では素晴らしい専門家なんだがな。あなたの詩を私に預けてみないか？多分何か手伝ってあげることができるだろう。」

イジャーは「退役大佐」などではなく、情報局のヨーロッパ支部の大佐として働いている人物であった。シャイの「文化部の事務官」というのも扮装で、本当は情報局勤務の将校だった。イジャーはシャイの上司だったのだ。

これまで彼らは、日本の詩についてなんぞ、全然考えていなかった。

情報局のパリ支局では失策が重なっていた。優秀なイスラエルの諜報員がいなくなったのである。いや、もしかすると殺されたのかもしれない。

イジャーはシャイと一緒に彼の部屋に座り、そのことについて話していた。

「私は誰か裏切り者がいて、パリ支局に潜り込んだのだと思う。パリで二人の新しい諜報員が働き始めてから、問題が起こっている。まず彼らを調べなければならない」と、イジャーが言った。

「どうするつもりですか？」と、シャイは聞いた。  
「アイデアはある。変な『日本の詩人』を覚えているか？彼を使うのさ」と、イジャーは言った。

二日後、突然シャイ・ケルベルトが私に電話をかけてきた。  
彼は猫なで声で、「あなたの詩集の出版を手伝える可能性が出てきました。今すぐパリに行くことができますか？」と言った。

「パリに！？」嬉しさのあまり私は眩暈を感じた。「もちろん！しかし今私には、暇な時間はたくさんありますが、お金は全然ありません」と私は答えた。  
私は六ヶ月間失業していたのだ。私の詩集の英語への翻訳が、私の貯蓄の全てを飲み込んでいた。

「お金についての心配はしないでください。あなたの詩は、イスラエル文学の評価を高く上げる可能性があります。旅費は私達のほうで用意します。パリであなたは私達の知り合いである、二人の発行人を訪問してください。彼らがあなたの詩集の出版を手伝います」と、シャイは言った。「あ、それからあなたと一緒に女子職員が同行します。一時間後に私の部屋に来てください。いいえ、彼女は日本人ではありません」

私がシャイの部屋に着いたとき、もうそこに「私達の女子職員」が座っていた。彼女は暖かみのない目と線のような口をしている金髪の女性だった。こんな女性にはロマンチックな話をしても何の意味もないだろう。しかも、彼女は私に何か危ないものを感じさせた。

「私はオラーです」と、彼女は言った。

詩人が部屋を出たとき、シャイはオラーを呼んで、彼女に囁いた。「彼はイジャーの手の者で、私たちにとってとても危ない」。

「心配しないで、ボス。彼がパリを見ることはない」と、オラーは言った。

イワン・チェーホフというロシアの情報局勤務の部長代行は、イスラエルで働くロシアの諜報員から、ある情報を受け取った。

イスラエルの諜報員が、何か重要な本をパリに運んでくるとのことだ。本の内容についての細かい情報は明らかではないが、とても重要な秘密が隠されている本であることは確かなようだ。多分その本には、秘密の暗号を解く鍵が書かれているのだろう。チェーホフは、その本をどんな代価を払ってでも手に入れたかったので、ダーシャ・リモノワという女性の諜報員を呼んだ。その足の長い細身の金髪の女性は、チェーホフの部下の中で一番優秀な諜報員だった。

「その本を手に入れる際に、イスラエルの諜報員を殺さないように」と、チェーホフはダーシャに言った。

「最近イスラエルの情報局員は、私たちの諜報員を何人か助けてくれている。できればそのイスラエル人を手伝ってやれ」

ダーシャが部屋を出た後、彼は万全を期すため赤ら顔の年配の男を呼び寄せ、彼に何か耳打ちをした。

私が部屋に戻ったとき、彼女が私の部屋にいることにすぐには気が付かなかった。彼女は窓の近くに立っていたが、まるで何かの影のようであった。部屋の薄暗さに目が慣れてきた頃、そこにきれいな色の着物を着た細い日本人の少女がいることに気が付いた。

なぜかは分からないが、不思議と怖さも驚きもなかった。

彼女は私を見て、微笑みながら会釈をした。

「こんにちは。私はひとみです」、と彼女は言った。

「こんにちは」と私は答えた。

「お祖父様が私をあなたに遣わしました。」

「お祖父様？」と私は聞いた。

「私のお祖父様は松尾芭蕉です」。

彼女の答えは私を少し当惑させた。芭蕉先生は三百年前に存在していた人物だ。本物なら本当に「お爺さん」だろう。

突然私は、この少女に足がなくて空中に浮いているのに気が付いた。やっと状況が掴めた。彼女は幽霊なのだ。なら本当に彼女は芭蕉先生の孫なのかもしれない。しかしそんな馬鹿な！

とにもかくにも彼女は話し続ける。「お祖父様はあなたを助けるために私を遣わしました。あなたは危険にさらされています。あなたはパリに行ってはいけません」。

その言葉は私に大変な衝撃を与えた。

「私にはその旅行を断ることはできない。その旅行は私の人生を変えるものだから」と私は言った。

彼女は答えた。「そうですね。本当に変えてしまいますよ！その旅行からあなたは帰って来られないのですから」

私は彼女の強い口調に困惑した。

「でもどうしてお祖父さんは、私を助けたいと考えたのですか？」

「お祖父様はあなたの詩が好きだから。」

それを聞いて私の疑問は解消した。

オラーは離陸の直前に搭乗し、詩人から離れた席に座った。オラーは彼が好きになれないので、ケルベルトの指令を喜んで遂行するつもりだ。

飛行機が安定したとき、アナウンスが聞こえた。「ベルトを外していただいても結構です。ただいまより、客室乗務員が皆様に冷たいお飲み物をお持ちいたします」

きれいな日本人のスチュワーデスが、微笑みながら会釈をしてオラーに冷たいオレンジジュースを差し出した。

オラーは「どうしてイスラエルの飛行機に日本人のスチュワーデスがいるのかしら？」と、ふと思ったが、喉が渴いていたので差し出されたジュースを一気に飲んだ。

そして彼女はうなだれた。オラーは昏睡した。

どうして私はパリが好きなのかって？パリには日本人がたくさんいるからだ。ルーブル美術館の中で、日本人でないのは私とモナ・リザぐらいだったこともあるくらいだ。

私がパリの空港を出るときには、いつも小雨が降る。今回も同じだった。

パリ行きのバスの席に座ったとき、すぐ私は近くの席に座っているひとみさんに気がついた。彼女は「あなたはホテルで日本の女性に会います。彼女はとても危ない人です。気をつけてください。」と言った。

「彼女はきれいですか？」と私は聞いた。

「ふざけている場合ではありません。真面目に取り合ってください。彼女はあなたを殺すつもりです」

「どうして日本人が私を殺す必要があるんだい？」と私は聞いた。しかし、ひとみさんはもういなくなっていた。

ホテルの部屋に入ったとき、電話が鳴った。

「ロビーでご婦人がお客様をお待ちになられておいでです。」  
私はロビーに降りたとき、肘掛け椅子に座っている日本人の女性に気がついた。彼女は本当に美人だった。ミニスカートを履き、きれいな足を組んでいた。これほどきれいな女性を、私の今迄の人生で見たことがなかった。  
私は彼女の足から視線をそらすことができなかった。彼女は私に気がつくとすぐに立ち上がり、微笑んで私に近寄った。  
微笑み続けながら会釈をし、「こんにちは、はじめまして。私はかよと申します。どうぞよろしくお願ひします」と彼女は言いながら、ある封筒を差し出した。  
「ここに二人の発行人の住所と、彼ら宛ての手紙があります。彼らにあなたの詩を渡してください。」  
「カフェにご一緒しませんか？」と私は誘ってみた。  
「外に出かけるにはちょっと疲れているので、少しの間あなたの部屋で過ごさせていただくのはいかがかしら？」思ってもいない返事だった。私たちは、エレベーターのほうへ一緒に歩き始めた。  
エレベーターの中で、彼女は顔を私に近づけた。「そのあなたの目を夢で見たわ」、  
とって私に口づけをした。私の人生で最も幸せを感じられた時だった。  
エレベーターは、私の泊まっている部屋のある階に到着した。  
私は震える手で部屋の戸を開けた。  
部屋は明かりが点いていた。私たちが部屋に入るとベッドにある女性がいた。ひとみさんだった！  
私はすごく驚いた。かよさんは、顔を真っ赤にして部屋から出て行ってしまった。  
私は怒って、「何でここにいるんだ！」と怒鳴った。「他人の幸せの邪魔をするな！」

「馬鹿なことを言わないように。彼女は刺客です。彼女の鞆の中に毒とペン型の注射器が入っていますよ。あなたを殺すつもりだったのですよ」と冷やかに言った。  
「あなたはやきもちをやいているんじゃないのか」。  
彼女は私の言葉に気を留めず話し続けた。「明日あなたは、ロシア人の女性と会います。彼女はあなたの味方です。彼女も美人だけど、身の振る舞いには気をつけたほうが良いと思いますよ」。と冷やかな様子を崩さずに、ひとみは言った。  
私の人生に、いきなりたくさんの美人が現れ始めた。  
私は「ひとみさん、あなたの所為でかよさんが出て行ってしまったのですから、少なくともあなたはここに残ってくださいね」と言った。しかし、残念ながら彼女もいなくなってしまった。  
私の「少なくとも」という言葉に、彼女は怒ってしまったのだろうか。

ヨーロピアンスタイルの朝食は、コーヒーとクロワッサンだけだ。  
私がホテルのレストランで、コーヒーを飲みながらクロワッサンにバターとジャムをぬっていたとき、背が高く細い金髪の女性が、私のテーブルに近寄ってきた。彼女はミニスカートを履き、きれいな足のほとんどを露わにしていた。「こんにちは。私はロシアから来たダーシャです。あなたのテーブルに座ってもいいですか？」と彼女は聞いた。  
こんな女性の同伴を断るほど、私は馬鹿ではない。「どうぞ、お座りください」と、私は言った。  
彼女は私に、愛想よく微笑んで話した。  
「たった今モスクワから来ました。濃くて美味しいコーヒーが飲みたいですね。パリのコーヒーはとても不味いわ。まあ仕方がないことだけど…」と、ダーシャはそれでも何か愉しそうに言った。「あなたはパリで何をしていますか？」



「日本語で私の詩集を出版するために来ました。」と、私は答えた。

「その本を見せていただけますか？」と、ダーシャは言った。「私は日本の詩が大好きです！今は一人旅ですけど、全然パリを知らないんです。あなたと一緒にいるのもいいですか？」

「もちろんです。これから私は、二人の発行者を訪問するところですけど」美人の同行とは幸先がいい。本の出版はきつとうまくいくだろう。私はそう思った。

第一番目の発行人は、サン・ミッシェル通りに住んでいた。私たちは古いが掃除の行き届いているビルに入り、エレベーターで三階に上がった。

いやな顔つきをしている背の低い黒髪の男性が戸を開けた。彼は脇によけて、私たちを玄関に入れた。

「はじめまして」と、私は丁寧に言った。「私はエルサレムのシャイ・ケルベルトから紹介されて来ました。私の詩集を日本語で出版するのを、手伝っていただけませんか？」

彼は私達に怒鳴った。「私を間抜けだとも思っているのか！おまえとおまえのくだらない詩なんぞ嫌いだ。なんでおまえが来たのかよくわかっている。おまえとそこのロシア人売春婦に思い知らせてやる！」そしてポケットに手を入れた。

すぐにダーシャが彼を蹴り倒した。きれいな足のわりに、蹴りはかなり強烈なようだ。

「なんてことをするんだ？」と、私は驚いて聞いた。

「彼は日本の詩が嫌いみたいだったけど？」ダーシャは微笑みながら倒れている発行者に近づき、しゃがんで彼のポケットからピストルを取り出した。「糞野郎めが、五体ばらばらに切り刻まれたくなかったらロシア人に絡むな。」と彼女は言った。彼は答えなかった。

こんな言葉を使う女性がなんで日本の詩を必要とするのか、と私はいぶかった。ともかく私たちは外に出た。

ダーシャは「彼はあなたの詩を出版するつもりは無かったみたいですけど」と、言った。

「そんなことは問題ではない。ともかく私は別の発行者のところに行きます。今度こそは成功させましょう」と私は言った。

「今の訪問は成功だったわ」と、ダーシャは嬉しそうに言った。

私達は、次の目的地であるモンマルトルの発行者のところへ向かうことにした。ダーシャの携帯電話が鳴った。彼女は手短かに答えて電話を切った。

「あそこでたくさんのお客さんが私達を待っているようです。ワーシャおじさんのお手伝いが必要みたいですね」と、ダーシャが私に言った。

目的の建物の入り口についたとき、体格の良い赤ら顔の年配の男性が、コートに何か大きな「物」を包んで私達を待っていた。彼からはたまねぎと酒のにおいがした。ダーシャは彼に抱きついて「ワーシャおじさん！」と言い、彼に口づけをした。

私達は、彼と一緒に建物の二階に昇った。

戸を開けたのはオラーだった。部屋には数人の怪しい人達と供に、シャイ・ケルベルトとかよさんがいた。

「あなたの旅行はここで終わりです。今あなたの詩を出版しましょう」と、シャイは薄笑いを浮かべながらピストルを取り出した。

「明日の朝刊で、イスラエルから来た日本語の詩人の『し』がパリ中で知れ渡ることになるのよ。広告ではなく、ニュースとしてね」かよさんが付け加えた。

ワーシャおじさんは「カラシニコフは別の思い」と言った。

「カラシニコフって誰だ？」とシャイは聞いた。  
「ほら！ここにいるぞ」、とワーシャおじさんはコートに包まれていたものを持ち上げた。  
一瞬のことだった。そして部屋から生きて出てきたのは三人だけだった。これ以上詳しく書くのは蛇足だろう。  
私はダーシャとの別れ際に、私の詩集にサインをして彼女に手渡した。

私は「マクス」に一人座っていた。そして悲しい思い出に浸っていた。  
ひとみさんは義務を果たして、いなくなった。お祖父さんのところに帰ったのかもしれない。  
私はひとりで寂しくコーヒーを飲まなければならない。  
突然カフェのガラス戸が開いて、ひとみさんが入ってきた。黄色いミニスカートをはいている彼女には足があった。輝いた表情でひとみさんは、「お祖父様は私を解放してくれました！」と言った。彼女はスカートを撫でて自分の足を見た。「女性であってこんなうれしいことはない！」  
少し照れて顔が赤らんでいた。「私の足はかよさんの足よりもきれいでしょう？」と彼女は言った。私は答えの代わりに、彼女に優しくキスした。  
「お祖父様のお墓と一緒に参りに行きませんか？」と、ひとみさんは聞いた。  
「行きましょう！」と私はうなずき、彼女にもう一度キスをした。

二日後、突然イジャーが私に電話をかけてきた。  
「あなたの詩集の出版を手伝える可能性が出てきました。今すぐあなたはモスクワに行くことができますか？」とイジャーは言った。  
「すみません。残念ながら、今私は大津に行くつもりです」と私は答えた。  
「大津？それはどこですか？」とイジャーは聞いた。  
「日本の本州にあります。琵琶湖の近くです」。  
「何のためにそこに行くんですか？」  
「ある方のお墓参りをするつもりです」と私は言った。  
イジャーには何のことかわからなかった。

松尾芭蕉の墓にイスラエル人の書いた一冊の奇妙な詩集が供えられていた。時折風が吹いては、その詩集のページがめくられる。あたかも誰かがその詩集を楽しんでいるかのように・・・

# 部屋の床に何かある

私の新しい隣人は、背が高く若く痩せた金髪の女と、背が低く黒髪の太った年配の男だ。変な夫婦である。

ある日の朝、誰かが私のドアを強く叩いた。私が急いでドアを開けると、隣の女の人

がいた。彼女は驚いた顔をしていた。その綺麗な目からは涙が溢れていた。

「助けてください！」と彼女は言った。「私の彼氏は私を殺そうとしている！」

私は、「それなら警察を呼んだほうが」と言った。

「彼らは私を信じていない！警官は私を笑っただけ！」と彼女は続けた。

「早く来てください！」

私達は彼女のアパートへ走った。アパートに着いたとき、私は彼女の彼氏を見た。彼は床の上の血溜まりの中に横たわっていた。彼は死んでいた。

私は「あーなんて事だ。彼は死んでいる！！」と叫んだ。

突然私は、彼女が私に向けているピストルを見た。「もしあなたが私に協力してくれれば、あなたと結婚して、二人でアメリカに逃げられる・・・」

すぐに私は起きた。これは私の単なる夢なのだろうか？

でも突然、私のドアを誰かが強くノックした。私はさっと肩に何かを羽織って、ドアを開けた。

そこに、隣の女の方は立っていた！

彼女は驚いた顔をしていた。その綺麗な目からは涙が溢れていた。

「助けてください！私の部屋の床の上に・・・早く来て下さい！」

私たちは彼女のアパートへ急いだ。

彼女の部屋の床の上に真っ黒い大きなゴキブリがいた・・・

# 学生の冗談

## おかしな短編

とある国のとあるビジネスマンは、ビジネスのために日本に行く予定だった。日本旅行の前、彼は日本人の留学生に日本語の授業をしてもらった。そのビジネスマンは、ちょっと教養が足りない人だった。学生が一生懸命教えたのに、ビジネスマンは軽蔑的に彼と話した。しかも、ビジネスマンは約束の授業料を払わなかった。でも学生はいつも落ち着いていて、いつも控えめに授業を行った。ビジネスマンは、毎回の授業をノートにちゃんと書いた。出発の前に、ビジネスマンは飛行機の席に座って、授業を思い出すためにノートを開けた。その授業の内容は「銀行員との会話」だった。「銀行に来たとき、銀行員に近寄って高い声で話すー（強盗だ!）みんな、床に伏せろ!手を頭の後ろにやれ!」と書いてあった。

# 誰にも話さないでおきましょう

もしあなたが九ヶ月前に日本から戻っていたとして、今日東京から「ご出産おめでとうございます！」の知らせが届いたとしても、驚かないでください。そして私は驚かなかった。

私は九ヶ月前まで、東京にいたときは浅草で部屋を借りていた。私のほかにあのアパートにはいろいろな外国人が住んでいた。私の隣人達は、フランス人の三十歳男性のほかは、いろいろな年齢の女性だけだった。フィリピン人やオーストラリア人、そしてアメリカ人の女性などだった。私の部屋は一番狭くて暗かった。部屋に窓がなかったので、夜の暗闇に誰か女性が私の毛布の中に入ってきて、それが誰かはわからない。朝食中、台所で女性達がいろいろな冗談を話したりたくさん笑ったりしていたとき、私だけ面食らって微笑んでいた。こんな女性の中から一体誰が、昨夜私の部屋に入ってきたのだろうか？  
そんなアパートだった。

アパートの女主人と私はすぐよい友達になった。彼女はちえこさんといった。茶の湯の先生だった。毎日東京で散歩したり、日本のレストランで日本料理を食べたり、カフェでコーヒーを飲んだりした。毎晩茶の湯を見に行った。

いろいろな女性がいろいろな理由で茶の湯を習っている。結婚前の若い女性と八十歳のお婆さんが一緒に茶の湯の芸術を習っている。

私は自分が茶の湯を習うべきだと思わなかった。

外国人が執り行う日本の式典はおかしくて自然じゃないと思う。日本の式典は日本人でだけで執り行うべきだ。大抵、ちえこさんの生徒の茶の湯の動きはスポーツみたいで、ぜんぜん心の影響が感じられない。

ある晩私は、茶の湯を習っている生徒で特別な女性に気がついた。多分彼女はきれいではなく若くもない女性だけれど、彼女が茶の湯にとっても深く集中している動きを見たとき、私は感動した。本当に印象的な女の人だった。

「彼女は誰？」ちえこさんに聞いた。

「私の友人で、くみこさんといいます。」との答えを得た。

ちえこさんは私の感心した視線に気がついたのか、その晩それ以上私とは話さなかった。その夜私はひとりで寝た。

二日後、ちえこさんが「くみこさんがご主人と一緒に私たちを家に招待してくれました。」といった。

「彼らは浅草に住んでいます。ずっと近いです。とても幸せな夫婦ですけど、まだ子供がいません。ご主人に問題があるのかもしれない。」

翌日の晩、私達はきれいな花と高価なお菓子を買ってくみこさんの家に行った。

くみこさんのご主人は気持ちのいい人だった。彼らの出してくれたご馳走は本当に素晴らしかった。お酒を飲んでゆっくり会話をするととても楽しんだ。たくさん笑った。突然ご主人とちえこさんは「少し出かけてきます。」といった。微笑を残しつつ「行ってきます」と言い部屋から出て行った。

彼らの後ろで戸が閉まったとき、くみこさんは私に近寄り私の手を掴んで、どこかへ私を連れて行った。

寝室に来たとき、彼女は突然私に寄り添った。彼女の全身が震えていた。そんな彼女に伝える他に、私にはなすすべがなかった。

最後の数分の後、すぐに彼女は私を強く突飛ばした。彼女は私を出口へ押して「出て行って！」と叫んだ。

私がアパートに帰ったとき、ちえこさんは「鍵を返して！」といった。その晩私はホテルに移った。

私は数回くみこさんの家の近くを通ったけれど、恥ずかしくて彼女に会うことはできなかった。

ちえこさんは私の電話を切って、メールにも答えなかった。まったく連絡を断った。私はくみこさんの電話番号とメールアドレスを知らなかった・・・

私は上野駅と浅草駅のいだにある、外国人のための安いホテルを見つけた。小さな和室があてがわれた。

私は和室があてがわれてうれしかった。日本のスタイルは私にとって大切だ。日本にいと毎日が祝祭日のようだ。

部屋に入ってまず日本茶をいれ、テレビをつけた。大体の日本人はテレビの番組がつまらないと思っているようだけれど、私は日本語を聞くことができるのでどんな番組でも好きだった。女性歌手が歌っているのが特にお気に入りだった。

お茶を飲みながらテレビを見て、くみこさんのことを思い出していた。私達のセックスは感情のない早い行為だった。そのことは私を自分が動物になったような気持ちにさせた。人妻とのセックス、私はそんな状態で動物みたいに興奮していた。本能だけだった。くみこさんは単に都合のよい牡を見つけて利用しただけなのだろう。愛情なく受胎した赤ちゃんはどうなるのだろうか。

彼女はぜんぜん興奮していなかった。まったく機械的だった。重要な目的のためにこれら全ての事を行ったのだ。セックスの後で彼女が私を押しつけたとき、彼女の目に私に対する嫌悪感のようなものを私は見て取った。日本人の女性は必要とあればどんなことでもすることができる。いやなことや大変なことであっても行動にうつせるのだ。

それでも、お茶会の際の彼女の動きや、彼女の家での立ち居振る舞い、さらにベッドの中での行為において、私は彼女が特別な人物であると感じていた。彼女には私を魅了する何かがあった。

そのことに思いをめぐらせていたとき、ほとんど聞こえないくらいの小さな音で誰かが部屋の戸をノックした。

私は戸を開けて驚いた。そこにはくみこさんが立っていた。彼女はうなだれていた。

「お入りください。」と私はいった。

言葉を交わさずに寄り添った。私は彼女をいとおしく感じた。こんどは気持ちの入った情事だった。

彼女はとても熱情的で濃密なセックスを求めてきた。私が外人だから彼女は恥ずかしくないのだろうか、私は思った。

朝日が部屋の中に差し込んだときには、私は一人であった。彼女がいつ部屋から抜け出たのか私は気がつかなかった・・・

そのこと以来、日本を出発するまでの間くみこさんのことについてずっと思い続けていたが、彼女と会うことはなかった。

帰国後、イスラエルでの生活は私を奔走させた。仕事のことや友達や女性やいろいろな用事などが私の日本における愛の冒険を忘れさせた。それでも時々さびしさの針が心に刺さって、突然あの愛する日本人を思い出させていた・・・

そして今、九ヶ月のあとで「ご出産おめでとうございます！」というメールを受け取ったとき、私の全世界が引っくり返った。

私に赤ちゃんが生まれた！この知らせに比べると私の今の生活が全くつまらないものに見えてきた。

でも誰がこのメールを送ってくれたのだろうか？

私はすぐにちえこさんに電話をかけることにした。

私のメールアドレスを知っているのは彼女だけだからだ。

「ご出産おめでとうございます。」と彼女は言った。

「かわいい娘さんですね。母子ともに健康なようです。」

「くみこさんのご主人は喜んでいますか？」と私は聞いた。

「くみこさんは妊娠しているとき、彼の元を離れて実家に戻りました。今彼女は埼玉の片田舎にいます。」

「どうして！？彼らは子供が欲しいということで、私のことについては同意していたのでは？」と私は驚いて聞いた。

「彼女は妊娠したとき、あなたのことを強く愛しているのを感じたからなの。それで、もう他の男性とは一緒に住んでいられなくなったの。彼女は自分の気持ちを制することができなかったの。」

「どうして彼女は私に連絡をしなかった？」私は気持ちがたかぶってきていた。

「日本人の女性はそのような状態で連絡することはしないんです。日本の女性は一人でごんばってしまうんです。」

ともあれ私には日本に娘がいるわけだ。さて、どうしよう？なんにしても何かをしなければならぬ。

普段から私は物事の決断は早いほうだ。私はくみここと私の娘を私のもとに引き取ることに決めた。それでまず最初に上司のもとに行き、私は言った。

「私には子供が生まれたので給料を上げてくれ。」

「君は独身だっただろう。子供がいるのか？」と上司は笑って答えた。

「実は私は密かに日本で結婚していて、それで子供が生まれたんです。」

上司は笑うのを止め、すごくびっくりして言った。「日本人の奥さん？日本人の子供？それなら君はたくさんお金が必要だな！」

そして彼は私の給料を上げてくれた。

それから私は娘のためにいろいろなものを買ひ、アパートを彼女達と一緒に住めるように片付けた。

日本へのフライトの間中、私は何かやり残してはいないかと思案していた。

駅からくみこの家の近くまで通っているバスがないので、私はタクシーを使った。

彼女の実家は小さくてきれいな家だった。玄関に近寄ったとき子供の泣き声が聞こえた。私の心は高鳴った。娘の声だ！

呼び鈴を押すと、年配の女性が玄関の扉を開けた。

その年配の女性は私を見て立ちすくんだ。

奥から「誰？」というくみこの声が聞こえた。

お母さんが黙っていたのでくみこが玄関に出てきた。

しばらくの間私たちは黙っていた。

「私の娘の名前は？」と私は聞いた。

「ひとみ」とくみこは答えて泣き始めた。

今、私達は一緒にエルサレムの私のアパートに住んでいる。エルサレムでくみこは茶道を教えることになった。私はくみこの芸術に敬意を払うためにときどき娘と一緒に彼女の道場を訪れることにしている。  
私は愛する妻とかわいい娘がいてとても幸せだ。  
私たちの出会いは不実なものであったかもしれないが、誰もそのことは知らない。  
そしてそのことを誰にも話さないでおくだろう。



# 普通の家族のありふれた物語

## 1. 誰にも私のかわいい子を恨ませはしない

じゅんこと一郎は電車で知り合いになった。

ある朝じゅんこが一晩中続いたパーティから帰るとき、仕事に向かう一郎に出会ったのだった。じゅんこはパーティ用のドレスを着ていて少し酔っていた。一郎はスーツで身なりをきちんと固めていた。じゅんこは彼の男らしくて落ち着いた顔に惹き付けられた。じゅんこは酔った勢いで一郎に近寄り「今晚どこかに遊びに行かない？」と言った。一郎は彼女を『細くてきれいな女性だな』とは思いながらも、「私たちは住んでいる世界が違うと思うけど」と答え「あなたの住んでいる世界の中から男性見つけるほうがいいと思わないのかい？」と続けた。

「あなたはちがう世界の女性が怖いの？」

そのようにして二人は出会った。

そして二人は結ばれた。

一郎は柔道の有段者でもあり、とても勇敢な男性であるが、なぜかじゅんこの母性本能をかきたてた。

じゅんこは夫の仕事のことに立ち入らない良い妻ではあるが、ここ最近夫が毎晩憂鬱になっているのを見て、彼女は何かをしたいと考えた。

じゅんこは夫の職場がどこにあるのかを知っていた。池袋の駅に着いて彼女は夫の働いている高くてきれいな高層ビルを見上げた。彼女は何も恐れずに建物の中に入っていった。エレベータはあっというまに26階に到着した。

一郎の会社に入り込み、社長のいる部屋にまっすぐに向かった。

社長秘書の女性が「面会の予約をしてください。少々お待ちください・・・」と言ってノートを開き始めた。しかしじゅんこはそれを無視して、社長の部屋の方へ突き進んで行った。

秘書はあわてて「勝手に入らないでください！」と言って彼女を制止しようとしたが、じゅんこは既に部屋の中に入り込んでしまった。

その時、社長の部屋ではいろいろな会社からの重役達が集まって会議が行なわれていた。

そこに、突如じゅんこが現われ、部屋は静まりかえった。

「どなたが田中社長さん？」とじゅんこは強い口調で言った。

みんなが大柄でちょっと太った男性のほうを見た。

じゅんこはその男性に向かって「私は武田一郎の妻です」と言った。「ここ最近主人は仕事からとても気落ちして帰ってきている。私はそんな状況に我慢ができない。あなたが彼を苦しめている環境を改善させなさい」。

そう言い放つと彼女は社長室から出ていた。

数日後一郎は寝室で「今日私の昇進が決まった」と言った。

じゅんこは何もを答えず寝返りを打った。

一郎は「じゅんこももう少し僕の仕事のことについて興味を持ってくれてもいいのになあ」と思った。

## 2. へそくりの正しい使い方

毎年正月に、一郎の親族は鎌倉にある一郎の実家に集まる。一郎は長男であるけど、事務員として働いていて兄弟の中では一番貧しい生活をしている。正月の集まりに一郎の兄弟は高級車で乗りつけてくるが一郎たちは電車と徒歩だった。じゅんこは一郎がそのことを気にやんでいることに気がついた。

じゅんこが一郎の会社を訪ねてからおよそ一ヶ月経った。ある昼下がりに誰かから電話がかかってきた。男性の声は「こんにちは、じゅんこさん」と言った。「私は“青空コーポレーション”の山口といいます。あなたを田中さんの社長室での会議のときにお見かけしました。あなたのことが強く印象に残っています。あなたを雇えないかと考えています」じゅんこは「私は主婦ですのでしなければならぬ家事がたくさんあります。外で働く時間はほとんどありません」山口は「私はあなたには交渉するときだけ同行していただければ結構ですので、長時間拘束するようなつもりはありません。もしよろしければ詳しく説明いたしますので一時間後に私の許へいらしてください」一時間後、山口の事務所でじゅんこは不快な感じを与える表情の男性を見た。山口は「彼は小林といって交渉班長です。彼の部屋に行ってもどのように仕事をするか彼と相談してください」小林の部屋に入るときじゅんこは彼の目つきにいやらしいものを感じた。小林は「あなたは私達が一緒に仕事をするために先ず最初に何をしたら良いのかわかっていますか？」と聞いた。「もちろん」とじゅんこは答えた。「ではそれをするにはできますか？」「喜んでやりますよ」小林は卑猥な笑みを浮かべて「では時間ももったいないのですぐ始めましょう、こちらへ来てください」と言った。じゅんこは彼に近寄って強い平手打ちを与えた。「気持ち良かった？」と彼女は聞いた。「では仕事について話を始めましょ」

年の瀬も深まったある晩、一郎は家に帰りじゅんこに「ただいま」と言った。「じゅんこ、家の前で車が家の入り口を塞いでいる。誰か近所で新しく車を買った人でもいるのか？」じゅんこは「一郎さん、それは私からのお年玉の替わりです」一郎は「こんな高級車を君が買ったのか？どこにそんなお金が？」じゅんこは「へそくりよ。私は儉約が上手なの・・・」と答えた。

## 3. 月の光の下で

ある日じゅんこと一郎はテレビの前に座って、初めての日本人の女性宇宙飛行士を見た。日本中がその女性宇宙飛行士を誇りに思っていた。テレビで丘崎花子という飛行士のことを報道していた。「じゅんこ、宇宙飛行士になるのって怖いと思う？」と一郎が尋ねると、じゅんこは「怖いと思うわ」と答えた。

翌日の満月の晩に、一郎は仕事が終わってからパブに行った。ビールを飲みながら仕事のストレスを解消するためだ。彼はそのパブの常連である。

一郎はビールを飲みながら、じゅんこについて思いを巡らせていた。出会ってから今までじゅんこについて解らないことがたくさんある。例えば、一郎はじゅんこの両親について全く知らない。じゅんこの両親は一郎とじゅんこの結婚のとき、じゅんこにかなりの額のお祝い金を渡した。しかし式には姿を現さなかった。一郎は未だにじゅんこの両親の写真すら見たことがない。

一郎はじゅんこの過去についても何も知らない。

じゅんこの友達についても何も知らない。

しかしじゅんこは妻として申し分なかったもので、知らないことがたくさんあっても、一郎は気にしないことにしていた。

ビールを飲みながらこんなことを思っていると、パブのテレビで宇宙についてのニュースをやっているのに気がついた。そこでは丘崎飛行士が着物姿で扇子を開き笑顔で無重力遊泳をしていた。

突然画像が切り替わり「番組の途中申し訳ございませんが、問題が生じたようです。問題が解決し次第もとの番組に戻ります」とキャスターが言った。

近くに座っていた老人が一郎のほうを向いて「満月の夜には問題が起こりがちだが、君は自分の奥さんを守らなくてもいいのかな」と言ってニヤッと笑った。

「どういうことですか？」と一郎は訝しがった。

「竹取物語はご存知でしょう。その話でかぐや姫は満月の晩にいなくなりましたよね。私だったら今すぐにでも家に帰りますけどね」と言ってその老人は再びニヤッと笑った。

いやな予感がして一郎は帰途を急ぐことにした。

家に着いて彼は「ただいま」と言ったが返事はなかった。アパートの中は明かりも点いておらず、人の気配もなかった。

結婚して以来、このようなことは一度もなかったもので、一郎は途方に暮れていた。じゅんこは浮気などしない。だからじゅんこの身の上になんか起こったのではないかと心配になった。本当に月にでも帰ってしまったのだろうか？

警察ではまじめに取合ってくれなかった。「そんなに心配しなくても、もう少ししたら奥さんは戻ってくると思いますけどね。似たような件は沢山ありますから。」

一郎はどうすべきか考えた。

パブの老人は、どうしてじゅんこのことを知っていたのだろうか？そうだ、まずあの老人を見つけよう。

翌日の晩、再び一郎はパブを訪れた。しかし老人はいなかった。

数日たってもじゅんこは帰ってこなかった。一郎は途方に暮れていた。毎晩月を見ながら、じゅんこをなつかしく思っていた。じゅんこなくしてどうやって生きていけばよいのかわからなかった。

毎晩一郎はあのパブに座るようになった。

ビールを飲みながらテレビを見て、じゅんこのことを思っていた。

一郎は宇宙についての番組を見るのが好きだった。

日本初の女性宇宙飛行士、丘崎花子は、宇宙船の技術の問題のため、地球に戻ることはなくなった。

じゅんこがいなくなってから一ヶ月が過ぎた。

ある日、女性が一郎に電話をかけてきた。

「もしもし、山口一郎さんですか？私は丘崎花子と申します。」

一郎は自分の耳を信じるができなかった。

「あの宇宙飛行士の丘崎さんですか？」

「はい、そうです。突然ですが、あなたにお会いしたいのですけれど・・・」

「どうしてですか？」

「あなたに重要なこととお話したいのです。」

一時間後、新宿のコーヒーショップで、一郎は丘崎花子と座っていた。一郎はその重要なこと、というものを早く知りたかった。しかし丘崎花子は無言でコーヒーを飲んでいて。彼女はそれについて話しづらいのだろうか。しばらくたってやっと彼女は口を開いた。

「テレビでは、私たちの宇宙での出来事について、本当のことを伝えていません。実は、途中で宇宙飛行船の燃料装置が故障して、大量の酸素が失われました。そして私たちはみんな、地球に戻るまでの酸素が十分ではないことを知ったのです。私たちは死ななければなりません。私が家族への最後の手紙を書いていると、だんだん息が苦しくなってきました。

これで終わりだ、と思ってまわりを見ると、泣いている人もいたし、叫んでいる人もいたし、横になっているだけの人もいました。みんなそれぞれのしかたで、最後の時間を過ごしていたのです。すると突然、目の前に明るい光が現われました。そしてその光の中から女の人が一人、出てきたのです。「あなたは死にません」とその人が言うと、呼吸ができるようになりました。「あなたは誰ですか？」と尋ねると、「私は月の光の中から来ました。ご存知でしょうか？」と、答えました。その女の人がかぐや姫だったのです！」

その話を聞いて、一郎は驚かなかった。丘崎花子が宇宙で会ったのが誰か、もう一郎にはわかっていた。

「その女の人から私に、何か言伝てはありませんか？」と一郎は丘崎花子に尋ねた。丘崎は涙を隠そうとはせずに、話し始めた。

「彼女はこう言っていました。『私は宇宙飛行士たちを助けたので、あなたと別れなければなりません。あなたのもとに戻ることはできません、すみません』と。」

一郎は胸が重くなった。愛するじゅんこなしでは、彼の生活に意味がないからだ。

「あっ、そうそう。」丘崎さんは少し頬を赤くして微笑んだ。「かぐや姫は去る前に、ちょっと変なことを言っていました。『狸によろしくと伝えて』と私に頼みました。私はなんのことかよくわからなかったのですが・・・」

本当に、変な言葉だ。一郎にもそれがなんのことか、わからなかった。

丘崎さんと会った後で一郎は、酒でも飲んで酔っ払らわなければならないと感じた。

新しく始まるじゅんこのいないつらい生活に、慣れなければならないからだ。

パブで先日の老人は、ニヤッと笑ってもう一度一郎に尋ねた。

「誰か私に何か伝えなかった？」と彼は聞いた。

すぐに一郎は、「狸によろしく、と伝えて」とかぐや姫が言ったことを、思い出した。

そうだ！この老人こそが狸だ！

老人はまだニヤニヤ笑っている。

一郎は言った。「私はじゅんこなしに生きることができない。どうしたら再びじゅんここと一緒になれるのか、教えてください。」

「じゅんここと一緒にいたいのなら、おまえさんは地球を出なければならないぞ。そして二度と地球に戻ってこれないんだ。これができるか？」

「じゅんここと一緒にいられるためなら、何でもする」とためらわずに一郎は言った。

「次の満月までに用意をしておけ。」と老人は言った。

翌日、一郎が仕事から家に戻ると、じゅんこは既に美味しい夕食を作って待っていた。

今では有名となった丘崎さんも、時々彼らを訪れる。

満月の晩になるとかならず、じゅんこと一郎は眠りもせず一晩中、月を見ている。

そのほかの点では、彼らのごく普通の家族だった。

あなたの日本の奥さんをじっと見てください。

もしかしたら彼女は、かぐや姫、ではありませんか？

いずれにしても満月の晩には彼女を一人にさせないほうがいいでしょう。

# 狂想的な任務

私は小説家だ。エルサレムに住んでいる。私の日常生活は二つの小説の間にある。今一つが書き終わったところだ。次の小説はもうすぐ書き始めることになる。

これまで書いていた小説の主人公がやっと息をついたところなので、これから書き始める次の小説の主人公が息をし始めるまでに、私自身もゆっくりと息がしたい。

私にも少し息抜きが必要だ。

小説は私に波のように押し寄せてくる。前の小説の波が私を飲み込んだばかりなのに、既に次の小説の波がすぐ近くにまで押し寄せてきている。

さて、あなたが見る周りの全ては私の小説の中での出来事だ。

例えば、あなたが通りを歩いているきれいな女性を見つけても、彼女に対して何もすることができない。彼女は私の小説の中の存在だからだ。「すみません、あなたはどの小説から来ましたか」とでも言って、声をかけてみますか？

もし誰かが銀行に強盗に入ってきたとしても、怖がる必要はない。彼らは私の小説の中の存在であり、すぐにでも主人公が現われて彼らを懲らしめてくれる。

もし私が戦争のことについて書けば、私は弾丸を避けることもできるけれど、怪我をして、白いページを血で染めるだろう。

もし私が愛のことについて書けば・・・

私の書きかけの小説の主人公たちは苦しみ続けている。例えば、ある若い女性は服を脱いで冷たい水でシャワーを浴び始めたのだが、私が小説を脇において書き続けないでいるので、可哀想にも彼女はそれ以来ずっと冷たいシャワーを浴び続けている。もし私が先を書かないでいれば、彼女は鳥肌を立てながらも永遠に冷たいシャワーを浴び続けることになる。

二人の殺し屋は標的を入り口内で待ち構えている。私はこの小説を書き終わらせないことにした。標的の人物は老衰で死んだかもしれないが、殺し屋たちは今でも標的を待ち続けている。

あるカップルは始めてキスをした。しかし、その小説も書きかけのままなので、彼らの間柄はそれ以上進展していない。

もし私の書きかけの小説の主人公たちが皆集まってきたら、私は彼らにとんでもない目に合わされるだろう。

私の新しい小説で、若くてきれいな女性が、私の上の部屋に住んでいる。

下の私の部屋で、毎晩彼女のハイヒールの足音が聞こえる。

彼女はどこへ？彼女はいつ部屋に帰ってくる？彼女には沢山の謎がある。しかし、私はそれらについてぜんぜん知らない。私はつい彼女のハイヒールの上に伸びている足のことについて考えてしまう。

そして、これが重要なのだが、ある晩彼女は私の部屋のドアの前で立ち止まることになる。そんなことは現実にはありえないことだろうか？

それがなければ小説は始まらないじゃないか。

まあ実のところ私の部屋に聞こえてくる足音はハイヒールを履いた神秘的な若い女性のものなどではなく、太った年寄りの女性のドタドタいう足音だったりする。彼女は私の知り合いであり、時々彼女の荷物を部屋まで運んであげたりしている。

ある日彼女が私の部屋のドアをノックした。私が「どうぞ、お入りください」と言うと、彼女は喘ぎ声と共に入ってきてそこにあった椅子に座り込んだ。

呼吸が静まると彼女は「お忙しそうところ申し訳ないけれど、すこし邪魔いたします。」と言いながらも話し続けた。「いつも親切にしてくれてありがとうございます。あなたを信頼できる人と見込んでのお願いがあります。近所の方が、あなたが何度も日本に

出かけており、日本について詳しいと言っていました。実は数年前から、私の息子が日本で消息を絶っています。そこで必要な費用は私が出しますので、日本に行って彼の消息を尋ねて欲しいのです。もしお忙しくなければ、すぐにでも日本に飛んでいただけたらと思うのですが。」

私は興奮して「今ちょうど本を書き終わって一息つくところです。喜んでお引き受けします。」と言った。

私の返事を聞いて、彼女はハンドバッグから、札束と息子の写真を取り出し私に手渡した。「息子の名前はダビッド・グロスといいます。この住所が彼の最後の居場所です。」と彼女は言って一枚の絵葉書を机の上に置いた。

彼女が部屋を出て行ったとき、いろいろな思いが私の頭の中をよぎった。

私は日本に行く機会がいずれ訪れるであろうと信じていたので、彼女の依頼を聞いたときにほとんど驚かなかった。それに、いずれにしても日本には行く気であった。日本にはあのみちこがいるのだから・・・

私の人生で出会った女性たちは幻のようで、

彼女たちから現実感を得ることはなかった。

たとえそんな女性が現われたとしても、私は嬉しくないだろうし、そんな彼女がいなくなったとしても、それほどがっかりしないだろう。彼女たちの私の人生への関わりは、走馬灯のような、あるいは映画の中で情景が変わっていくような一過的なものようだった。

みちこはそれとは違い、私にとって現実を感じさせる女性だった。彼女はずっと私と一緒にいた。時々私のベッドの中にもいたけど、彼女は私の心の中に住みついていた。

いまでも彼女の暖かい息と優しい肌を感じることができる。

私達の逢瀬は、いつも彼女次第であった。

なぜか彼女は私の居場所を知っていて、彼女がその気になったときに私に連絡してきた。

私がそんなことについて考えていたとき、タバコの煙りのにおいを感じた。誰かが私の背後で咳をした。振り向くと、そこに口ひげを蓄えた年配の太った男がパイプを片手に私の肘掛け椅子に座り、私を見てニヤニヤしていた。

私は息を飲んだ。

するとその男は「俺なしで誰かを探せると言うかい？人探しなら俺の仕事だ。」と言った。

私は「お前は誰だ？」と叫んだ。

「俺のことを覚えていないのか？なら自己紹介しよう。俺は“黒い夜の殺人事件”を解決したジョン・スミスと言う探偵だ。」

そんなバカな！？私の前に私の小説の登場人物が座っているなんて。

すると電話が鳴った。

電話を取ると「もしもし、セルゲイですが。あなたは日本に行くつもりだと聞きました。

私のナターシャという娘を見つけてください。彼女は、新宿の紀伊国屋書店のロシア語の本のセクションで働いているはずですよ。お父さんが彼女を待っていると伝えてください。」

私は耳を疑った。セルゲイとナターシャは、私の“日本からの帰り”と言う話の主人公なのだ！その小説でセルゲイは娘を探しているけど見つかることができないでいた。

私が受話器を置くなり電話が再び鳴った。

粗野な声が「俺から逃げられると思うなよ。日本に行ったとしても俺はお前を逃がさない。」

私は「お前は誰だ？」と聞く必要はなかった。「逃がしはしない！」と言う話の主人公だ。

厄介なことはごめんだと思い、電話の線を抜いた。にも拘らずまた電話が鳴った。私が思わず受話器を取ると、不安な女性の声が「あなたは私をボロ雑巾のように捨てるつもり？ずっと一緒にいるって約束したじゃない。日本にいる愛人のところに行くつもりなのね・・・」

私は受話器を置いて力なく電話を見た。

私は自分が誰かの小説の主人公の一人であることを感じ始めた。でも私は操り人形なんかではありたくない・・・

いずれにしてもお母さんの依頼をこなすことにした。

ようやく私は日本へ行く飛行機に乗った。私の隣の座席にはあるヨーロッパ人の紳士が座っていた。フライトの前から彼は時々私を見てニヤニヤとしていた。

私は彼に「私の顔に何かかいてありますか？私たちは知り合いですか？」と言った。

彼は「ことはあなたが考えているより複雑ですよ。実はあなたは存在していないんです。あなたは私の小説の登場人物に過ぎないのでから。」と言う。

私は「あなたは私にとって、単なる頭のおかしい人に過ぎない。東京までの長い時間あなたのたわごとを聞いているつもりはない。」

彼は「私の言葉を信じないなら、これでどうだ。特にあなたが東京に生きて到着する必要はない。」と笑って言った。「この飛行機を墜落させてみる？」

と言うが否や飛行機が大きく揺れ始めた。あたりから驚きの叫び声が沸き起こった。機内放送で「乗客の皆様へご連絡いたします。当機は大きなエアポケットの中を通過する模様です。座席にお戻りなってシートベルトをご着用ください。」

その男は「それともハイジャック犯に撃ち殺される役はどうだ？」と言った。

と言うが否や、飛行機の通路を数人の黒い皮ジャンを着ている長髪の男たちが、布に包まれた何か不審なものを持って操縦室のほうへ走っていった。

「それともスチュワーデスに毒殺されるほうがいい？」と彼は言った。横にスチュワーデスが立っていて私に微笑んで「コーヒーはいかがですか？」と言ってお盆にのったコーヒーを差し出した。そのコーヒーからは強いアーモンドの匂いがした。

青酸カリが入っているのだろうか。

「これで分かっただろう？私はあなたの日本の旅行を波乱に満ちた面白いものにしたと思っています。」と彼は言った。

状況は把握できたが、どうするべきなのか私は頭をフル回転させ始めた。

私は「タバコなしでは集中できない。タバコを吸えるところに移動しよう。」と言うと「私の小説でお前はタバコは吸わない設定だったが。」と言った。「あなたは私の全てを知っている訳ではない。他の作家の作品の中では私は愛煙家なのだ。」と私は答えた。

私たちは喫煙所に向かった。私たちが非常口のそばを通りかかったとき、私は両手で壁の手擦りを強く掴み、足で非常口の取っ手を渾身の力で蹴り下げた。

ドアが開いた！お別れの挨拶をするまもなく、私の同行者はドアの外に吸い込まれていってしまった。彼の後を追いかけるように毒入りのコーヒーとスチュワーデス、さらに不審物を持った黒い服の男たちがドアの外に飛んでいった。他の乗客や乗務員たちはベルトをしていたので席に残っていた。突然その非常口のドアが大きな音を発して閉じた。その時私は傀儡師から解放された操り人形の幸せを感じた。



これで私の日本の旅行は落ち着いたものになるはずだと思った。

ダビッド・グロスが最後に住んでいたところは西新宿にある“白い桜”と言う旅館だった。私はその旅館に泊まることにした。旅館に着くとフロントのカウンターの向こう側から丸顔の年配の女性が私に微笑んで「いらっしやいませ！」と言った。ロビーでは小柄な女性がモップがけをしていた。

私は年配の女性に「部屋はありますか？」と聞いてみた。部屋はあるようなので、必要事項を確認して部屋を借りることにした。

私はダビッドの写真を取り出して彼女に見せた「三年前頃にこの旅館を利用していたのですが見覚えはありませんか？名前はダビッド・グロスと言います。」

思わぬところから手が伸びてきて写真を奪い取った。掃除をしている女性だった。「そいつは人間のくずだ。そいつは妊娠した私を捨ててどっかへ逃げた。今私は彼の二歳の息子を女手一つで育てている。忘れることなんかできるもんか。」

私は彼女の手から写真をそっと取り戻し「で、今彼はどこに？」と静かに聞いた。

彼女は「そいつにどんな用があるの？」と言った。「彼のお母さんの依頼で彼を探しているんだ。」と私は答えた。「そいつはここから消えて以来まったくの音信不通さ。」と彼女は言った。

今はこれ以上何かを知ることはできない、とわかり部屋に向かった。私は長旅の疲れでへとへとだったので早く横になりたかった。部屋の戸を開けると中はタバコの煙で窒息しそうなほどだった。パイプを持ったジョン・スミスが咳き込みながら肘掛け椅子で私を待っていた。私は先ず窓を開けた。「私を殺す気か。煙で窒息しそうだ。」と彼に言った。

ジョン・スミスは「ごちゃごちゃ言わず、新宿の歌舞伎町にある“金の竜”というパブに行くんだ」と言った。「そこで働いている田中陽子という売春婦を見つけて話をしてみるんだな。彼女はダビッドのことについて何かを知っているはずだ。」そう言うと彼は煙を残して部屋から出て行った。私はドアを閉めて大きなため息をついた。今朝成田に着いたばかりでとても疲れている。少し休みたいが、すぐに歌舞伎町に行かなければならないようだ。

誰かがドアをノックした。私がドアを開けると拳が私の顔をめがけて飛んできた。私はそれをまともに喰らって意識を失い床の上に倒れた。気が付くと二人の男が私の顔を覗き込んでいた。二人のうち一人はゴリラのような男でランニングシャツ一枚を羽織っているだけだった。もう一人の男のほうはきちんとした身なりをしていた。

二人目の男が「坊や、ダビッド・グロスのことは忘れたほうがいいよ。もし君が忘れることができないなら、私たちが忘れさせてあげるよ！今のはほんのご挨拶に過ぎないからね。」と言い私に笑いかけた。私を殴ったほうの男が私のほうを見ながらニタツと笑った。獣のような雰囲気とその男はさらにゴリラのように見えた。彼の先祖は間違いなく・・・

そうして彼らは部屋から出て行った。

事はそれほど単純ではないようだ。事の背後にはもっと深い何かがあるようだ。私はそれに興味がわき抑えることができなくなりそうだ。

私はすぐに起き上がることもできずしばらくそのまま横になっていた。顎がとても痛んで眩暈もしたが、私は陽子と言う女性を探す必要がある。

私は歌舞伎町まで、重い足をひきづりながら歩いて行った。

“金の竜”を探し出すのにはかなり手間取った。その店を探しているうちに、少し危険そうな場所に迷い込んでしまったようだ。薄暗い通りで危険なおおいをさせた男達

とほぼ裸に近い女たちが私の周りを囲んでいた。私はハイエナに囲まれたウサギになったような気分だった。

ようやく“金の竜”を探し出し、店に入った。かなり大きな店でカウンターの椅子に数人の女の子たちが金色のすその短いチャイナドレスを身にまとって座っていた。髪の毛が角のように見える結い方をしていた。そのうちの一人を見て私には電撃が走った。彼女は私のみちこと瓜二つだ！

私は店の隅のほうにある席に着いた。すぐに女の子の一人が私の許に来て「何をお飲みなられますか？」とかわいく微笑んで聞いてきた。私はビールを頼んだ。

みちこに似ている女性と視線が会うと彼女は私に微笑んで手を振った。私は彼女に手を振り返した。すぐに彼女はカウンターの席を立って、私のほうへ腰を振りながら近づいてきた。「一緒に飲んでもいいですか？」と言いながら彼女は私の隣に座り込んだ。

間違いない。これはみちこだ。

私は「みちこ、ここで何をしているんだ？」と言った。

「みちこ？私はゆみですけど。」

名前などこの際関係ない。彼女が自分をゆみと言うのならゆみで構わない。私は彼女のウイスキーを注文した。

私は「ゆみ、この店に陽子と言う女が働いていると聞いたがどの娘か教えてもらえる？」と小声で聞いた。

「私のほうがあの娘よりずっといい女なのにどうして？なんで彼女に会いたいのか？」

私は「陽子と話したいことがあるんだ」と言って二千円を彼女の手に握らせた。ゆみ（みちこ？）は「彼女は上の彼女の部屋で休憩している最中だけど。ちょっと前に二人のお客さんの相手が終わったばかりだから。」

私はさらに財布から二千円取り出し「彼女の部屋に案内してもらいたいんだけど。」と言った。

ゆみは私の手からお札を素早く受け取って「行きましょう。」と言った。私は他の女の子たちの視線を感じながら、ゆみの後ろについて階段のほうへ向かった。二階に着くとそこは長くて暗い廊下で沢山のドアがあった。ドアの向こうから笑い声やあえぎ声などが聞こえた。ある部屋のドアが少し開いていてそこから明かりが少し漏れていた。「その部屋」とゆみが指差した。私はドアを少し開けて中を覗いた・・・私は中を見るや否やドアを閉めた。私にわかったのはダビッドの行方を教えてくれる別の人を再び探す必要があるということだ。部屋の中には若い女の子が見てはいけないような惨状があった。突然外からパトカーのサイレンが聞こえてきた。あちこちの部屋のドアから全裸、半裸の人々が出てきてそれぞれの女の子の後ろを追いかけていった。ゆみは私の腕を引っ張り「こっち！」と言って、あるドアを開けた。それは非常口だった。

私たちは外に出てかなりの距離を走って逃げた。

数十分後ゆみは再び「こっち」と言った。そして鍵を取り出し、ある入り口のドアを開けた。暗い玄関で靴を脱いで奥へ進むと広くて明るい部屋に着いた。そこは一介の売春婦などが住めるような家ではなかった。年配の女性が「ここには人を連れてこないと言ったでしょ。」

富美の将来のことをきちんと考えて行動してるの。」

ゆみは「お母さん、この人は他の人とはわけが違うの。」と言った。「どういうことだい？」年配の女性は少し声の調子を低くして聞いた。

ゆみは「彼が富美の父親なの。」と言った。私は耳を疑った。

ゆみは「そっちがあなたの寝室で、トイレはそこ。それからシャワーを浴びるなら浴室はあっち。」と言ってそれぞれの部屋を指差した。そう言い終わると彼女はどこかへ行ってしまった。

私が目を覚ましたとき、あたりはすでに明るくなっていた。私のベッドの傍らで、5歳くらいの女の子が私を見つめて立っていた。わたしが目を覚ますのを待っていたようだ。

白くて大きな髪飾りを着け、ピンクのワンピースに白のハイソックスという、いかにも『これからお出かけ』と言わんばかりの格好をしていた。

彼女は私が起きたのを見て、「私は富美。出かけるんだから早くしてね」といった。私が疲れからボーっとしていると、

「もう！今日はあなたが私を動物園に連れて行ってくれるんでしょう？お母さんがそう言ってただけ。ご飯は台所のテーブルの上にあるから、早く食べてね。食べたらずぐに動物園に行くのよ。」

「お母さんは？」と私は聞いてみた。「もう仕事に行っちゃったよ」と富美は答えた。

富美が部屋から出ると、私は服を着替え、用をたして台所へ行った。

食卓の上にご飯と焼き魚、野菜を料理したものが置かれていた。「食べないの？」と私は富美に言った。「とっくに食べ終わってるわよ」。

「動物園はどこにあるんだい？」と私は出掛けに聞いた。「もう！上野動物園も知らないの？ここからだ歩いて行けないから新宿から電車で行くの。新宿駅は分かる、あっちの方よ。」と言って小さなかawaii指で駅の方を指差した。

私たちは新宿駅のほうに歩き出した。

途中二人組みの警官が警察手帳を提示しつつ私に話しかけた。「職務質問です。日本語はわかりますか？失礼ですがパスポートを拝見させていただきますか？あと何故この女の子と一緒にその子との関係を説明していただけますか？」質問を始めた方とは別の警官が私の背後の方へスッと移動する。

一見穏やかだが、もう一人の方は何かがあればすぐにでも私を取り押さえられるように準備をしているようだ。

私はパスポートを取り出した。富美は「この人は私のお父さんです。今から一緒に動物園に行くところです。」と言った。

警官が私の顔を見つめた。

富美は彼女の小さい鞆からある紙を取り出して警官に手渡した。警官たちはその紙と私のパスポートを注意深く見て確認をしていた。

警察官が「ご協力ありがとうございました。楽しい一日をお過ごしください」と微笑んで言った。

新宿駅の前で、突然黒い車が私たちの前に止まった。私の二人の顔見知りのギャングが車から降りてきた。彼らは私たちに近寄り、「私たちが警告したにもかかわらず、君はまだあの人を探し続けているのか。今、君は警告を無視した報いを受けることになる・・・」と言った。彼らはポケットに手を入れた。突然富美は「私のおじさんは篠田翔太です。私に何かあれば彼があなたたちを殺しちゃうよ。」と言った

それを聞いてゴリラは後退りした。二人目のギャングは「何を怖がってるんだ？すぐ彼を捕まえろ！その篠田ってのは誰だ？」と言った。ゴリラは「俺はまだ死にたくない。お前も死にたくないければこの件からは手を引いたほうが良い。」と答えた。二人目のギャングは私をにらみつけながらも車に乗りこんだ。

私は動物が大好きだ。大学で勉強していたとき、学費を稼ぐためにしばらく動物園で働いたこともある。

私は富美と一緒に、長い間動物園を歩き続けた。白クマの前に止まったとき、富美は「私は白いクマが大好き。」と言った。白いクマは岩と池がある深い谷の様な所にいた。「もし私があそこに落ちたら、あなたは私を助けてくれる？」と富美は聞いた。「もちろん」と私は答えた。突然彼女はそう高くない塀を乗り越えて、白クマの近くに飛び降りた。私と周りで立っていた人たちはなすすべが無かった。小さい女の子は岩の上に座ったが、大きな白いクマが彼女のほうに歩き始めた。私は思わず彼女の近くに飛び降り、彼女を抱きかかえてそこから登り出た。周りにいる人たちは皆私たちの方に近寄った。「どうしてこんなことをしたんだ？」と私は彼女を叱った。富美は「私はあなたが、私の本当のお父さんかどうか試したかっただけ。」と答えた・・・

私は富美と一緒に、動物園の中の池の近くにあるカフェに座っていた。私はコーヒーを、彼女のためにはアイスクリームを注文した。池は蓮の葉で覆われていてその合間を鴨が行き来している。開けた辺りでは白鳥やフラミンゴなどが時折えさをついばむために水の中に嘴を突っ込む。私はみちこ（ゆみ？）の本当の名前が知りたくなった。そこで富美に「お母さんの名前は本当は何ていうの？」富美は「何でお母さんの名前を知らないの？」私は続けないほうがいいと思い、この話を打ち切った。私は彼女ともう少し仲良く食べに来打ち解ける必要があると感じた。「富美はどんな歌が好きなの？教えてくれる」と私は言った。彼女は「ぽっぽっぽはとぽっぽ豆がほしいかそらやるぞみんなでい。」と歌い始めた。私達は何度か一緒にその歌を歌った。

近くのテーブルでジョン・スミスがパイプの煙をくゆらせている姿が目に入った。彼は私にウインクをした。私は富美に「ちょっと待ってて」と言って彼のテーブルの席についた。ジョンは「すぐ新宿の紀伊国屋書店に行ってナターシャを見つけたほうがいい。彼女はダビッド・グロスの居場所を知っている。」と言った。十分後私は富美といっしょに上野駅に向かった。途中で彼女は金平糖を一袋買うようにと私にねだった。

紀伊国屋のロシア語セクションで、私は金髪で細くて若い女性を見つけた。私は彼女に近寄って囁くように「ナターシャ、私はダビッド・グロスを探しているのだ」と言った。彼女は大きい声で「はい、その本ならこちらにあります。どうぞ」と言って“アンナ・カレーニナ”という本を開いて私に手渡した。本の中に一枚の紙切れが挟まれていた。そこには「危険！すぐにここを離れなさい。女の子が誘拐されないように気をつけなさい！」と書かれていた。私は急いで富美のいた方へ振り返ったがそこには富美はいなかった。床の上には富美のかばんが無造作に投げ置かれ、辺りにさっき買った金平糖が散らばっていた。私は一番近くの出口に向かって階段を駆け下りた。しかし、そこでも富美を見つけることができなかった。この新宿の紀伊国屋にはいくつかの出口がある。誘拐なら今から私が全部の出口を探して・・・などとやってるのをじっと待っているはずがない。今ここで私が誘拐者を捕らえるのは不可能だろう。何とかしなければならぬのは分かっている。だが私にはどうするべきか思いつかなかった。

突然私の前にジョン・スミスが現われ「情報を得たいなら日本には面白い案内所がいくつかある。中でもこれは私が特に推薦する場所だ」と言って私に一枚のチラシを手渡した。私はそこに書かれている住所を見て「誘拐された女の子を探すこともできるのか？」と聞いたが我らの探偵は既に姿を消していた。

ジョン・スミス推薦の“案内所”は山谷の中でも一際薄汚い建物の中にあった。入り口のドアは半開きの状態であった。私は中に入った。がらんとした部屋の中心にぼろを纏い頭をくしゃくしゃにしたままの老婆が座っていた。

彼女は私を見てニタツと笑った。彼女は歯が二・三本欠けていた。私は「奇妙な案内者だな。」と内心思った。

彼女はいきなり「十万円だね」と言った。

「十万円が何だって？」と私は聞いた。

「あんたのかわいい娘さんを見つけないだろうか、十万円は高くないぞ。値引きはなし、前金で払ってもらおう。」

私が事情を説明する前に既に何の用件かを知っているくらいだ。情報屋としての腕は確かなのだろう。財布を確かめると十万円とちょっとの現金があった。私の財布の中身まで把握しているのだろうか。ともかく、こういう場合は素直に言うことを聞くべきだろう、そう思いながら、ほとんど全ての持ち金を彼女に手渡した。

彼女はお金を受け取ると、手振りで私に座るように示した。

その老婆は後ろから箱を取り出し、私の前にいくつかの線香を用意して火をつけ始めた。妖しい匂いと共に線香から紫や黄緑などの奇妙な色の煙が部屋に立ち込めた。頭の奥がキリキリと痛み眩暈がしてきた。何かの幻影が見えだした。金色の蠍が真っ赤なコブラと戦っている様子だった。蠍はコブラを攻撃して致命傷を与えようとするが攻撃は届かず、逆にコブラに食べられてしまった。しかし、勝ったように見えたコブラがのたうち始めた。やがて、コブラは痙攣し始め、ついには動かなくなった。真っ赤だった体は、燃え尽きた灰の様な色に変わっていった。

正気に返ると私はそこに一人ぽつんと取り残されているのに気が付いた。部屋のドアは入ってきた時と同じように開いていた。私は外に出た。まだ頭がくらくらしていた。幻覚は、はっきりと覚えているのだが私はその意味が分からなかった。この幻覚で私に何をしろと言うのだ。肝心の富美の居場所をつきとめるのに何かの役に立つとも言うのだろうか？

多分、ナターシャが何かを知っているのだろう。私は再度彼女に会う方がよいと考え、近くの駅へ向かって歩き始めた。と、向こう側からナターシャが歩いてくるのが見えた。

私は彼女に駆け寄り「ナターシャ、君は富美の居所について何か知っているだろうか？」と問い詰めた。

ナターシャは「少し酔ってるふうに見えるけど、コーヒーでも飲んで頭をすっきりさせたほうがいんじゃない。」と言って近くの喫茶店のほうを指し示した。

私達はその喫茶店に入ってコーヒーを頼んだ。

私はナターシャに老婆と、それから私が見た幻について話した。

話を聞いているうちに彼女の顔から血の気が引いていった。

彼女は「“金の蠍”と“火のコブラ”は中国のシンジケートの中でも最も危ない組織です。もしその手の人間の仕業なら私たちには手出しができない。」

突然私はあることを思い出した。私は富美が自分の叔父さんが何かの力を持っている人物であると言っていた。

私はナターシャに「篠田翔太と言う人物に心当たりはある？」彼女は「私だけじゃなく、皆が知っている人物よ。」と言った。

私は「どこに行けば彼と話をすることができる？」と聞いた。ナターシャは「“金の竜”と言うパブで田中陽子という女性と接触してください。」と言った。私は「彼女は既にこの世にはいない」と言った。

ナターシャは私に物知り顔で「この世界はそんなに単純じゃないのよ」と言った。

ナターシャの説明を理解できないながらも、私が再び“金の竜”を訪れたときは既に日が暮れかかっていた。

私が店に入ると金色のチャイナドレスを着た若い女性が私に近寄ってきて「いらっしゃいませ。」そして小声で「私が田中陽子です。篠田様がお待ちです。私の後に付いて来て下さい。」と言った。

店の中をどう歩いたのか、やがて私達はある二人のがっしりした男たちが見張っている部屋の前に着いた。

部屋の中に通されると、中には迫力のある男が大きな机の向こう側に座っていた。両脇には、別の二人のボディガードが立っている。

事の次第を私は話し始めた。篠田は自分の姪っ子が誘拐されたと聞いたとき、怒りで顔が真っ赤になった。「ゴミは所詮ゴミに過ぎないな！これ以上汚い中国の連中と関わるつもりはない。ばい菌は消毒してきれいにしないと。」彼は何箇所かに電話を入れて何かを急いで命令していた。そして部屋にいた二人に「兵隊を全部連れて行っても構わない。今後一切私の目にあいつらが入らないようにしてこい。どんな手段でも構わない。そこの旦那も一緒に連れて行け。」

三台の車に分かれて私達はある建物に乗り付けた。誰一人銃火器を手にしていないのに気がつき、私は「銃は使わないのか」と聞いた。「銃なんか必要じゃない。」と誰かが答えた。見ていると体格のよい男がドアに掌をゆっくりとした動きで当てると、ドアが吹き飛んだ。その直後全ての男たちが建物の中に入っていった。私も皆と行動を共にした。大きな広間に私達は着いた。そこには中国人たちが待ち構えていた。大勢の男たちが戦いはじめていた。ジャッキー・チェンの映画が好きな人にはたまらないくらい見ごたえのあるシーンだっただろう。私は素手の格闘技には心得がないので、顔に一撃を喰らって倒れてしまった。気を取り戻すと近くに階段があるので気が付いた。私は富美はその先にいると感じ、その階段を駆け登った。扉を開けるとそこは廊下で左右にドアが並んでいた。このドアのどれかの先に富美がいるはずだ。私は静かに「ぽっぽっぽ はとぽっぽ 豆がほしけりゃ・・・」と歌い始めた。一つのドアの後ろから「・・・そらやるぞみんなで仲良く食べに来い」と声がした。私はそのドアを開けた。富美は部屋の真ん中辺りに椅子に縛り付けられていた。彼女の紐を解いて彼女を抱きしめると富美は「お父さん、お父さん！」と言って泣きついた。私は彼女を抱きかかえたまま窓から飛び降りて、その場からすぐに立ち去ることにした。

十分も過ぎた頃、富美は落ち着いたのか「お腹がすいた。何か食べよう。」と言った。食べ物を売っている店を探しながらさらに数分歩いていると、二十四時間営業の蕎麦屋が見つかった。優しくなお婆さんが私たちの様子を見て、通常よりも多く蕎麦を盛り付けてくれた。食べ終わるが否や富美は寝付いてしまった。どうしようか思案に暮れていると、その様子を察してお婆さんが「お嬢ちゃんが寝てしまったようですね。しばらくここでゆっくり休んでいただいて構わないですよ。」と言ってくれた。

朝日が上った頃私達は再び蕎麦を食べ、その店を出ることにした。私は富美に「お母さんと会わないとね。どこに行ったらいいと思う」と言った。富美は「お母さんなら鎌倉で待っているに決まっているでしょ。」と答えた。私は特に理由なども聞かずに鎌倉へ向かうことにした。

東京駅から私達は鎌倉行きの電車に乗った。私たちはボックスタイプの席に座り、向かいにはある老人が座った。数分経つと富美は「黙って座っているだけなんてつまんないから何かお話でもしてよ。」と言った。私は「お話して言われてもするような話なんてないな。」と答えた。

「鎌倉まで私が黙っておとなしく座っているなんて思っていないでしょうね？」

「悪いけど、今はお話とか作ってる余裕がない。」

突然向かいに座っている老人が私に微笑んだ後「お嬢ちゃん、私がお話をしてあげよう。」と話しかけた。

それは富美の興味を惹いたようだった。

老人は話を始めた。「私は小さいとき随分と沢山、友達とチャンバラごっこをしていた。その中で私は一番小さかった。ある晩皆が私に、今からお前は番兵だ。交代の時間になるまでここで待っている。」と言ってある場所を指した。私は頷いた。それで私は長い時間ずっと一人で立っていた。彼らはもしかして私のことを忘れてしまったのかもしれないが、私は約束を破ることができないでずっと待っていた。やがて日が沈みあたりは暗くなってきた。私の先祖は武士で約束を破ることは恥ずかしいことだ。といつも言われていた。寒さと怖さで涙がこぼれてきたがそれでも私はその場所で待ち続けた。

突然ある年寄りの人が私の前に現われて「ここで何をしているんだ？」と私に聞いた。私は彼に状況を説明した。彼は「私は大老なのでお前を任務から解く。家に帰りなさい。だがお前の勇敢さに敬意を表してこれを授けよう。」と私に銀の小さい呼子を手渡した。「この呼子は本当に命に危険が迫ったときにだけ使いなさい。」私はその呼子のことを長い間忘れていた。思い出したのは戦争の終わり間際のことだった。周りが火に包まれ家族みんな、母や妹たちと一緒に床の上で死を覚悟し始めたときふと呼子のことを思い出した。私はおもちゃ箱からそれを見つけ出して口に当てた。

突如銀の侍たちがどこからともなく現われて私たちを担ぎ上げた。どこをどのように通って行ったのか判らないが、彼らは私たちを森の中にある静かなところに連れてくると姿を消した。こうして戦争による私たち家族への惨禍は過ぎ去った。」

私達はその話の時を忘れて聞き入っていたようだ。

電車はもうすぐ鎌倉に到着するようだ。私はその老人に「面白いお話をしていただいでどうもありがとうございます。とても上手にお話をお作りになりますね。ロシアにも似たような話があったのを思い出しました。」と言った。富美は先ほどのお話の内容について何かを考えているようだ。突然彼女は「その呼子はどうなったの？」と言った。老人は銀の小さい何かをポケットから取り出し「私にはもうこれは必要がない。あなたにお譲りします。あなたにこそこういうものが必要になるでしょう。」と言って彼女に手渡した。富美は驚嘆に満ちた表情でそれを受け取った。老人は一言「使うときは判るよね。」と言った。

私達は微笑んでいる老人を残して席を立った。

駅のプラットフォームに降りるとみちこを見つけた。

「お母さん！」と富美は叫んでみちこの方へ走り寄った。みちこは富美を抱きあげた。彼女たちには私の存在が見えていないようだ。こんな状況では私は単なる邪魔者なのだろうか。その様子を見ていると私は私の後ろで誰かの咳を聞いてタバコの臭いを感じた。「こんにちは、ミスターミス！」と私はいった。彼は渋い表情をしたまま「すぐ長谷寺に向かうんだ。そこでダビッドの情報を得ることができるはずだ。」というと彼は私に背を向けて立ち去った。

私達はその寺に急ぐことにした。

途中弁当屋の脇を通りかかったとき、みちこは「何か食べるものをここで買っておきましょう。」と言った。

私は特に反対する理由もないので、そこで美味しそうな弁当を買った。

寺に着くとみちこはお地蔵様に手を合わせ始めた。富美は母親の行動を見て「お母さん、何をしているの?」と言った。

「お母さんはね、拝んでいるのよ。」

「拝むってどういうこと?」

「お願いすることよ。」

「お母さんは何をお願いしたの?」

「家族のみんなが幸せでいれるようによ。」

それから富美は、お母さんの様に手を洗って、手を合わせ、目を閉じて、囁き始めた。

ある年寄りの僧侶が私たちに近寄ってきた。「この娘の名前はなんといいますか?」とその僧侶は口を開いた。みちこは「この子は私たちの娘で富美といいます。」と言って彼の顔を見つめた。

僧侶は「その女の子が手を合わせたときに、お地蔵様が微笑むのが見えたのだ。おそらくその子は特別な運命を背負っているのだろう。だがあなたたちにはまた別な問題があるようだ。おそらく私が何かの役に立てるでしょう。」と言った。

みちこは私の方を見つめた。私は「私はある人を探しています。彼の居場所を特定することができますか?」と言ってみた。

「ないものを探し出すことは私であっても不可能だ。」

そう謎めいた言葉を残して僧侶はその場から立ち去った。

私はそのことの意味が分からず困惑した。私がそのことについて考えをまとめようと意識を集中し始めたとき、富美が私の袖を引っ張って「お腹がすいた。お弁当を食べようよ。」と言った。二人に引きずられるように私も展望台に向かった。私達は弁当を食べるためにテーブルを囲んで座った。近くのテーブルでは他の訪問者たちも何かを食べる準備をしていた。一風変わった注意書きが貼られているのが目に入った。

「トンビに注意。食べ物を狙っています。」と注意書きには書かれていた。実際にその注意書きの上のほうで大きな鳥が飛んでいた。周りの人たちは弁当を隠すようにしていた。私達も弁当を守るようにし始めたところ、ある人が「弁当なんかよりも娘さんを守らないと大変なことになりますよ。」と言った。

みちこは声の主のほうへ顔を向け「ここで何かあったんですか?」と聞いた。

その人は「少し長くなりますが、ここであった出来事を知っておいたほうがよいでしょう。」と言って、私達を見つめた。

私とみちこは少しの間見つめあった後、彼のほうを向いて肯いた。

「太郎という少年が親といっしょに上野の西に住んでいた。」そう言って彼は話を始めた。

上野の西に太郎は親と一緒に住んでいた。彼が四歳だった時、とても飛行機を怖がった。

太郎は飛行機のぶんぶんいう音を聞くと走って行ってテーブルの下に隠れた。親は戦争の時代に生きていた誰かの魂が太郎の心の中に入ったと思っていた。

でも彼は七歳になったとき、何も怖がらなくなっていた。太郎の先祖の中にはたくさんの勇敢な侍がいた。

彼の家の客間の壁に、一枚の古い写真がかけられていた。写真の中の人は、母の祖父で大戦中のゼロ戦のパイロットであった。彼は戦争の終わりに大きな敵の軍艦を沈めた。本当に勇敢な人物だった。太郎は彼の名にちなんでつけられた。



太郎はその先祖と心の結びつきを感じていた。ほとんど毎日、その写真の前に立って何かをつぶやいていた。

先祖の太郎のような勇敢な人物になるために、彼は空手を習い始めた。

太郎の家の隣に、久美子という小さい女の子が住んでいた。彼女は五歳だった。太郎は久美子とよく一緒に遊んでいた。太郎は小さい久美子を大きな犬やいじめっ子などから守ってあげた。久美子はしょっちゅう太郎にいろいろなお菓子を持ってきた。家族ぐるみの付き合いで、時々一緒に短い旅行などをしていた。ある日、彼らは鎌倉に旅行に行った。

阿弥陀如来像が安置されたお寺の辺りを散策していた。お腹がすいたのでお弁当を食べるためにテーブルを囲んで座った。近くに一風変わった注意書きが貼られていた。

「トンビに注意。食べ物を狙っています。」と注意書きには書かれていた。実際にその注意書きの上のほうで大きな鳥が飛んでいた。みんな弁当を隠すようにした。

突然大きな鷺が石つぶてのように、とても素早く空から降りてきた。そして小さい久美子を掴んで飛んでいった。誰も何もすることが出来なかった。鷺は小さい久美子をつかんだまま山のほうへ飛んで行ってしまった。久美子の親は大変なショックに見舞われて警察に連絡をした。鎌倉の警察は署をあげて久美子の捜索に当たったが、手がかりさえ見つけることが出来なかった。

がっかりした哀れな親はなすすべもなく、ともかく家に帰った。

太郎は泣かなかった。彼の心は憤慨していた。彼は帰ったときすぐに先祖の写真の前に行って何かをつぶやき始めた。激情のゆえに彼の目からは涙が流れ始めた。

すると太郎は、その写真の人物の目からも一粒の涙がこぼれ出たのに気がついた。長い間太郎は写真の前で祈った。彼は気がつかないうちに居眠りをしてしまった。夢の中で写真の太郎が彼の前に現われた。先祖の太郎は「久美子を助けたければ、朝早く鎌倉に行って阿弥陀如来のお寺を見つけなさい。君の貯金箱の中にあるお金で十分はずだ」と言うのと彼はいなくなった。

翌朝太郎は貯金箱からお金を取り出し、学校に行くそぶりをして上野の駅に行った。

京浜東北線を見つけて電車に乗り、品川で横須賀線に乗り換えて鎌倉に向かった。

鎌倉の駅を出て、バスに乗って阿弥陀如来のお寺についた。

しばらく太郎はお寺の周りを歩いていたが何もなかった。突然、歳を取ったお坊さんが彼の前に現われた。「君の困っていることは知っている。久美子は生きているけれど彼女を助けるのは簡単ではない。あの鷺は本当の鷺ではない。それはアメリカを支配する思念である。久美子の先祖の一人は、人間魚雷に乗り込んで敵の戦艦を沈没させた。その鷺が自分の息子を久美子と結婚させれば、彼は日本全土を掌握することが出来る。それをとめることが出来るのは君だけだ。困難に打ち克つためにこれを持っていきなさい」と言って太郎にお守りを差し出した。

さらにお坊さんは太郎に森に続く狭い道を指して「その道を最後まで行きなさい。」と断言した。

その道を太郎は歩き続けた。道はだんだん険しくなった。いばらでズボンが引き裂かれ腕や足に擦り傷が出来た。

やがて大きくてきれいな家が太郎の前に現われた。その家の庭で久美子はある金髪の男の子と遊んでいた。彼はカウボーイの帽子を被っていた。マイケル・ジャクソンの歌が流れていた。金髪の男の子は大きくて強そうだった。彼は飛行機の模型で楽しそうに遊んでいた。太郎はそれを見つめたとき、それがB-29の模型であることがわかった。太郎の祖母の家族は、東京大空襲のときに焼け死んでいる。祖母は家族の中でたったひとりの生き残りだった。大嫌いなB-29を見たとき太郎は何も考えず庭に入った。太郎は大きな男の子に近寄った。太郎の怒りに満ちた目つきに威圧されて金髪の男の子はあどすさった。「ダディ、ダディ！」と男の子は叫んだ。

すぐに大きくて強そうな男性が家から庭に出てきた。彼は笑って言った「久美子はわなに過ぎない。お前をおびき出すためだ。今から私の復讐が始まる」。

彼は太郎ににじり寄った。太郎はお守りを握りしめた。すると二人の間に先ほどの歳を取ったお坊さんが現われた。「私たちの寺の修行僧は鍛錬を積んで今ではみんな居合い抜きの人となっていて」。

「居合い抜きとは何だ？」とアメリカ人は聞いた。そして彼はゆっくりと拳銃を坊さんのほうに向けた。

「こういうもんだ！」とお坊さんは言った。その瞬間、アメリカ人は真っ二つになっていた。「居合い抜きも知らないで日本を支配できると思っていたのか。」

「すごい、居合い抜きのことも習わなければならないとな」と感心した太郎は思った。

太郎は久美子と一緒にその家を出た。「どうしてこの山の神様は、ここにこんな人間の家があることを許しているのだろうか？」とお坊さんに聞いたとき、突然子供たちは空からぶんぶんという音を聞いた。青空から翼に赤い点がある小さい銀色の飛行機が飛んできてその家に突っ込むのが見えた。

忽然と家は目の前から消えた。

太郎は久美子を彼女の親のもとに連れ帰った後、家に帰り先祖の写真の前に向かった。

感謝の気持ちで、先祖の太郎に祈った。

心なしか写真の太郎が、良くやった、偉いぞと微笑んでいるようにみえた。

「・・・微笑んでいるように見えた。」と彼は話を終えた。

私達は弁当を食べるのも忘れて彼の話に聞き入っていたようだ。みちこは富美を強く抱きかかえた。

「そしてこの物語が起きたのがこの場所なんですよ。」と彼は言った。

弁当を食べ終わった後、私達はその寺の周りを歩き回った。すると、森につながる小道を見つけた。

富美は「この道を行こう。もしかしたら太郎はこの道を歩いたのかもしれないね。」と言った。

私達はその道を歩いていると、ふと、誰かが私たちの後をつけているような気配を感じた。振り返ってみると、怪しげな男の姿が見えた。もしかしたら彼らは単に私たちの後ろにいただけだったのかもしれないが。

とにかく、私と富美は昨日の夜ねていなかったのどうつらうつらしてきた。

突然私たちの前にある古い旅館が姿を現した。

「こんなところに旅館なんてあったかしら？」とみちこは言ったが、「そんなことはどうでもいいじゃないか。疲れているんだ、さあ入ろう。」と私は言った。

旅館の中に入ると、「いらっしゃいませ。」とお婆さんが言った。「お部屋は用意できています。どうぞ、後についていらしてください。」私達が部屋に入ると、何人かの男の客の声が聞こえた。もしかしたら彼らは、さっき私が見た男かもしれない。しかし、疲れていたのも、お風呂の後私達はすぐ眠りに落ちた。

私は夢を見た。二人の鬼が話している夢だ。鬼の一人が言った。「あの女の子がいるから、俺はこの部屋に入れない。あの子には目に見えない力があるから、俺は何にもできない。」もう一人の鬼が言った。「じゃあ、あの男たちはどうなんだ？」「もう俺が食べてしまった。」

朝になって目が覚めた。

私は森の木の間に横たわっていた。そこは旅館などではなかった。辺りには、骨が散らばっていた・・・。

みちこと富美の姿は無かった。代わりに近くには狐の親子が折り重なるように寝ていた。

木の枝の折れる音がした。そちらの方を向くと、木の間にナターシャが立っているのが見えた。彼女は片方の手の人差し指を自分の唇の前に立てながら、もう一方の手の指先で私に彼女の方へ来るように手招きした。

私が彼女に近づくと、彼女は非常に小さい声で「これ以上日本にいと命の保障ができないわよ。ここにイスラエルに帰るためのチケットがあるから、それをもってすぐに成田に向かいなさい。あそこの木の裏手にジョン・スミスが車を暖めて待っているわ」と言った。

私は「ここに私の妻と娘がいるのだから、この地を離れるわけには行かないだろう。」と言った。

ナターシャは「そこにいるケモノがあなたの家族だとでもいう気なの？正気に返るのよ！とにかく危険で仕方がない状況なんだから、バカなことをやってる暇はないのよ」と言った。

「何と言われようと私は愛する家族を捨てるつもりはない。」

「へえ？そうなの？」と彼女は笑って私の目の前に彼女の手を近づけた。私は気が遠のいていった・・・

意識が戻ると私は飛行機の中にいた。機内放送が「まもなく当機は離陸を開始いたします。ご搭乗の皆様再度シートベルト着用をお願いを申し上げます。ご協力ありがとうございます。」と言うのが聞こえた。

離陸？なぜ私が飛行機の座席に座っているのだ？

私はなぜここにいるんだ？驚きが隠せなかった。

私がどうしようかとうろたえ始めると、周りに銀の鎧を着た大柄の侍たちが現れ「この男を飛ばさせるわけには行かない。彼には私たちと一緒にいくところがあるんだ。」と彼らは言って私を担ぎ上げた。意識が混濁し始め、正気に戻ったときには、私はみちこの家の部屋に戻っていた。

そこでは、みちこと富美とジョン・スミスとナターシャの四人が話しをしていた。ジョン・スミスは椅子に座りいつもの如くパイプを吹かしていた。ナターシャは彼の隣で立っていた。みちこと富美はソファに腰掛けている。

ナターシャはみちこに言った「あなたは単なる脇役に過ぎないのに、いったい何様のつもりなの？この小説のシナリオでは主人公はイスラエルに帰ることにしてあるのよ。何だってその筋の邪魔をするの！」

みちこは「彼は私の夫なんだから、私と一緒にここに残るのが筋ってもんでしょ。」と言った。

富美は「誰かが私のお父さんをどこかへ連れて行こうとしているの？」と言うと、銀の侍が周りの壁から抜け出してきた。

刀の柄に手がかかっているのを見てジョン・スミスは「ちよっ、ちよっと待った・・・歩み寄りの余地はある・・・」

侍たちはそれを聞いて、再び壁に戻っていった。

私は私が小説家なのか、それともナターシャとジョン・スミスの書く小説の主人公に過ぎないのか少し自信が無くなってきた。

いや！ここで弱気になってはいけない。私こそが小説家なのだ。

突然男性が部屋に入ってきた。私は彼の顔をどこかで見たことがある。

「私を覚えていないのですか？」と彼は言った。

「ダビッド・グロス、あなたはまだ見つかっていない。消えてください！」とナターシャは厳しく言った。その男性は消えた。

私は「でも私の部屋の上に住んでいる彼のお母さんは・・・」と話し始めた。

「あなたの部屋の上には、若い女性が住んでいます。毎晩彼女のハイヒールの足音が聞こえています・・・」と微笑んでナターシャは言った。

今私は、みちこと富美と一緒に新宿で幸せに暮している。私達は休日には動物園に行き、白いクマを見ることにしている。私たちの生活は平穏なものとなった。

そこで私は再び小説を書くために筆を取ることにした・・・

# 東京の法律

私はエルサレムの大学で物理学を専攻しているが、物理と日本語を同時に勉強しているのは私一人だけのようだ。

私になぜ日本語や日本が好きなのかと聞かれても答えようがない。私にもその理由は分からないからだ。

大学にはあきらという私ととても親しい友人がいる。彼は日本人だ。私もあきらも二十歳だ。あきはイスラエルが好きで、ユダヤ文化について学んでいる。

ある日私達は一緒にテレビで東京についての特集番組を視聴することになった。画面の中を若い女性たちが自転車で通り過ぎていく姿が映されていた。

私は彼女たちの姿を見て「美しい、こんな女性なら誰とでもいいので結婚したい」と口から言葉が漏れた。

あきは笑いながら「その程度の夢ならすぐに叶えることができるさ。東京には面白い決まりごとがあるんだ。ある独身女性が自転車で男性にぶつかってしまった場合、その女性は相手の男性と結婚しなければならないんだ。」と言った。

私は「本当か！それなら今すぐにでも東京に行くぞ。」と言った。言うや否や私は東京に行く準備をし始めた。時間を無駄にするつもりはない・・・

ある朝私は親と一緒に台所で朝ごはんを食べていた。私の父親は弁護士として働いているので私は「東京の法律」と「国際結婚」のことについて彼の意見を聞きたかった。私は母親にも日本人の女性と結婚することについて考えを聞いておきたかった。

「お父さん、国際法のことについて詳しい？」

「もちろん。」と彼は答えた。

「私は日本人の女性と結婚するつもりなんだけど、どう思う？」

母親は「どこかに頭でもぶつけたの？イスラエルには女性がいないとでもいうつもり？」と言った。

「お母さん、日本の女性は美しいし、子供たちはとてもかわいい。そう思わない？」

「イスラエルの女性であっても問題は沢山あるのにさらに問題を増やすつもりなの？日本人の恋人でもできたってことなの？」と母親は心配そうな声で聞いた。

「まだ日本人の恋人はいないけど、これから日本に行ってみようかな。」

母親は父親のほうを向いて「黙ってないであんたも何かいいなさいよ！」と言った。父親は笑って「日本のきれいなお嬢さんがお前を迎えてくれるとかって考えているわけじゃないだろう？どうやって日本の若い女性と知り合いになるつもりなんだ？」と言った。

「『東京の法律』のことについて知っている？それを利用すればきっと上手くいくよ。」

父親は「『東京の法律』？なんだそれは？」と言った。

私はあきらから聞いたことを父親に説明した。

両親はお互いに見つめ合っていた。やがって二人はお腹を抱えて笑い始め、数分間の間笑いを止めることが出来なかった。私には何がそんなにおかしいのか理解ができなかった。

ようやく両親は落ち着いた。父親は真面目な表情で「確かにそんな法律が東京にはある。お前の計画は素晴らしいと思う。応援するからがんばってこい！」

両親の期待を背負って私は日本に向かうことになった・・・

数日後、私は東京の通りに立っていた。

私はことがそれほど簡単にはいかないことにすぐに気がついた。きれいな女性は自転車の扱いがとても上手で人にぶつけるようなことなどはまずありえないからだ。ある日ある通りで私が写真を撮りながら道を歩いているときのことだった。右を向いてはそちらに向かったり何か面白いものや美しいものを見かける度に不意に立ち止まってそれを眺めたりカメラを向けたりしていた。突然何かが私の腿の辺りを打ちつけた。

そして「ガシャン」という音とそれに続いて女性の悲鳴が聞こえた。私がそちらを向くとそこには倒れた自転車と女性が転んでいた。私はすぐにその女性を抱き起こした。「大丈夫ですか？」と私は言った。彼女は「ええ、大丈夫です」と答えた。その女性は若くてかわいい顔をしていた。ポニーテールにジーンズとブラウス姿だった。目には涙を湛えていた。

私は「私の所為ですね。すみませんでした。」と言った。彼女は「私の不注意です。すみません。」と決まり悪そうに言った。幸いなことに彼女は軽いうち傷程度で済んだようだ。

私たちがぶつかった場所はスターバックスの前だった。私は「代金は私が持ちますのでこのカフェで少し落ち着きましょう。」と言った。

私達は中に入って席に着いた。私は彼女が同意して一緒に来てくれたことがうれしかった。どうやら彼女の名前はけいこというらしい。私達はアイスコーヒーを飲んで少しずつ落ち着いてきた。

私は「もし私のことが気に入らないなら無理して私と結婚する必要はないです。」と言った。けいこは驚いた顔をして「結婚する必要？あなたと？何のことですか？」と言った。「『東京の法律』で自転車で誰かにぶつかったら、その人と結婚することになっているでしょ。」

けいこはさらに怪訝そうな表情をして「どこからそんな法律を引っ張り出してきたんですか？」と言った。

「私は日本人の友達から、東京ではそうなっていると聞いたんですけれども・・・違うんですか？」

けいこはしばらく私を見つめ、やがて微笑んで「実はその法律は存在してはいるのですが、皆が知っているものではないんです。」

私は「あなたがとても気に入りました。もしあなたが私を気に入ってくれたのなら結婚しましょう。日本の人は法律を遵守すると聞いています。」

けいこは笑いをこらえながら「そのとおりですね。今晚私は、私の親にあなたを紹介したほうが良いみたいですね。今晚七時に渋谷のハチ公前で会いましょう。」

私は彼女と待ち合わせの約束をして、これほど上手くいくとは思ひ、とても幸せな気分だった！

私がハチ公前に着いたときけいこは既にそこで待っていた。彼女はきれいに着飾っていた。とても機嫌のよさそうな表情をしていた。

私達は駅の近くのレストランに入った。そのレストランは大きくて高そうなレストランだった。

ある席に二組の年配の夫婦と若い男性が座っていた。

私たちがその席に近づいたときけいこは笑って私の腕に彼女の腕を絡ませながら「こんばんは」と言った。一組の夫婦と男性が無言のまま席を立てて出口の方へ向かった。別の夫婦が彼らを追いかけて「申し訳ございません。」といいながら何度も頭を下げていた。

けいこは私に「取りあえず座って何か食べましょう。」と言った。

後から立った夫婦が戻ってきたとき、私達のご馳走を堪能していた。

その年配の男性が「けいこ、何回私たちに恥をかかせるつもりだ。お前の振舞いが妹たちにどんな影響を与えるかもっとよく考えろ。」と怒鳴った。彼は私をチラッと見て「そこの外人は誰だ？」と問い詰めた。

けいこは「彼が私の結婚相手です。」

彼は「結婚相手？どこの馬の骨とも分からないやつじゃないか？」

けいこは「東京の法律によると、私は彼と結婚する義務があるのよ。」と言った。

「東京の法律？なんだそれは？」

けいこの両親は私たちの説明を聞いた後顔を見合わせ、首を小さく横に振った。

けいこは早口で「皆がその法律を知っているわけではないわ」と言った。

「何をバカなことを！」

突然、先程出ていった方の年配の男性が数人の若者たちをつれて入ってきた。彼はけいこの父親に近づいて「人に恥をかかせておいて無事にことがすむなどと考えるなよ。」と言い、私の方を向いて「これは俺たちの問題だ。命が惜しければこの場からさっさと立ち去れ。」

私は「これは俺の問題そのものだ。知らないかもしれないがイスラエルの特殊部隊は捕虜を捕らえるようなことはしない。その意味は分かるだろ！俺はその部隊員の一人だ。」

それを聞いて相手の年配の男性はけいこの父親に「これで終わったと思うなよ。まだかたは着いていない。」そう言って彼らはレストランから出ていった。

けいこの父親は私に「本当に君は特殊部隊の一員なのか？」と聞いた。私は微笑んで「まさか。軍役についてのことすらありませんよ。」

彼はけいこに向かって「彼と結婚しろ。」と言った。

私が日本人の妻を連れてイスラエルに戻ったとき、私の両親は「東京の法律」が如何に効力のあるものかを理解したようだ。

時折私とけいこと一緒に遊びに出かけると、私の母親は孫娘ゆみの面倒を見る幸せな祖母へと変身する。

あきはどうしたのでしょうか？

あきは「東京の法律」の結果を見て、すぐに東京へ飛んでいった。自転車に乗っているきれいな女性を探すためだ

# 日本から愛を込めて

「お客様、どうかなさいましたか？」

薬局の女店員が尋ねた。

「子供が生まれたんですね。たまにあることですよ。必要なものはすぐに揃いますから。そんなに心配しないで。」

私は感動と緊張で震えていた。それは女店員が考えたこととはまったく違っていた。

実は、私は今朝、私の家のドア横で泣いている赤ん坊を見つけたのだ。

この赤ん坊はどうやってここに来たのだろうか。

トキコのことを思い出すまでに数分かかった。ここからそう遠くないところに住んでいて半年前に引っ越していった女だ。トキコは小柄で美しいが、だらしない生活を送っている日本人の女だった。そしてある日私のベッドで目覚めた。

私がこの赤ん坊の父親なのだろうか。わからない。違うかもしれない。しかし、そんなことは重要ではなかった。この美しく雪のように白い小さな日本人の子供はすでに私の腕の中にいた。この子をユキ、日本語で雪という意味である、と名づけた。(私はロシア軍を除隊後、大学で日本語を学び、ロシアでの‘人生’では、日本語通訳として働いていた。)

私はどこかの誰かに、このかわいい赤ん坊をゆだねることも、警察に行くこともまったく考えなかった。

私はこの子をすぐに自分の娘とみなした。

しかしこの子に何をすればいいのだろうか。考えるまもなく隣人に電話した。彼女はイレーナ・セルゲイブナという名のそれほど若くないロシア人の女で、私と同じ建物に住んでいた。私は彼女がどうして、そしてどのようにしてイスラエルに来たのかは知らなかった。彼女はやせていて、肌も透けるように白かったが、強く安定感のある目と権威ある声の持ち主だった。

イレーナ・セルゲイブナは啞然とも、驚きもしなかった。彼女はまったく自然に、赤ん坊を手に取り、私に“必要なものを買いに” 薬局に行かせたのだった。

「乳児用ミルクと哺乳瓶、それにおしめを忘れないようにね。」

と彼女は日常的で簡潔な響きで言い、

「お金はあるんでしょう？」

と付け加えた。

私が、突然日本人の赤ん坊の父親になったと聞いたとたん、「汚い日本人女に引っかかったのね…」と私の恋人は怒鳴りだした。

そしてすぐに私の人生からいなくなった。私は幾重もの凍えるようなイスラエルのお役所仕事をくぐり抜け、この子を正式に養女にすることに成功した。これはまさに奇跡といってもよい。イレーナ・セルゲイブナは特に忙しい女性ではなく、赤ん坊を育てる私の手助けをしてくれた。私は忙しく働き、そして家に帰ると、すべての時間をこの子とすごした。イレーナ・セルゲイブナは私の家族の一員となっていた。そしてユキにとっての本当の家族はといえば、悲しいことに、この時点ですでに存在しなかったのである。そして私たちはこのように生活していたのである。

「アレックス、この子には母親が必要です。あなたは結婚しなくてははいけませんよ。

この子はもう三歳になるんですよ。」



ある日イレーナ・セルゲイブナは言った。  
もちろん、彼女は正しかった。私にもわかっていた。だから誰かふさわしい女性を探した。しかし、女たちは、ユキの存在を知った途端にいなくなった。誰もイスラエルで日本人の子供を育てたくはなかったのだ。  
私はユキには日本人の母親が必要だ、と最終的な結論を出した。  
エルサレムには、私たちにとって適切な日本人女性がいなかった。大学で学んでいる数人の学生、アメリカ人の金持ちの夫を夢見るセックス狂の女たち。ほかにも日本人女性はいたが、誰かの妻たち…すべて適切ではなかった。ふさわしい日本人女性は、日本で探さなければならなかったのだ。  
インターネットで出会い系サイトやチャットを見つけ、探し始めた。  
もちろん誰にも子供のことは話さなかった。主に軽いおしゃべりとともに自分のことを話した。誠実な男だと。  
長い間、考えに見合う人を見つけることはできなかった。あの日、エミコに会うまでは。

竹田一郎は近所の人が思っていたようには、農林水産省で働いてはいなかった。ここ十年の間、彼は日本の諜報機関の、計画実行部隊の指揮を執っていたのである。森本紘子もまた、彼女の母親が思っていたようには、広告代理店で働いてはいなかった。彼女は、最も複雑で責任ある任務をこなす熟練した諜報員だったのである。  
今日、そのような任務のひとつを受けるために彼女はヘッドオフィスに招集された。隊長のオフィスに入る際、彼女は一礼をした。

「失礼いたします。」

「おう、久しぶり。」

隊長は応え、

「元気だったか？」と続けた。

ようやく彼は目の前の書類から視線をはずし、若い彼女のほうへ目を向けた。

紘子を見る度に、彼は神戸での、あの恐ろしい震災で亡くなった彼の妻であったユミ、後期で繊細だった妻を思い出すのである。

「紘子ちゃん」

彼はいつも優しく、家庭的な温かみを持って彼女に話しかける。

「今夜、イスラエルに飛んでもらうことになった。」

彼女は緊張を隠せなかった。日本に住んでいたイスラエル人と彼女との、数年前に悲しい結末で終わった激しい恋愛を竹田は知っていた。残念なことに、すべて終わったことである。イスラエル人は突然祖国に帰り、紘子を苦しみに置き去った。現在まで心の傷は癒えておらず、時々彼女は独り夜に泣いていた。

「一週間後に中国人物理学者の一行がイスラエルを訪れる。そのうちの一人がこいつだ。」

隊長は、紘子に写真を手渡した。

「彼は物理学者でも中国人でもない。彼は北朝鮮のスパイで殺人犯だ。彼はパレスチナ人への核爆弾の契約書を携行している。しかし、それは私たちの目的ではない。

我々と彼には他の因縁がある。彼は去年ソウルで我々に少なくない問題を起こした。」  
紘子はそれが何であるか知っていた。去年ソウルで、日本の諜報員が数人死んだのである。

「我々は中国では彼に接近することができない。ましてや北朝鮮では。イスラエルで接近するしかない。彼を殺して戻ってこい。期間は一週間だ。」

唐突に隊長は笑みを浮かべ、  
「この任務は非常に変わった状況下でおこなわれる。」  
彼はインターコムを押して言った。  
「田中君、入ってきたまえ。」  
間もなく部屋に非常に若い将校が入ってきた。通常の挨拶を交わし、絃子の顔を見たとき、なぜか彼の顔は紅潮した。  
「田中君、報告してくれ。」 竹田は命令した。  
「半年前、」  
咳払いの後、田中は始めた。  
「日本の出会い系サイトに、日本語を完璧に話すイスラエル人男性が現れました。彼は日本の若い女性と知り合いになろうとしていました。私は、隊長の命令の下に、彼とエミコという名前で交信し始めました。」  
彼は絃子のほうをチラッと見て、再び顔を紅潮させた。  
「これがその交信記録と、その人物の写真です。」  
彼は礼をして、隊長にバインダーを手渡した。  
「もう下がっていいぞ。」  
隊長は話を締めた。  
田中がドアを開けた後、竹田隊長は写真をバインダーから取り出し、笑みとともに彼女に差し出した。  
「これがその男だ。エミコちゃん、君は彼のところに行くのだ。フライトは今晚だ。彼はテルアビブ空港で、君と会うことになっている。彼は君の外見を知らないし、声も一度も聞いたことがない。ここ最近の交信記録から判断すると、彼は君を見ることさええないのに、君にどうしようもなく恋をしているらしい。そして君が来るのを首を長くして待っている。」  
絃子は長い間写真を見つめていた。  
「任務終了後には、彼を消さなければならないのは言うまでもない。」  
隊長はドアをあごで示した。 — 任務説明は済んだのだ。  
絃子は一礼をして、隊長の部屋から出て行った。

アレックスは、チェチェンで狙撃手として兵務していたことを、出会い系サイトで自慢した際に日本の諜報機関の視野に入ってしまったのである。最初は彼を徴用しようと考えられていたが、事がこのように速く進展したため時間が足りず、この作戦を知らさないまま、彼を使うことに決められたのである。

今日、イスラエルの諜報機関のとある部隊の朝礼に、アジア人の風貌をした誰も知らない男が一人出席していた。  
「この人は、イーガル、モサドからの我々の友人だ。」  
ニッシムが彼を紹介すると、皆が笑みを浮かべた。モサドの“友人”には本名はない。  
「すぐに彼が興味深い話をしてくれるぞ。イーガル、どうぞ。」  
イーガルは軽い訛りのあるヘブライ語で話はじめた。  
「明日、テクニオン大学の招待により、中国人物理学者の一行がこの国を訪れる。そのうちの一人が、ワン・リーだ。我々の情報ソースによるとワン・リーは物理学者でも中国人でもない。彼は北朝鮮の諜報員、パク・チェンだ。彼は北朝鮮からパレスチナ人への武器売却の契約書を持ってくる。どうやら、中距離ミサイルか核爆弾らしい。」

パレスチナ人は核爆弾へはどのような対価でも支払うつもりでいる。皆も知っているように使い道があるからな。一方、北朝鮮は飢餓状態下にあり、金が必要だ…」  
少しの静寂のあと、ニッシムが言った。

「我々は、このパク・チェンを尾行しなければならない。我々は彼を消すことはできない。なぜなら、彼は“中国人物理学者”であり、我々は中国とは既に十分な問題を抱えているからである。しかし、パレスチナ人と彼との取引を白紙に戻すことは断然可能である。誰がこの件を処理するかを決定し、次の事項に移ろう。」

ニッシムはイーガルに聞いた。

「他に付け加えることはあるかな？」

「はい、友好的なソースから、なぜか日本の諜報機関が彼、パク・チェンを追っているという情報を受け取った。既に日本は二度にわたって彼を消そうとしたらしい。しかし、二度とも失敗に終わっている。イスラエルでも、今回も実行しようとするかもしれない。」

「可能性は低いが、とにかく我々は彼の保護には回らないし、ましてや万が一彼に何かあった場合、彼の死を悲しむことも我々はしないだろう。」

飛行機はベングリオン空港に着陸した。紘子は入国管理審査を難なく通り、出口に向かった。彼女には任務は難しいこととは感じられなかった。ただ、彼女は、交信記録に窺える彼の人物と写真が気に入りに、男を殺す気がおきなかった。

アレックスはエミコに会うにあたり、子供と彼女とを紹介する、最良の方法について長い間迷っていた。写真も見ずに、若い女性をここに招待したことは早急すぎることで彼は知っていた。もちろん、エミコの外見は気にかかっていたが、エミコは自分のことを“細い”そして“かわいい”と書いていた。しかし、その後ろには何が隠されているのだろうか。ほとんどの日本の女性が“細い”し“かわいい”のである…もし彼女が不細工だったら？そしてもし、お互いのことが気に入らなかったら？

「アレックス、大丈夫よ、そんなに心配しなくても。」

イレーナ・セルゲイブナは彼を安心させるように言った。

「最悪の場合、彼女はしばらくの間あなたのところで過ごして、日本に帰ればいいのだから。」

エミコを迎えるためにユキを空港に連れて行くことに決まった。

「すぐに決まるだろう。」とアレックスは考え、イレーナ・セルゲイブナは彼に同意した。

しかし、誰が来るのかをどのように子供に説明しようか。さらにもうひとつ問題があった。実際のところ、ユキは日本人女性に会ったことも、接触したこともなかったのである。初めての日本人女性であるエミコの到来に、どう反応するだろうか。

イレーナ・セルゲイブナは素早く、いつものように決然と行動した。

「私たちのところに、とてもやさしいお姉さんがくるんだよ。」

彼女はユキに伝えた。

「お父さんと一緒にその人に会いに行きなさい。もしおまえがそのお姉さんのことを気に入ったら、その人がおまえのお母さんになるんだよ。」

イレーナ・セルゲイブナの話した大胆な内容から立ち直ったアレックスは、いつものように子供のために日本語で訳して伝えた。彼は、ユキが日本語をロシア語と同じ位理解するよう努力しており、すべてを二つの言語で説明していた。

絃子は飛行機の搭乗者の中で唯一の日本人だった。だからアレックスにはすぐにその人が彼女だとわかった。突然の幸福に心臓が喜びに打ち震えた。彼女は美しかったのである。

ユキは父親の腕に置かれている大きな花束の間隙から覗いていた。絃子を見た瞬間に、ユキは、彼女が“やさしいお姉さん”なのだとわかり、アレックスの腕から離れた。絃子もすぐにアレックスを見つけた。彼が腕に小さな日本人の女の子を抱いているのを見たとき、彼女はその場で固まり、驚嘆した。複雑で厳しい決断を下すことのできる経験ある熟練の諜報員が、今混乱し、どのように対応すればよいのかわからなかったのである。

ユキはすぐに彼女の元へ「おかあさん！おかあさん！」と叫びながら走って行った。そして、そのとき、どう対応すればいいのかわからない諜報員絃子は、すぐに何をすればよいのかよくわかっている普通の女としての絃子へと変わったのである。彼女はこのかわいい女の子を抱き上げ、優しく抱きしめた。

「わあ、可愛い。お名前は？」

絃子は囁いた。

今まで知らなかった何かが、彼女の喉にこみ上げ、彼女は喋ることができなかった。涙が頬を流れだした。突然の感情の昂ぶりに、絃子は泣いていた。

その朝、私たちはナハラット・シブアにあるイタリアンカフェに行った。ユキはエミコのひざに座り、アイスクリームを一心不乱に舐めていた。その顔は幸せに満ちていた。エミコは子供を優しくなでながら何かを彼女の耳に囁いていた。イレーナ・セルゲイブナと私は、彼女たちから目をそらすことができず、取り憑かれたように見つめていた。私たちは、エミコが来てからたった四日しかたっていないのに、何年もこうやって共に生活してきたような理想的な家庭を垣間見る思いだった。

「お母さんね、ちょっと一時間位あなたとお別れしなきゃならないの。」エミコが言った。

「一時間くらい？」ユキが聞いた。「どこに行くの？」

「お友達に会わなきゃいけないの。彼女に会ったら、すぐに帰ってくるわ。さびしいと思う間もないわよ。」

「アレックス、ほらそこに中国人労働者があんなに集まっている。いったい何をしているんだろうね。」イレーナ・セルゲイブナは窓を見て言った。

私は彼女の目線を追って、通りの方を見た。カフェの入り口の横に、作業服を来た中国人が何人か立っている。イレーナ・セルゲイブナの言ったことを日本語に通訳してエミコに伝えた。エミコも窓の方を見た…彼女は極端に様相を変えて震えだし、まるで小さくなったかのようにだった。目つきが厳しくなり、顔つきが石のように固くなった。ユキは何か恐ろしいことが起こっていることを理解したのか、母親の方へ問うような目線を向けた。

「イレーナ・セルゲイブナにユキをすぐに家に連れて帰るように言ってちょうだい。」

エミコは慎重かつ冷静な声で言った。

「どうかしたのか？」

私は聞いた。

「あの人たちは中国人じゃないわ。」

エミコは言った。

「北朝鮮の諜報員よ。私を連れに来たの。」エミコは言った。

「何のことを言っているんだい？ どういうことだ？」

「ここはすごく危険だわ。イレーナ・セルゲイブナは早くここからこの子を連れてって。」

イレーナ・セルゲイブナは日本語での応酬を、注意深く緊張した面持ちで聞いていた。そして、私とエミコに問いかけるような視線を送った。彼女は何か重大なことが起こっているのを悟ったのだ。

「イレーナ・セルゲイブナ、窓の外にいる人たちは彼女を連れに来た北朝鮮の諜報員で、ここに残るのは危険だとエミコは言っている。ユキを連れて家に帰ってくれないか。私…私は何がなんだかわからない。」

「なにを理解する必要があるんだい？」

イレーナ・セルゲイブナは感情を爆発させた。

「あなたのエミコは日本のスパイで、彼らは、彼女を殺しにここに来たんだよ。彼女はあなたのことを隠れ蓑として利用しただけだよ！…私たちみんなを騙したんだよ。」

イレーナ・セルゲイブナはこの日本人の女に怒りの目をむけて言った。

「少なくともこの子には情けをかけたんだね。」

「なんて言ったの？」エミコは素早く聞いた。

私は通訳した。

「すべて事実よ。」エミコは言った。

「????」

私は何も言えなかった。エミコがスパイだって？

イレーナ・セルゲイブナは急に黙り込んだユキを抱き上げた。

「アレックス、気をつけて。彼女を信用しちゃいけないよ…心配しないで、この子は大丈夫だよ。私がこの子を守るから。」

彼女は日本人の女を振り返ることなく、カフェから出て行った。

彼女とユキが中国人労働者(もしくは北朝鮮のスパイ?)の横を通り過ぎたとき、そのうちの一人が、彼女たちの後を気づかれぬようにつけていった…

「エミコ、何が起こっているか私に説明してくれ。」

「アレックス、私はエミコじゃないの。私は日本の諜報員。名前は絃子。」

彼女は私の目をまっすぐ見た。そして私は、彼女がいま言ったことがすべて真実だと悟った。

「この任務を開始したとき、あなたを愛してしまうなんて知らなかったの。ユキの存在も知らなかった…」

彼女は私の手をとって続けた。

「あなたを愛しているの…私、本当にあなたをととても愛しているの。お願い、信じて。もし、ここから生きて出られたなら…私、証明して見せるから…」そう言った後絃子は黙った。彼女は涙を止めることができなかった。

窓の外の朝鮮人を見た。全員がこちらをじっと見ていた。

「君はここで何をしなきゃならないんだ？君はここに何のために送り込まれたんだ？なぜあの朝鮮人たちは君の後を追っているんだ？」

「彼は北朝鮮から、パレスチナ人への核爆弾の売却契約書を持って来ているの。」

核爆弾がパレスチナ人の手に渡るだって！絃子は正しい。彼等を消さなければならない。

「私が君の手助けをするよ。」

絃子に言った。

「どうしたらいいんだい…なにをするべきなんだ？」

絃子は微笑み、私の手を握り締めた。

「私はここから脱出することができないわ。」

彼女は窓をあごで示した。

「あなたはシオン門まで走って行って。そこに私の仲間の一人が待っているわ。絃子があなたを送ったと彼に伝えてちょうだい。何をすべきかは彼が説明してくれるわ。」

「どうやってその人を見つければいいんだい？」

「すぐに判るわ。彼は日本人よ。」

「君はどうするの？」

「心配しないで、あの朝鮮人たちが私を捕まえることはできないから。」

「愛しているよ。」

私は彼女に言った。

「しっかり、愛しい絃子。がんばれよ。」

私は席を立ち、調理場から非常口へと向かった。

イレーナ・セルゲイブナはゆっくりと家の方へ歩いていった。彼女はユキの（と）手をつなぎ、彼女に何かを話していた。子供は注意深く話を聞き、時折質問をするために彼女をさえぎった。

彼女達からそう遠くない後ろには“中国人労働者”がゆっくりと歩いていた。

チョン・ハイ諜報員は単純な指令を受けていた。それは、女と子供を殺し、いる可能性のある追手を撒き、最初から決められていた場所で、残りの仲間と合流することであった。彼の右手には刃を袖に隠したナイフの柄が握られていた。チョンは静まり返った裏通りを見ると、歩調を速め、素早く彼の獲物へと向かって行った。彼女たちとの距離が数メートルまで近づいた時、彼は行動に移した。その瞬間...

女がさっと振り向いた。雷のような速さで、彼女は右手で彼の喉元に手刀を入れた。

チョンは手を動かしたり声を出したりする間もなくその場に倒れ込んだ...それはKGB諜報員養成学校の指導部隊長であった、イレーナ・セルゲイブナのもっとも得意とする攻撃だった。彼女はユキの方へ素早く振り返り、倒れているチョンを彼女の体の影へと隠し、微笑みながら大きな声で話しかけた。

「早く行きましょう。おうちにとってもおいしい物があるんだよ。」

シオン門の近くには誰もいなかった。歩道にそう大きくない白い“トヨタ”が停められているだけだった。私はその車に近づいていった。車には運転手である若い日本人男性が座っていた。というより、彼は前部座席でほぼ横たわっている状態だった。私は車のドアを開けた。その青年は青白く、目を閉じており、彼の服には血のシミがついていた。

「どうしました？大丈夫ですか？」

私は彼に声をかけた。彼は目を開けると、数秒間私の方を凝視し、突然笑みを浮かべた。

「アレックス...」

彼は小さい声で言った。彼はどうして私の名前を知っているのだろうか。しかし、躊躇している間はなかった。

「絃子にここに来いと 言われたんだ。」

日本語で彼に答えた。

「彼女は来ることができない。私が代わりにしなければならないことをする。」

青年は私の方を見て、目を伏せて言った。

「聖墳墓教会... その二階の礼拝堂... 十一時ちょうどに彼は教会から出てくる。」

私は時計を見た。十一時十分前。急がなければ。

「あのさ、」

彼は目を開け、私の方を皮肉な目で見ながら、突然小さな声で言った。

「君とメール交換をしていたのは僕だ…僕がエミコだ…」

彼の頭がうなだれ、彼はとうとう意識を失った。

私の頭の中ではすべてが混沌としていたが、今これらを明白にする時間はなかった。

十一時に間に合うように全力で走った。

とうとう聖墳墓教会の崩れかけはじめている古い礼拝堂に着いた。一息に二階まで飛ぶように駆け上った。

しかし、そこには何もなかった！

「ああ！そうだった、彼らの言う二階とは、私たちの三階なんだ。」

とひらめき、さらに続く階段を急いで上っていった。そこには、壁の割れ目に光学スコープを装着した狙撃銃が置かれていた。

十一時を知らせる教会の鐘が鳴り出した！

私は銃を掴むと安全装置をはずし、教会の門へと向けた。

私の手は少し震えていた。そう、今までの走りのせいで。しかし選択の余地はなく、失敗は許されなかった。今、大切なのは呼吸だけだ。穏やかで、深く、落ち着いた呼吸…

突然、教会の高い門が開き、まったく似かよった五人の中国人が出てきた。同じ顔、短い髪型も同じ。五人とも全く同じ白いシャツ、灰色の背広を着てネクタイを締めている…

いったい誰が北朝鮮のスパイなのだろう？

躊躇している暇はなかった。もし、パレスチナ人が核爆弾を手に入れたら…

ああ！私が刈ってやる！こいつら中国朝鮮人等を五人とも！

銃の照準を合わせた。

しかし、突然二人のアラブ人が中国人の一人のもとへ走って来た。笑いあい、握手しあい、お互いに肩をたたきあいだした…

「やるな、日本人！」

ニッシムはとても満足そうに言った。

「結局、彼等はあいつを仕留めたな。あの野郎を。」

「日本人ではありません。」

副隊長のガビが答えた。

「なに！」

「銃には、我々の一員の指紋が残っています。ほら、見てください。」

ガビはニッシムに幾枚かの書類を渡した。イスラエル国防軍で兵役した者の指紋がそうされるように、アレックスの指紋もまたイスラエル諜報機関のファイルに残っている。

「逮捕しますか？」

ガビは尋ねた。

「どうして逮捕するんだ？核爆弾からイスラエルを救ったからか？」

「しかし、かれは日本の諜報員ですよ！」

ニッシムは笑みを浮かべるだけだった。

「ガビ、日本人に何の恨みがあるんだ？今晚は‘さくら’に行こう。寿司を食べたことがあるかい？この男のことをもう少し知りたいな。」

「絃子ちゃん、君の旦那さんのことをもう少し知りたいよ。」  
と竹田隊長は言って、悪戯気に目を少し細めた。  
「ところで、彼は日本で何をするつもりなんだい？」  
「彼は東京大学で日本文学を学びたいと言っています。」  
「日本文学？そうか…君たちの娘はどうしてる？ユキっていったよな？」  
「ユキは元気にはしてます。隊長、弟が生まれるんです。」  
絃子をゆっくりと眺めた竹田の目に、小さな炎が宿った。  
絃子がドアを閉めて出て行くと、彼は電話をかけて言った。  
「絃子はしばらくの間参加しない。パリに行くのは山田だ。」  
それは命令だった。約半時間後には、山田はすでに隊長のオフィスで必要な説明を受けていた。

竹田一朗が家に帰ったとき、イレーナ・セルゲイブナは彼の一番好きな料理であるすき焼きを作り終わっていた。  
もちろん、彼女は本物の日本の妻である“家内”になったわけではないが、彼女は夫にロシア女だけが与えることのできるものを与えた。  
そして、侍、竹田一朗は毎夜笑顔の下でロシアを征服しているのだった。



